

序

我が國の長連歌の發生や發達には、漢土の聯句に學ぶ所が有つたであらうと、言はれてゐる。しかし、それが如何なる程度のものであるかについては、まだ十分に検討せられてゐない。私から述べて行くことも、まことに貧弱な調査報告にすぎないが、聯句といふものを少し調べた事と、連歌に及ぼした聯句の影響といふものが、從來考へられてゐたよりも、もつと影のうすいものであるといふ事。又、我國に於ては、聯句そのものが、却つて連歌から非常な影響を受けて居るといふ事實などについて、聊か報告し得るまでになつた事は、私の喜びとする所である。

漢土の聯句について、大體唐代までのものを見ると、その聯句形式には、大別して二種のものがある。所謂柏梁體の聯句と、普通の詩の形態に似通つたものである。又、その行はれ關心の持たれて居る程度から言へば、中唐以前には、まことに作品が乏しいのに比べて、中唐から、俄

かに作品が多くなつて來てゐる。漢土で、「聯句、古、此法なし。退之より斬新開闢す」といふ見方をする説があるのは、韓退之がこれを多く作り、それ以後、聯句を弄ぶ詩人が多くなつた事によつたものだと思ふ。平安時代に我が國で愛讀せられた『白氏文集』の中にも、白樂天と彼の交友によつて作られた聯句が相當に收められてゐる。それで、單純に考へると、平安時代の詩人たちが作つて居た聯句は、白樂天などの聯句を學んだものであらうと想像せられ易いのだが、事實を見ると、どうもさうとは考へ難いのである。『江談抄』に載せられてゐる作品には、もう既に韓退之や白樂天などとは違つた色彩が濃厚で、當時我が國の歌人たちが翫んでゐた短連歌からの影響が、いちじるしく見られるのである。又、長連歌の連ね方を見ても、聯句からの影響と思はれるものは、極めて乏しい。そのことは、退之や樂天などの唐の聯句をしらべて行くと、益々はつきりとして來るのである。概言すると、我國の連歌に及ぼした影響としては、彼地の聯句そのものよりも、一般的な漢詩文の影響の方が多いと見るべきだと考へられるのである。それで、以下、先づ漢土の聯句そのものの發生や展開などについて、私の調べ得た所を報告し、次に日本の連歌の發生展開の相を調べて、それに及ぼした聯句の影響と思はれるものを検討して行き、第三には我が國に行はれた聯句が、如何に連歌の影響を受けて日本化せられてゐたかを報告し、第

四には聯句と連歌とが結合して出來た和漢連句といふ新文藝を紹介し、それが又連歌に大きい影響を及ぼしてゐることについて述べ、最後に室町時代の聯句についての聊かの管見を報告しようと思ふのである。

本書を草するに當つては、山田孝雄博士の連歌史（岩波版日本文學講座所載）、福井久藏博士の連歌の史的研究、などから、いろいろの教へを受けた。又、漢土聯句の資料集めには小西甚一君の一方ならぬ助力を得た。ここに記して深く學恩を謝する次第である。

尙、本書は、文部省からの人文科學研究費補助による研究であることを附記し、謝意を表す。

昭和二十三年十二月

著 者 識

目次

第一章 漢土に於ける聯句	一
一 柏梁臺聯句	五
二 六朝時代の聯句	九
三 唐時代の聯句	六
(一) 初唐・盛唐時代	六
(二) 中唐時代	六
(三) 太曆時代の聯句	六
(四) 元和長慶時代の聯句	六
第二章 平安時代の日本聯句	七
第三章 短連歌の性格とその發展	九
一 機智問答的の性格	九
二 下句起しの形式の發生	九

三 各句の獨立性の唱道…………… 六〇

四 對句的表現の短連歌…………… 六四

第四章 鎖連歌…………… 六九

一 鎖連歌の發生の問題…………… 六九

二 鎖連歌に及ぼした聯句の影響…………… 七九

(一) 句數…………… 七九

(二) 韻といふ名稱…………… 八〇

(三) 賦物にうつして…………… 一〇一

(イ) 賦物は韻字の代用

(ロ) 賦物の起因——物の名の歌

(ハ) 「物の名の歌」と漢詩の離合・雜名詩

(ニ) 上賦・下賦の發生と新しい韻字的意義

三 懷紙の形式…………… 二九

四 無心連歌より有心連歌へ…………… 三三

五 連歌式目の發生…………… 三四

第五章 聯句に及ぼした連歌の影響…………… 三九

一	王澤不渴抄に見える鎌倉中期の聯句	二五
二	聯句の連歌化的傾向	二四
第六章	連歌と聯句との結合としての和漢連句	二四
一	和漢連句	二四
二	和漢連句の心得	二六
三	和漢連句の式目	二五
四	和漢連句の實例の吟味	二六
第七章	室町時代の聯句管見	二六
第八章	結語	二七

第一章 漢土に於ける聯句

清の趙翼の『陔餘叢考』廿三に、聯句を論じて

雪浪齋日記云。退之聯句、古無此法、自退之之斬新開闢。苑景文亦云。昌黎聯句、有跨句

者。謂連作第二第三句。如城南等作是也。有一人一聯者。如會合遺興等作是也。有

一人四句者。如有所思等作是也。漁隱叢話則云。謝宣城有聯句七篇、陶淵明有聯句一篇。

是六朝已有之。然聯句究當以漢武柏梁爲始。文心雕龍曰。聯句共韻柏梁餘製是也。

と古人の説をあげ、次で趙翼の意見として、

今按、六朝聯句、亦不止陶謝二公。南史、謝晦將被戮、與兄子世基聯句。世基詩曰。

偉哉橫海鱗 壯矣垂天翼 一旦失風水 翻爲螻蟻食

晦詩曰。

功遂侔昔人、保退無智力、既涉太行險、斯路信難陟。

梁元帝與武陵王紀交兵、帝作詩曰。

回首望荆門、驚浪且雷奔、四鳥嗟長別、三聲悲夜猿。

紀之子聞正被收在獄、乃連句曰。

水長二江急、雲生三峽昏、願貫淮南罪、思報阜陵恩。

又、沈懷文傳、隱士雷次宗還廬江、何尚之設祖餞、文士畢集為連句詩、懷文所作尤美。

北史、薛孝通等、在孝文帝前、以忠為韻、元勰曰。

聖主臨萬機、享世永無窮。

孝通曰。

豈惟被草木、方亦及昆虫。

元勰曰。

朝賢既濟々、野苗又荒々。

帝曰。

君臣為魚水、書軌一華戎。

孝通曰。

微臣信慶渥 何以答華嵩

此皆六朝人連句也。但其時曰連句不曰聯句耳。方勺泊宅編、又引劉中壘謂泥中中露、衛二人名式微之詩、蓋二人所作、以爲聯句所起。此未免附會。至古人聯句、大概先分韻而後成詩。梁孝武帝華光殿聯句、曹景宗後至、詩韻已盡。沈約以所餘競病二字、與之曰、所餘二韻則分韻後之餘也。(中略)可知古人聯句、先探鈎韻字、各據所得、循序賦之。正如後世韻格也。

と述べてゐる。(因みに、梁の武帝の華光殿聯句は、今日現存してゐないが、沈德潛の「古詩源」卷十三によると、曹景宗の條に

光華殿侍宴賦競病韻。景宗破魏師凱旋。帝於光華殿宴飲聯句。景宗啓求賦詩。時韻已盡、惟餘競病二字。

景宗探筆而成。帝深歎賞、朝賢驚嘆。

去時兒女悲、歸來笳鼓競、借問行路人、何如霍去病。

と見えてゐる。これによれば、一人が五言四句宛を詠じた聯句かと思はれる)又、明の曾伯魯の「文體明辨」卷十六には、聯句詩といふ名目で

按、聯句詩、起、自、柏梁。人各一句、集、以、成、篇。其、後、宋、孝、武、華、林、曲、水、梁、武、帝、清、暑、殿、唐、中、宗、內、殿、諸、詩、皆、與、漢、同。唯、魏、懸、瓠、方、丈、竹、堂、謠、舞、則、人、各、二、句、漸、變、前、體。自、茲、以、還、體、遂、不、一。有、人、各、四、句、者、如、杜、甫、與、李、之、芳、及、其、甥、宇、文、或、所、作、是、也。有、先、出、一、句、次、者、對、之、就、出、一、句、前、人、復、對、之、者、如、韓、昌、黎、集、所、載、城、南、詩、是、也。然、必、其、人、意、氣、相、投、筆、力、相、稱、然、後、能、爲、之。否、則、狗、尾、續、貂。難、乎、免、於、後、世、之、議、矣。

と論じてゐる。これ等の所説が、大體に於て漢土に於ける聯句の起源や性格を述べた代表的なものであらう。漢土に於ては、聯句詩などは、詩の雜體中の極めて一部のなものであつて、殆んど問題視せられても居ず、従つて聯句に關する研究などは、全く興味を持たれてゐない、といふのがその實狀である。我國に於ても、これが連歌に關係を持つといふ事實がなければ、恐らく何人もかやうな研究などに着手する者はないであらう。又、實際に、從來かやうな問題について研究の手を染めた先人も無かつたのである。

一 柏梁臺聯句

漢土の聯句は、柏梁臺聯句を以てその最初と見るべきものである事は、前述の『陔餘叢考』の説や『文體明辨』の説で明かである。その作品を、『文體明辨』によつて示すと

日月星辰和四時 武帝

驂駕騶馬從梁來 梁孝王

郡國士馬羽林材 大司馬

總領天下誠難治 丞相石慶

和撫四夷不易哉 大將軍衛青

刀筆之吏臣執之 御史大夫倪寬

撞鐘伐鼓聲中詩 大常周建德

宗室廣大日益滋 宗正劉安國

周衛交戟禁不時 衛常路博德

總領從宗柏梁臺 光祿勳徐自爲

第一章 漢土に於ける聯句

聯句と連歌

平理請讞決ニ嫌疑

廷尉杜周

修飾輿馬待ニ駕來

太僕公孫賀

郡國吏功差ニ次之

大鴻臚壺充國

乘輿御物主治之

少府王溫舒

陳粟萬石揚巨箕

大司農張成

徼道官下隨討治

執金吾中尉豹

三輔盜賊天下危

左馮翊盛宣

盜阻南山爲民災

右扶風李成信

外家公主不可治

京兆尹

椒房率更領其材

詹事陳掌

蠻夷朝賀常舍其

典屬國

柱杵構櫺相枝持

大匠

枇杷橘栗桃李梅

大官令

走狗逐兔張罟罟

上林令

齧^ニ妃^ノ女^ヲ脣^ニ甘^キ如^シ飴^ト 郭舍人

追^テ窳^ク詰^ム屈^ム幾^ク窮^ム哉 東方朔

の如きものであり、その前書きともいふべきものには、「漢武帝元封三年、作^ル柏梁臺^ヲ、詔^シ群臣二千石有^テ能^ク爲^ス七言詩^ヲ、乃得^ル上^ニ坐^ス」と記されてゐる。

これは、武帝以下二十四人の者が、それぞれに一句づつを連ねた、七言二十四句の合作的作品である點、まさに聯句といふ名稱にふさはしいものである。韻は平聲の灰の韻と支の韻とが交へ使用せられてゐるが、漢土の中古韻では、灰の韻と支の韻は、後世の如く區別せられてゐないで、通用して居たのであるから、一韻を以て全篇が貫かれてゐると考へるべきである。内容を見ると、各人が、それぞれ自分の職掌に關係のあるやうな事柄をのべ合つてゐる所も、面白。例へば丞相は、「天下を總領して治めることは、まことに容易なわざでない」といひ、大將軍は、「四夷を和らげなつける事は、なかなか困難だ」とのべるが如きものである。従つて、一々の句は、別に前句の作者の言ふ所とは關係を持たないで、それぞれに全く獨立した句である。全體としての統一といふものは、武帝の治化世道を詠じ、「日月星辰四時を和す」といふ首句の意に和するといふ立場に於て保たれてゐると見るべきである。もつとも、終の方の「妃女の脣に接吻すると、飴よ

りも甘い味がする」とか、「迫窘詰屈幾窮哉」(私の番だがにうちもさつちも行かず大弱り)とかいふ句は、戲笑諧謔であつて、それまでの作者の眞面目なものからは逸したものであるが、かやうな戲句も中々愛嬌があつて面白いと思ふ。但し、この聯句が、果して漢の武帝の元封の時の作であるか、といふ事になると、相當に疑はしいものであつて、沈德潜は『古詩源』卷二に、此詩を引いて

三秦記、謂^レ柏梁臺詩是元封三年作^ト。然^レ、梁孝王薨^ニ於孝景之世^ニ。又、光祿勳・大鴻臚・大司農・執金吾・京兆尹・左馮翊・右扶風、皆武帝大初元年所^レ更名^ト。不^レ應^ニ預書^ニ於元封之時^ト。其爲^ニ後人擬作^ト無疑^ト。不^レ然^ト、大君之前^ニ、郭舍人敢^ニ狂蕩無禮^ト、而東方朔以^ニ滑稽語^ト爲^レ戲耶。

と述べてゐる。即ち、第一の疑問は、この作者の一人である所の梁孝王は、孝景帝の世に於て薨じてゐるから、武帝の時代に登場する筈はない。第二の疑問は、光祿勳や大鴻臚や大司農や執金吾や京兆尹や左馮翊や右扶風などといふ官名は、武帝の大初元年に改めて作られたものであつて、元封三年にはかやうな官名は無いといふのである。又一般的に言つても、漢代に七言詩がこの作だけ唯一つあるといふのも疑問であつて、恐らくは六朝時代の擬作と見るべきものであらう。但し、清朝時代までは、漢武柏梁として何人も疑問を持つ者はなく、従つて我國でも、これを武帝

時代のものと考えたのである。

二 六朝時代の聯句

六朝時代に入ると、聯句は、柏梁體の形式以外に、又一體が生じた。それは、柏梁體が、各人一句づつ詠じ、各句に韻をふむといふ形式であるに對して、一人が二句づつ、又は、四句づつを詠じて、隔句に韻をふむといふ形式である。内容より言ふと、柏梁體は、各人の句は、大體首句の意に相應じて（柏梁詩では、武帝の日月星辰和四時といふ治世謳歌的な内容である）、各人が、それに關係ある事柄を、個々獨立的に連ねるといふ行き方であるのに對して、新しく起つた聯句は、或は問答唱和の體ともいふべく、前の作者の句意を承け、それに應じた意味を持つ句を連ねてゆく、といふ相違がある。

先づ、一人二句宛の唱和的なものとして、今日管見に入るものの初は、晉の賈充とその妻李夫人との聯句である。『文體明辨』によつて引用すると

室中是阿誰 歎息聲正悲 賈充

歎息亦何爲 但恐大義虧 李氏

大義同膠漆 匪石心不移 賈

人誰不慮終 日月有合離 李

我心子所遠 子心我所知 賈

若能不食言 與君同所宜 李

夫妻が交互に二句を詠じ、第二句の句尾に韻をふんでゐる。これは問答體であつて、賈充が「室
の中で悲しうに歎息の聲を立ててゐるのは誰か」といふに對して、妻が「歎いてゐるのは他
でもない。夫婦の道が破れようとするからです」といひ、それに對して賈充が「夫婦の間は膠や
漆で固めたやうなもので、心配しなくても心變りはしないよ」とのべると妻は「將來どうなるか
が心配なのです。合へば離れるといふのが世の中ですから」と答へる。賈充が「俺の心はお前が
よく知つてゐる筈だし、お前の心は私はよく知つてゐるのだ。十分に理解のある問柄でないか」
とのべると、妻は「そのお約束をあなたが守つて下さるなら、私もどこまでも御一緒に」とのべ
るのである。従つて、この聯句は意味が首尾一貫してゐるものであつて、一人の作の五言古詩と

見ることも出来る位に、二人の作は緊密に連關してゐるのである。

これ以外に六朝の各人二句宛の聯句としては、『陔餘叢考』所引のものをあげべきであらう。

聖主臨萬機 享世永無窮 元 颯

豈惟被草木 方亦及昆虫 孝 通

朝賢既濟々 野苗又荒々 元 翌

君臣爲魚水 書軌一華戎 孝文帝

微臣信度渥 何以答華嵩 孝 通

この作は、内容から言へば、和梁詩に似て、文帝の治世を謳歌した作であり、前の賈充の問答體のものとは、その質を異にするが、形式に於ては、各人が二句宛を詠じて、その二句目に韻をふんでゐる、といふ點に、一つの特色があるかと思ふのである。

六朝時代に於ける、各人四句づつ連ねた聯句の初見は、陶淵明等の作で、『陶彭澤集』（漢魏六朝百三名家集に據る。）に一篇見られる。

鳴雁乘風飛 去々當何極

第二章 漢土に於ける聯句

念 ^ニ 彼 ^ヲ 窮 ^ク 居 ^ス 士 ^ニ	如何 ^ゾ 不 ^ニ 歎 ^ハ 息 ^セ	淵	明
雖 ^レ 欲 ^ス 騰 ^ラ 九 ^ノ 萬 ^ニ	扶 ^ツ 搖 ^ヒ 竟 ^ヒ 何 ^ノ 力 ^ゾ		
遠 ^ク 招 ^キ 王 ^ノ 子 ^ヲ 喬 ^ニ	雲 ^ニ 駕 ^ス 庶 ^レ 可 ^シ 飭 ^ル	悒	之
願 ^シ 侶 ^ニ 正 ^ニ 徘徊 ^シ	離 ^々 翔 ^ニ 天 ^ノ 側 ^ニ		
霜 ^ノ 落 ^テ 不 ^レ 切 ^セ 肌 ^ニ	徒 ^ニ 愛 ^ス 双 ^ノ 飛 ^ノ 翼 ^ヲ	循	之
高 ^ク 柯 ^ヲ 擢 ^シ 條 ^ノ 幹 ^ニ	遠 ^ク 眺 ^ミ 同 ^ニ 天 ^ノ 色 ^ニ		
思 ^フ 絶 ^テ 未 ^ダ 看 ^ズ	徒 ^ニ 使 ^ム 生 ^ラ 迷 ^チ 惑 ^セ	淵	明

で、三人の連作である。『漁隱叢話』に「陶淵公有『聯句一篇』」とのべてゐるのは、此の作である。この作品の特色は、各人の作が五言四句から成つてゐて、四句を用ひてゐるから、作者の言はうとする詩想は、完全に近いまとまりを以て述べられて居るといふ所にある。そして、淵明の句意を承けて、悒之の四句が續けられ、淵明と悒之の作を承けて、循子は轉句的に新しい方面を開陳し、淵明又循之の句意を承けてこれを收めてゐるのであつて、詩想なり情調なりには、一貫性と脈絡性がある。あたかも、一人の作者が十六句を連ね作つた如き性質で、三人の句が結びついてゐる。従つて、柏梁型の聯句に對して、かやうな聯句は、連詩型の聯句とも名づけて良いであら

う。

この型式の聯句は、『鮑參軍集』・『謝宣城集』（漢魏六朝百三名家集に據る。以下同じ）に於ても見られる。先づ『鮑參軍集』には、在_リ荆州_ニ與_ニ張使君李居士_一聯句・與_ニ謝尚書莊_三聯句・月下登樓聯句の三篇があるが、前の二つには、句々の作者名を缺いてゐるので、一人二句であるか一人四句であるかが判然としない。『謝宣城集』には、阻雪聯句遙贈和_カ・還塗臨_レ洛_ム・紀功曹中園・間坐_ニ侍_ニ鍾西堂_ニ落日望_ム郷_ヲ・往敬亭路中_ニ祀敬亭山春雨の七篇があつて、何れも一人四句づつを詠じたものである。

月下登樓聯句

髴髴蘿月光 繽紛篔霧陰

樂來亂_ニ憂念_一 酒至歇_ニ憂心_一 鮑博士

露入_ニ覺_ニ牖_ニ高_一 螢_ハ蠶_ニ測_ニ苑_ニ深_一

清氣澄_ニ永夜_一 流吹不_レ可_レ臨_ム 王延秀

密峯集_ニ浮碧_一 疎瀾道_ニ瀟_ニ尋_一

嗽玉延_ニ幽性_一 攀桂藉_ニ知音_一 荀原之

第一章 漢土に於ける聯句

辰意事^{トシ}淪^シ晦^ク 良歡戒^ム勿^レ侵^ム

昭景有^リ遺^ニ醜^ニ 疏賈無^ニ留^シ金^ニ 荀中書萬秀

これは鮑照等四人が、五言四句宛を連ねたものであつて、韻は平聲の侵韻を以て一貫してゐる。この聯句になると、今までの聯句にも萌して居たのであるが、上句と下句とに、對句的な性格が極めて鮮明にあらはれて來てゐることを感じる。即ち、髣髴に對して繽紛、蘿月光に對して篔簹陰、樂來に對して酒至、亂憂念に對して歇憂心の如く、それぞれに對をなして進められてゐるのである。而して一篇全體としては、月下登樓といふことがらによつて、四人の作句が統一せられつつ、各人の作は又、それぞれに角度をかへて、種々の景情を開陳してゐるのである。

與^{トセ}謝^ル尙^ク書^シ莊^シ三^ニ聯^ハ句^ト

霞輝^キ兮^シ澗^ニ朗^ク 日靜^{カニ}兮^シ川^ニ澄^ク

風輕^ク桃^ヲ欲^ス開^ク 露^ヲ重^ク蘭^ヲ未^ダ勝^ス

水光溢^{レテ}兮^シ松^ノ霧^ノ動^ク 山煙疊^{リテ}兮^シ石^ノ露^ノ凝^ル

掩映^{トシテ}晨^ノ物^ハ綵^ト 連綿^{トシテ}夕^ノ羽^ハ興^ト

これは、聯句であるが、一人が二句作つたものか、四句作つたものかは、作者名を缺くために明

らかでない。韻は平聲の蒸韻で貫いてゐる。對句的な性格の鮮明さは、前の月下登樓聯句のそれと全く同様であるが、一つの特色は、第三聯の部分が七言となつてゐるといふ點にある。

次に、『謝宣城集』の作品二三をあげると

積雪皓陰地	北風鳴細枝
九達密如繡	何異遠別離
風庭舞流霞	冰沼結文澌
飲春雖以煥	欽賢紛若馳
珠雲條間響	王溜檐下垂
杯酒不相接	寸心良共知
飛雲亂無緒	結氷明曲池
雖乖促席讌	白首信勿虧
飄素瑩蒼溜	巖結噫通岐
俯疊如末漣	况乃限音儀
原隰望徒倚	松筠竟不移

王蘭陵僧孺

謝洗馬吳

隱憂^{ウレ} 惡^{ウレ} 蒼樹^ニ

忘懷^ツ 待^ツ 山^ニ 厄^ニ

劉中書繪

初^メ 昕^シ 逸^シ 翮^ニ 舉^ガ

日^リ 昃^リ 驚^マ 馬^ル 疲^ル

劉中書繪

幽山^ニ 有^リ 桂樹^ニ

歲暮^ニ 方^ニ 參^ニ 差^ニ

沈右率約

これは阻雪聯句逢贈和と題せられた作である。題名から考へると、これ等の詩人が一堂に會して作つたのではなくて、書牘を廻して漸次附け進めたものらしく思はれる。各人の作意は、第一二句で冬雪の景氣を即物的に詠吟し、第三四句で情懷をこめた心を吐露する行き方で一致してゐるのを見る。上下の二句が各々對句として作られてゐること、『鮑參軍集』のそれに等しい。又、紀功曹中園と題した聯句は

蘭亭^ニ 仰^ニ 遠風^ニ

芳林^ニ 接^ニ 雲^ニ 影^ニ

何從事

傾葉^ニ 順^ニ 清颺^ニ

脩竹^ニ 竹^ニ 高鶴^ニ

何從事

連綿^ニ 夕雲^ニ 歸^ル

晦^ト 曖^ト 日^ニ 將^ニ 落^ト

何從事

寸陰^ニ 不^レ 可^レ 留^ム

蘭墀^ニ 豈^ニ 停^ニ 酌^ニ

吳 郎

丹纓^ニ 猶^ニ 照^ニ 樹^ニ

綠^ニ 筠^ニ 方^ニ 解^ニ 籜^ニ

吳 郎

永志^ニ 能^レ 兩^ニ 忘^レ

卽^チ 賞^シ 謝^ス 邱^ニ 壑^ニ

府 君

とあつて、三人が各四句、仄韻の藥を以て貫いてゐる。表現もまことに美しく、一人の作としても十分に通るほどに、各人の作は前をよく承けて連ねられてゐる。これと似た整ひの美しさを持つものとして、もう一例をあげると、還塗臨渚といふ聯句は

綠水纈クハル清波ニ 青山繡スツ芳質ニ

落景皎ヨリ晚陰ニ 殘花綺ヨリ餘日ニ 何從事

白沙澹トシテ無際ク 青山眇トシテ如一ニ

傷此物運移スルヲ 惆悵望ム還律ニ 吳 郎

白水田外明ニナリ 孤嶺松上出ツ

即趣佳ナラバシメル可淹ル 淹留非ズ下秩ニ 府君遙和

の如きもので、詩措辭まことによく前の作に似て美しい作品である。

次に何遜の『何記室集』には、擬古三首聯句・往晉陵聯句・苑廣州宅聯句・相送聯句・至大雷聯句・賦詠聯句・臨別聯句・贈新曲相府聯句・照水聯句・折花聯句・搖扇聯句・正釵聯句の十二首の聯句が見られる。何れも一人が四句宛を連ねた作である。二三の例をあげると、

擬古三首聯句

家^ハ本青山^ノ下^ノ

好^ナ上^ル青山^ノ上^ノ

青山^ノ不^レ可^ク上^ル

一^{タビ}上^{レバ}一^{タビ}惆悵^ス

匣中^ノ一明鏡

好^ク鑑^ル明鏡^ノ光

明鏡^ノ不^レ可^ク鑑^ル

一^{タビ}鑑^{レバ}一^{タビ}清傷^ス

少^{ニシテ}知^ル雅琴^ノ曲^ノ

好^ク聽^ク雅瑟^ノ聲^ノ

雅琴^ノ不^レ可^ク聽^ク

一^{タビ}聽^{レバ}一^{タビ}沾^レ纓^ク

劉孝綽

劉孝綽

同様の意想を三首違ねた處に面白さがある。句意は極めて明瞭であり、やや小唄情調めいた特色が感じられる。

至大雷聯句

高談會^ニ良^ク夕^ニ

滿^{シテ}酒^ヲ對^ス羈情^ニ

関々^{トシテ}風烟^ノ動^ク

蕭々^{トシテ}江雨^ノ聲^ス

密雲^ノ窮^ク滄^ク時^ノ

飛電^ノ遠^ク洲^ノ明^ク

若非^{シバ}今^ノ宴^ノ適^ク

詎^{シテ}使^シ客^ノ愁^ク輕^ク

遙舟^ノ似^ク連^レ雁^ニ

遠火^ノ如^ク廻^レ星^ニ

劉孺

江潭望如此、
銜扈其君傾、
桓李珪

この作も、詩情こまやかであつて、理解も亦容易である。上下二句がそれぞれ對句を構成してゐる點や、一韻を以て貫いてゐる點など、他の作と異なる處がない。

照水聯句

挿花行理鬢、
遷延去復歸

雖憐水上影、
復恐濕羅衣、
遜

臨橋看黛色、
映密媚鈴暉

不顧春荷動、
彌畏小禽飛、
綺

美しい少女が、水鏡に己が影を映して楽しんでゐる可憐な情景である。これにも小唄情調的なものが感じられて面白い。韻は平聲の微韻である。

次に、庾肩吾の『庾度支集』には、今までの聯句に比べて、構成法に一寸面白い作が見られるので、それを紹介したいと思ふ。それは、八關齋夜賦ニ四城門ニ更作ニ四首トと題する作で、全部が四篇から成り、各篇は更に四首に分れて、合計十六首の聯句で出来てゐる。そして、その内容は、釋迦の四門觀を賦してゐるのである。今、第一篇の四首をあけると

東城門病

伏^レ枕^ニ愛^ニ危^ニ光^ニ

無^レ因^ニ雪^ニ岸^ニ草^ニ

消^レ渴^ニ腸^ニ腑^ニ

如何^ノ促^レ齡^ニ內^ニ

南城門老

虛^レ蕉^ニ誠^ニ易^レ犯^レ

一^ニ隨^ニ柯^ニ已^ニ微^ニ

已^ニ同^ニ白^ニ駒^ニ去^ニ

妍^ニ容^ニ一^ニ旦^ニ罷^ニ

西城門死

綏^レ心^ニ雖^レ殊^ニ用^ニ

一^ニ隨^ニ業^ニ風^ニ盡^ニ

五^ニ陰^ニ誠^ニ爲^レ假^ニ

痾^ニ纏^ニ生^ニ易^レ折^レ

慮^ニ及^ニ砒^ニ山^ニ穴^ニ

疼^ニ塞^ニ嬰^ニ肢^ニ節^ニ

憂^ニ苦^ニ無^ニ暫^ニ缺^ニ

危^ニ藤^ニ復^ニ將^ニ嚙^ニ

當^ニ年^ニ信^ニ長^ニ訣^ニ

復^ニ類^ニ紅^ニ花^ニ熱^ニ

孤^ニ燈^ニ行^ニ自^ニ設^ニ

滅^ニ景^ニ寧^ニ優^ニ劣^ニ

終^ニ歸^ニ虛^ニ妄^ニ設^ニ

六^ニ趣^ニ寧^ニ有^レ截^ニ

徐防

孔熹

諸葛峻

君

王台卿

零落竟同歸ニクシレ 憂思空相結ヲ 李鏡遠

北城門沙門

俗幻生影空ナリ 憂繞心塵曉クワシ

於テ茲ニ排ニ四ニ纏ニ 去矣求ニ三ニ涅ヲ 殿 下

下學シテ輩ニ留レ心ヲ 方從ニ窈ニ冥ニ別ニ

己悲ニ境ニ相ニ空ニ 復作ニ泡ニ雲ニ滅ニ 中庶府君

となつてゐる。一首を二人で、各四句を作り、それで以て、或は老、或は病、或は死といふ風に、四門觀の一つづつを詠じて居り、韻は仄の屑韻を以て全十六句が貫かれてゐるのである。これは明らかに、聯句を作る以前に、それぞれ作者の分擔を定め、詠ずる内容を定めて、一つの設計を立てて作つた聯句である。その點で、今まで見て來た聯句とは、大分と趣きが違ふのである。陶淵明、鮑照、謝朓等の集に見えるものは、第一の作者の作に應じて、次の作者が作り、次第にそれが重なつて行つて、一篇が成るもので、前以て設計圖を作つてやつてゆくといふ風なものではなかつたのである。従つてこれは、特殊な例と見るべきものであらう。それは同じ『庾度文集』の中にも、次の如き常形式の聯句が見られることから考へられる。

曲水聯句

春色明^ニ上^リ巳^ニ

桃花落^ッ繞^レ溝^ニ

波廻^リ扈^テ不^レ進^マ

綸下^リ鈞時^ニ留^ル

臣導

絲水時廻^リ岸^ヲ

花鶻轉^レ更^ニ周^ニ

陳^ノ肴^ヲ渡^リ玉^ヲ俎^ニ

垂^レ餌^ヲ下^ス銀^ノ鈞^ニ

王台卿

廻川入^リ張^レ殿^ニ

列^レ俎^ヲ間^ニ芳^ノ洲^ニ

漢艾凌^レ波^ヲ出^テ

江楓拂^レ岸^ヲ遊^ブ

庾肩吾

王生廻^リ碓^ヲ蔡^ヲ

蔡^ノ輿^ヲ蕩^ス輕^ノ舟^ヲ

岸燭斜^ニ臨^レ水^ニ

波光上^リ映^レ樓^ニ

殿下

これは曲水宴の有様を詠じた作であつて、中々美しく作られてゐる事を感じる。

尙、六朝時代にも、柏梁聯句に倣つた作品も作られてゐるので、宋の孝武帝を中心としたものには、

華林都亭曲水聯句^ニ 倣^フ 柏梁體^ニ

九宮盛事^ヲ 子旒^ヲ 續^ス 宋孝武帝

三輔務根識難亮 揚州刺史江夏王臣義恭

策拙粉鄉慙恩望 南徐州刺史竟陵王臣誕

折衝莫効與民謗 領軍將軍臣元景

侍禁衛儲恩踰量 太子右率臣暢

臣謬叨寵九流曠 吏部尙書臣莊

喉唇廢職方思讓 侍中臣偃

明筆直繩天威諒 御史中丞臣顏師伯

といふのがあり、梁武帝を中心としたものには

消暑殿效柏梁體

居中負辰寄纓紱 梁武帝

言慚輻輳政無術 新安太守任昉

至德無垠愧違弼 侍中徐勉

樊贊京河豈微物 丹陽丞劉汎

竊侍兩宮慙樞密 黃門侍郎柳澄

第一章 漢土に於ける聯句

聯句と連歌

清通簡要臣 豈泊オホハシヤ 吏部郎中謝覽

出入帷帳シ 濫ユリニク 榮秩ヲ 侍中張卷

複道龍樓歌ヲ 櫺ニ 實ヲ 太子中庶子王峻

空班獨坐ヲ 慙ニ 羊質ヲ 御史中丞陵泉

嗣グニ 以ニ 書ニ 記ニ 臣ニ 敢ニ 取ニ 匹ニ 右軍主簿陸倕

謬リナシ 參ニ 和ニ 鼎ニ 講ニ 畫ニ 一ニ 司徒主簿劉洽

鼎味參和臣 多シ 匱キヨト 司徒左西屬江曹

といふのである。七言一句づつで、各句に韻をふむこと、儀禮的な政道謳歌と、自己謙抑的な内容、いづれも型にはまつたもので、新しさといふものは見られない。

聯句は柏梁體聯句にはじまつて、六朝の時代に前述の如き作を生み出したのであるが、その起源については、柏梁以前に溯らせて考へる考へ方がある。即ち、聯句は唱和に起るといふ立場から、『書經』に見える元首股肱の歌を以てその起りと見る説もある。即ち帝が、「股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉」と歌つたに對し、臯陶が、「元首明哉、股肱良哉、庶事康哉」と歌ひ、又「元首

叢陸哉、股肱惰哉、萬事墮哉」と歌つたのを以て、聯句の起源と見ようとする考である。その説は我國にも傳へられてゐたらしく、『空華集』の聯句詩序にも「夫聯句之作尙矣、祖虞舜庶載、述乎漢武柏梁、自晉而下、陶謝之流、繼作而不多見也。」と見える。しかし、喬彥駁はこれを非として、元首股肱は庠和の始であつて、聯句の祖とは稱し難い由をのべてゐる。事物の起源を古くに持つて行く考へ方は、何處にもあることで、我國の連歌の初を、諸冊二神の唱和に求めるなども、その一例であらう。次では、式微の詩を以て、聯句の始と考へようといふ説で、方句の『泊宅編』に見える。それには

聯句或云起於柏梁、非也。式微詩曰、胡爲乎中露。蓋泥中中露衛之二邑名。劉向以爲、此詩二人所作。卽一在泥中、一在中露。其理或然。此卽聯句所起也。

とある。式微の詩は『詩經』邶風にあつて

式微式微、胡不歸、微君之故、胡爲乎中露。
式微式微、胡不歸、微君之躬、胡爲乎泥中。

この詩を、劉向『列女傳』では、黎莊公夫人とその傳との問答唱和の詩の如くに扱つてゐるのである。方句は、その劉向の見方を「或は然らん」とのべて、これを以て聯句の起源と見ようとい

ふ意見である。しかしこれは、趙翼が『陔餘叢考』に於て、「此未_レ免_二附會_一」とのべてある如く、
聯句と見るのは無理である。

三 唐時代の聯句

(一) 初唐、盛唐時代

唐代に入つては、初唐の詩人には殆んど聯句の作は無く、わづかに、唐太宗を中心とした柏梁體聯句が管見に入るのみである。即ち、兩儀殿賦柏梁體で、左の如きである。

絕域降_二附平_二天下_一 帝

八表無_レ事_二悅_二聖情_一 淮安王

雲波霧歛_二天地明_一 長孫無忌

登_二封日_二觀_二禪云_一 房玄齡

大常具_レ禮_二方告_レ成_一 蕭 瑋

次いで盛唐時代に入つては、李白と杜甫に各一篇つづの作が見られるのみである。

改^ア九子山^チ爲^ス九華山^ト聯句

妙有分^ニ二氣^ニ、靈山開^ク九華^ニ、李白
層標過^リ暹日^ニ、半壁明^リ朝霞^ニ、高
積雪^ニ曜^キ陰壑^ニ、飛流歎^シ陽厓^ニ、韋
青焚^リ玉樹^色、縹紗羽人家、李白

一人二句宛で五律の聯句である。

夏夜李尚書筵送^ニ宇文石首^ニ起^シ縣聯句

愛^シ客尚書重^シ、之^レ官宅相賢^ニ、杜甫
酒香傾^キ坐側^ニ、帆影駐^ル江邊^ニ、之^レ芳
翟表^ニ郎官瑞^シ、鳧看^ル令宰仙^ニ、或
雨稀雲葉斷^ル、夜久燭花偏^{ナリ}、杜甫
數^ハ語欵^ク紗帽^ニ、高文鄴^ニ綵牋^ニ、之^レ芳
與饒行處樂^ム、難^ハ惜^ム醉中眠^ニ、或

第一章 漢土に於ける聯句

單父長多恨 河陽實少年 杜甫

客居逢自出 爲別幾凄然 之芳

これは李之芳が宴を設けて、彼の甥の或の縣に赴くを送る際に、杜甫もその席に連なつて、三人で作つた聯句である。平韻の先で貫かれ、各人二句を詠じ連ねてゐるのである。各人の句は、上下二句それぞれ對句を以てしてゐる點、六朝聯句と變る所がない。

(二) 中唐時代

唐代の聯句は、中唐に到つて、著しい發展と變化を持つに到つた。形式の上にも、内容に於ても、この時代には注目すべきものが多い。聯句の長大なものには韓愈と孟郊とによつて詠作せられた城南聯句の如き、百五十三聯三百六句に及ぶものであり、晚秋鄜城夜會聯句は百聯二百句を連ねてゐるのである。又、聯句に参加する人數に於ては、二人乃至五人のものが多いのであるが、多數のものになると、顏真卿等の登峴山觀季左相石尊聯句の如きは二十九人、中元日鮑端公宅遇吳天師聯句では、嚴維以下十四人によつて作られてゐる。又、句形式に於ても天津橋南山中各題一句は各人が五言一句づつを連ねたものであり、嚴維等の酒語聯句や、顏真卿

等の樂語聯句や滑語聯句等は、各人が七言一句づつを連ねたものである。各人が五言二句を連ねる形式は最も多く用ひられて、これが大體中唐時代聯句の常型となつてゐる。次では各人が五言四句宛を作るものが多いが、稀には各人が七言四句づつ連ねるものもある。特殊な形式としては喜^ヒ皇甫會侍御見^{ユル}過南樓玩^{ウツ}月^{ツキ}の如く各人が三言四句づつ連ねたもの、擬^ニ五雜俎^ゴの如く三言六句づつ連ねたものがあり、又、次第に句の字數を増加して、一字^{ヨリ}至^ル九字詩^ク聯句といふ如きものが作られてゐる例もある。又、内容より見ると、六朝の連詩型の聯句に見る如く、純粹な詩的美を追求しつつ相互に詠じ連ねて行くものが多いが、他面には、一場の言語遊戲に興じて作つたと思はれる戲作的な作品も現はれて來てゐるのであつて、重擬^{ホテ}五雜俎^ゴや滑語聯句・酒語聯句・樂語聯句の如き、又、大言聯句・小言聯句の如き、又、一字^{ヨリ}至^ル九字詩^ク聯句の如きは、その好例といふべきであらう。又、これ等の聯句を、大體二つの時代群に分つて考へると、顏真卿や皎然や李暹等の活躍した太曆時代の作品群と、韓退之や白樂天等の活躍した元和長慶の時代の作品群とに別つことも出来る。

次に、これ等の聯句を、作品の實例をあげつつ説述してゆくこととする。

(4) 大曆時代の聯句

中唐時代前期の聯句は、顔真卿・皎然・李峴・李益・廣宣などに於て、代表せられるかと考へられる。その中顔真卿・皎然・李峴は、共に一座に連つて聯句を作ることが多く、李益と廣宣も、相一座する事度々であつた。顔真卿等三人が中心となつて一座した聯句には、月夜喫茶・喜皇甫會侍御見過南樓玩月・重務句・送李侍御・竄初月・重遊・重送・積飛・重擬・五雜俎・大言聯句・曉語聯句・樂語聯句・清語聯句の如きものがあり、李益と廣宣の一座したものとしては、宣上人病中相尋・八月十五夜乘興聯句・重陽夜集蘭陵居聯句・與宣供奉歸杏溪園蘭陵僻居・紅樓下聯句の如きものがある。

與歌 漳水亭 詠風

清風何處起	拂送復紫洲	襄幼清
回入飄華幕	輕來疊晚流	楊憑
桃竹今已展	羽翼且從收	楊凝
經竹吹彌切	過松韻更幽	左輔元
直散青蘋末	雉隨白浪頭	陸士修

山々催_ニ羽過_一 浦々發_ニ行舟_一 權 器

動_レ樹蟬爭_レ噪_一 開_レ簾客罷_レ愁_一 陸 羽

度_レ弦方解_レ慍_一 臨_レ水已迎_レ秋_一 顏 眞 卿

涼爲_レ開_レ襟至_一 清因_レ作_レ頌留_一 皎 然

周回隨_ニ遠夢_一 豎屑滿_ニ離憂_一 耿 漳

豈獨鎖_ニ繁暑_一 偏能入_ニ廻樓_一 喬

王風今若_レ此_一 誰不荷_レ明休_一 陸 涓

これは、水亭に於て、風といふものを中心として、各人が連句して居るので、各人の作る詩句の内容は、何れも風に關係した事柄を詠してゐる。その點で詩想には一貫性がある。韻は平聲の尤韻で一貫してゐる。

送_ニ李侍御_一

吾友駐_ニ行輪_一 遲々惜_ニ上春_一 顏 眞 卿

東西出_ニ餞路_一 惆悵獨_レ歸人_一 皎 然

歡會期_ニ他日_一 驅馳恨_ニ此身_一 張 薦

第一章 漢土に於ける聯句

須_レ知_レ貢_レ公_レ望_一 從_レ此_レ願_レ相_レ因_一 李 嶽

これは別離を惜しむ意を以て詠ぜられ、詩情一貫してゐる。韻は平聲の眞韻である。

重陽夜集_二蘭陵居_二與_二宣上人_一聯句

蟋蟀催_二寒_レ服_一 茱萸滴_二露_レ房_一

酒巡_レ明_レ刻_レ燭_一 籬菊暗_レ尋_レ芳_一 李 益

新月和_二秋_レ露_一 繁星混_二夜_レ霜_一

登高_レ今_レ夕_一 專 九九是_レ天_レ長_一 廣 宣

蘭陵僻居

潘岳閑_レ居_一 賦 陶潛獨_レ酌_レ謠_一

二賢成_二往_レ事_一 三徑是_レ今_レ朝_一 廣 宣

生_レ幸_レ逢_二唐_レ運_一 昌時奉_二帝_レ堯_一

遙_レ思_レ諧_二啓_レ沃_一 退_レ混_二即_レ漁_レ樵_一 李 益

蠹簡封_二延_レ閣_一 彫闕上_レ霄_一

相從_レ清_レ曠_レ地_一 秋露抱_二蘭_レ苔_一 杜 羔

これ等は、各人が五言四句を連ねた例である。この中、重陽の聯句は、二人の作る所が相違つて、一つの意景をなして居るものであり、蘭陵僻居の方は、三人の言ふ所は、それぞれに異つた事柄をとらへて詠じて居て、淺い連關しか持たないながら、各人の最後の句に於ての氣分は、田園閑地に退いて隱栖を樂しまうといふ點で、連なつてゐるのを感じる。

八月十五夜宣上人獨遊安國寺山庭院歩人遲明將至因話昨

宵乘輿聯句

九重城接天花界 三五秋生一夜風

行聽漏聲雲散後 遙聞天語月明中 廣 宣

含涼閣廻道仙技 承露盤高出上宮

誰問獨愁門外客 清談不與此宵同 李 益

これは一人が七言四句づつを詠じ連ねた作である。かやうな七言形式のものは、その例が少く、白樂天の聯句の中にもう一例があるのみである。

次に、特異な形式のものとしては、各人が五言一句づつを連ねてゐる作がある。即ち、

天津橋南山中各題二句一

野坐分_ニ苦_テ席_一 幸 竺 山行繞_ル菊_ニ叢_一 章執中
 雲衣惹_レ不破_レ 詣_ニ葛_一 覺 秋色望_レ來_ル空_一 賈 島

である。又、各人が三言四句づつ連ねてゐる作としては、次の如きものがある。

喜_ニ皇甫_一會侍御見_レ過_レ南樓_一玩_レ月_一

喜_ニ嘉_一客_一 開_ク前_ニ軒_一 天月淨_ク 水雲昏_シ 顔眞卿
 雁聲苦_シ 蟾影寒_シ 聞_ク表_ニ泚_一 滴_ル檀_ニ欒_一 陸 羽
 歡宴處 江湖間 皇會甫
 卷_{イテ}翠_ニ幕_一 吟_ニ嘉_一句_一 恨清光 留_ム不_レ住_一 李 鬱
 高駕動_ク 清角催_ス 惜_ニ歸_一去_一 重徘徊_ス 皎 然
 露欲_レ晞_一 容將_レ醉_一 猶宛轉_シ 照_ニ深_一意_一 陸士修

この作は三言四句づつを連ねてゐる（皇會甫の句は別であるが）のが、異色ある所であつて、『文體明辨』には、これを三言古詩の聯句としてあげてゐる。又、一人が三言六句づつ連ねた作としては、擬_ニ五雜俎_一、重擬_ニ五雜俎_一がある。

擬五雜俎

五雜俎 盤上俎 往復還 頭嬾梳

不得已 晉裏魚 李 嶽

五雜俎 郊外蕪 往復還 樞上駒

不得已 谷中愚 殷佐明

五雜俎 繡與錦 往復還 興又寢

不得已 病伏枕 顏真卿

五雜俎 酒與肉 往復還 門上闕

不得已 鬢毛斑 陸士修

五雜俎 繡紋線 往復還 春來燕

不得已 入征戰 蔣 士

重擬五雜俎

五雜俎 四豪客 往復還 阡與陌

不得已 長沙謫 張 薦

第一章 漢土に於ける雜句

五雜俎 五辛盤 往復還 馬上鞍

不得已 左降官 李 岑

五雜俎 甘鹹醋 往復還 烏與兔

不得已 韶光度 顏真卿

五雜俎 五色糸 往復還 回文詩

不得已 失喜期 皎 然

これは特殊なものであり、内容も従來の聯句と異つて戲作的な傾向を持つ所がある。因みに「五雜俎」といふのは、昔の樂府の中の一曲であつて、『古詩紀統論』に

五雜俎。古樂府名。無作者名氏。其詞曰、「五雜俎、岡頭草、往復還、車馬道、不得已、人將老」。以首句爲篇名。後人有仿其體者。

と見えてゐる。「五雜俎」とか「往復還」とか「不得已」などは、一種の歌謠的な拍子詞の如く用ひられてゐるのである。これも、「後人倣其體」の一つである。

次に、形式にも特異性を持つと共に、内容にも、戲笑味を持たせた作品について眺めると、一

人七言一句づつを連ねた作が多い。

大言聯句

高歌シ闐風ニ一步ニ瀛洲一

皎然

燂ヒキ鵬ヲ燠キ鯤ヲ鯤ヲ鯨ヲ鯨ヲ未レ休ム

顏真卿

四方上下無シ外頭ヲ

李萼

一ダレ頓ニ涸ラス滄溟ニ流ラ

張薦

これは途方もなく大きい事を言ひならべて興に入つた作である。闐風・瀛洲は神仙境、鵬・鯨は莊子に見える大鳥と大魚である。

小言聯句

長路ハルカキ迢遙ヲ吞吐ス

顏真卿

蟪蛄ノ蚊ノ睫ノ察ス難ク知ル

皎然

これは前と反對に、極小の事を並べたものである。

曉語聯句

拈リ鉞ヲ指シ不レ知ル休ム

李萼

欲シ炙ラ侍立涎シ交流ル

顏真卿

過ギ屠ヲ大嚼ニ宜シ知ル羞ム

皎然

食店門外強ニ淹留ス

張薦

これは恐しく食ひ意地の張つたものを連ねてゐる。

醉語聯句

逢_レ糟_ニ遇_レ麴_ニ便_ニ醕_ニ酏_ニ 全 白 覆_レ車_ニ墜_レ馬_ニ皆_レ不_レ醒_ル 顏_ニ眞_ニ卿_ニ

倒_レ着_ニ接_ニ羅_ニ髮_ニ垂_レ領_ニ 皎 然 狂_レ心_ニ亂_レ語_ニ無_レ人_ニ並_レ 陸 羽

これは醕酏の醜態を描き違ねたものである。

樂語聯句

苦河既_ニ濟_ニ眞_ニ僧_ニ喜_ニ 李 蕓 新_レ知_ニ滿_ニ座_ニ笑_ニ相_ニ視_ニ 顏_ニ眞_ニ卿_ニ

戎_レ客_ニ歸_ニ來_ニ見_ニ妻_ニ子_ニ 皎 然 學_レ生_ニ放_ニ假_ニ偷_ニ向_ニ市_ニ 張 薦

これは、楽しい物づくしで、第一句は僧の楽しみ、第二句は社交家の楽しみ、第三句は歸還兵の楽しみ、第四句などは、今日の學生も同感であらう。

滑語聯句

雨裏_ニ下_レ山_ニ踏_ニ楡_ニ皮_ニ 顏_ニ眞_ニ卿_ニ 莓_レ苔_ニ石_ニ橋_ニ步_ニ難_ニ移_ニ 皎 然

燕_レ萸_ニ醬_ニ錯_ニ嗅_ニ煮_ニ葵_ニ 劉_レ伶_ニ伯_ニ 縫_レ靴_ニ蠟_ニ線_ニ油_ニ塗_ニ錐_ニ 李 蕓

急_ニ逢_ニ龍_ニ背_ニ須_ニ且_ニ騎_ニ 李 益

これは、つるつると滑る事を、物づくし的に並べたものである。以上何れも、枕草子の「物づくし」を思はせる處がある。

又、内容にも形式にも特異性があつて、やはり戯作的なるものの中に加へるべきものとして、一字至九字詩聯句がある。

西 東 鮑 防

步 月 尋 溪 嚴 維

鳥 既 宿 猿 又 啼 鄭 槩

狂 流 礙 石 迸 筍 穿 磵 成 用

望 々 人 煙 遠 行 々 蘿 徑 迷 (作者名脱カ)

探 題 只 應 盡 墨 持 贈 更 欲 封 泥 陳 元 初

松 下 流 時 何 歲 月 雲 中 幽 處 屢 攀 躋 張 叔 政

乘 興 不 知 山 路 遠 近 綠 情 莫 問 日 過 高 低 賈 奔

靜 聽 林 下 潺 々 足 湍 瀨 厭 聞 城 中 喧 々 多 鼓 聲 周 頌

五言句には作者名が無いが、恐らくは佚したものであらうと思はれる。一句が一字よりはじまつて九字に到つてゐる點に、形式上の戯れが見られるし、それに伴つて、詩想の複雑化してゆく所にも、一種の感興がわくのである。韻は第二聯以下、平聲の齊韻をふんでゐる。

(四) 元和長慶時代の聯句

元和長慶時代を代表する詩人は、韓退之と白樂天である。その詩風は對蹠的と言ふべきほどに相違してゐるが、その聯句に於ても、韓愈の方は佶屈であり奇險であり豪宕であるに對して、白居易の方は平坦で流麗である。韓愈を中心とした聯句には、城南聯句・會合聯句・鬪雞聯句・納涼聯句・秋雨聯句・征蜀聯句・同宿聯句・莎柵聯句・雨中寄孟刑部幾道聯句・遠遊聯句・晚秋鄆城夜會聯句・有所思聯句・遣興聯句・贈劍客李園聯句・石鼎聯句の如きものがある。これ等の中、一二の例外はあるが、概して韓愈等の聯句は長大なもので、彼のように相手である孟郊との呼吸がよく合つて、堂々とした長篇を詠じ得てゐる。『雪浪齋日記』に「退之聯句、古無此法、自退之斬新開闢」と稱してゐるのは、韓愈が聯句に於ても堂々たる作品を數多く殘して居て、特に此の方面に於ても目立つた存在であることを言つたものと思はれる。それに比べると、白居易を中心とした聯句は、大體中篇的な長さのものが多く、今日見得る作としては、宴興化池亭送白二十二歸東齊句・首夏猶清和聯句・薔薇花聯句・西池落泉聯句・杏園聯句・花下醉中聯句・喜遇劉二十八偶書兩韻聯句・劉二十八自汝赴左馮塗經洛中相見聯句・予自到洛中與樂天爲文酒之會聯句・秋霖即事聯句・喜晴聯句、會昌春連宴即事聯句・僕射來示聯句・長

齊聯句の如きものがある。

聯句形式に於ては、太暦時代の如き、種々雑多な形式はなくて、五言句がその殆んどを占めて居り、五言二句づつを連ね又五言四句宛を連ねるものが、最も多いのである。ただ、韓退之の聯句には、初めは五言二句づつを連ねてゐるが、途中に於て、或は一人が五言四句・又は一人が五言八句・五言十句等を連ねるが如き、甚だ不規則的なものが相當多い。例へば、會合聯句では、張籍・韓愈・孟郊・張徹の四人が最初には二句づつを交互に連ね、二十聯ほど過ぎては、各人が四句づつを連ね、その中に一人八句を連ねたものが入つてゐる。又闘雞聯句では、韓愈と孟郊とが五言二句づつを四聯連ねて、次に各人が五言四句宛を四回ばかりつづけ、最後には一人が五言六句を連ねてゐる。又納涼聯句に於ては、韓愈と孟郊が五言二句を三聯連ね、次で五言を十八句・二十二句・十六句・二十二句といふ風に連ねて居り、遠遊聯句では孟郊と韓愈が五言二句宛を連ねた中に李翱の五言二句を一回、次で孟郊と韓愈が一人十句づつを連ねるといふ行き方を取つてゐる。即ち、大ていの初めは整齊たる行き方で、終りは隨意變化といふのが、その特色として認められる。白樂天關係の聯句には、各人が五言二句づつ又は五言四句づつ、連ねるものが多く、各人七言二句を連ねたものは杏園聯句一篇だけである。而して、その何れも、整齊たる進行であ

つて、韓愈などの如き不規則隨意の連ね方をしたものは見られないのである。

第三に、その内容方面から見ると、滑稽戲笑的なものは、韓愈のものにも、白樂天のものにも、先づ無いと言つて良い。もつとも、韓愈の城南聯句には、普通の詩ならば採り上げないやうな素材をも用ひてゐるために、いささか滑稽な感が無いでもない。例へば

桑螵見_ニ虛指_一 穴狸聞_ニ鬪聲_一

蔓涎角出縮_一 樹啄頭敲鏗_一

暮堂蝙蝠沸_キ 破竈伊威盈_ツ

如_レ瓜煮_ニ大卵_一 比_レ線茹_ニ芳菁_一

驚_レ魂見_ニ蛇鬪_一 觸_レ嗅值_ニ蝦蟇_一

の如き、その一例である。しかし、この聯句全體として見れば、やはり眞面目な作であると言はざるを得ないのである。又、韓愈の聯句は、従來の聯句が、所謂聯詩風とも言ふべく、詩を作り連ねた如きものが多かつたのに比して、詩格をはなれて、聯句としての一體ともいふべき手法を創めた點に、最も大きい特色があるとも言はれてゐるのである。

以上で、大體元和長慶時代の聯句の一般をのべたので、以下少し具體的に、その作品を眺めて

ゆくこととする。

先づ韓愈と孟郊とによつて作られた最大長篇の城南聯句を見よう。

竹影、金瑣碎、孟郊、泉音、玉淙琤、韓愈

瑠璃、翦木葉、愈、翡翠、開園英、郊

流滑、隨仄步、郊、搜尋、得深行、愈

遙岑、出寸碧、愈、遠目、增雙明、郊

乾穩、紛挂地、郊、化晴、枯揭莖、愈

木腐、或垂耳、愈、草珠、競駢晴、郊

(下略二百九十四句)

これは冒頭の數聯であるが、此の城南聯句の特異な點は、各人が五言二句を連ねるのに、その一人の二句に於て對を取ることをしないで、前者の第二句目と、自分の第一句目とが對聯になるやうな行き方をしてゐることである。その爲に、冒頭の孟郊の句は、竹影金瑣碎といふ一句だけで、これに對する對句を、韓愈に求めて居る。韓愈はこれに對して、泉音玉淙琤といふ句で孟郊に對

する對句を作り、更に瑠璃翳木葉といふ句を作る。従つて、次句の作者孟郊は、この瑠璃の句に對して、翡翠の句を附けて對句とし、又、流滑の句を出して、韓愈に對して對句を求め、といふ行き方である。これは、作者のめいめいが、自己の作る二句の中に於て對句を形成するに比べて、甚だむづかしいものと言ふべきであつて、力量の相匹敵する作者が、相互に意氣相投じつつ、篇をけづつて附け進めるのでなくては不可能である。かやうな附け方は、韓愈の作の中でも、この城南聯句だけであるし、白樂天の聯句の中にも、此の型の作品は無いのであるが、この行き方は、日本の長連歌に於ては、常に見られる所である。即ち長連歌は、發句の五七五の句に對して、それに對應する七七の脇句をつけ、又、この七七の脇句に對して、それに對應する五七五の第三句を連ねるといふ行き方であつて、附句の作者は常に前句に應じ、前句と合體して、一つの情景なり情意なりが完成するやうに心がけてゆくのである。連歌は各人が一句づつを作るのであり、對句をねらふものではないが、相手の仕掛けに對して應じてゆくといふ點で、城南聯句の行き方に類する所があるのである。

會合聯句

離別言無期

會合意彌重

張

籍

病添^ハ兒女^ニ戀^シ、老喪^ハ丈夫^ノ勇^ム、
 劍心^ハ知未^ク死^セ、詩思^ハ猶孤^ル聳^ユ、
 愁去^ル劇箭^ク飛^ブ、謹來^{ヨリ}若泉^ノ涌^ク、
 張徹

(下略三十韻六十句)

この會合聯句は、各人が五言二句をつらねてゐるが、その對句の取り方は、各人が自らの二句を對させてゐるのである。内容は、會合といふことがらに於て、一貫し、韻も上聲の腫の韻で以て一貫してゐること、普通の聯句の常型である。

鬪雞聯句

大雞昂然^{トシテ}來^リ、小雞竦而^{トシテ}待^ツ、
 崢嶸顯^{ミツ}盛氣^ニ、洗刷凝^ル鮮彩^ニ、
 高行若矜^ク豪^ナ、側睨如^シ伺^フ殆^キ、
 精光目相射^ル、劍戟必獨^リ在^リ、
 旣取^テ冠^ヲ爲^シ胃^ト、復以^テ距^ヲ爲^シ鐵^ト、
 天時得^テ清寒^ニ、地利挾^ム爽塏^ニ、
 愈 愈 愈 愈 愈 愈 愈 愈

第一章 漢土に於ける聯句

(下略十九韻三十八句)

これは、鬪雞の有様を動的に連続的に描いた聯句であつて、長篇ながら甚だ面白く出来た作品である。「既取」以下は各人が五言四句を連ねてゐるのであるが、その四句は、やはり二句づつが對句を成して連ねられてゐる。韻は上聲の賄韻で一貫してゐる。

造興聯句

我心隨 _レ 月光 _一	寫 _レ 君庭 _一 中央	孟	郊
月光有 _レ 時晦 _一	我心安 _レ 所忘 _一	韓	愈
常恐 _ニ 金 _一 石契 _一	斷 _テ 爲 _ニ 相思 _一 腸 _一	郊	
平生無 _ニ 百歲 _一	岐路有 _ニ 四方 _一	愈	
四方各異 _レ 俗 _一	適異非 _レ 所 _レ 將 _一	郊	
驚蹄顧 _ニ 挫 _一 秩 _一	逸翮遺 _ニ 稻 _一 梁 _一	愈	
時危抱 _ニ 獨 _一 沈 _一	道泰懷 _ニ 同 _一 翔 _一	郊	
獨居久寂 _一 默 _一	和願聊 _ニ 慨 _一 慷 _一	愈	
慨慷丈夫志	可 _ニ 以 _一 耀 _ニ 鋒 _一 鉞 _一	郊	

遼寧知ニ卷舒一 孔顔識ニ行藏一 愈

朗鑒諒不遠カ 佩蘭永芬芳アリ 郊

苟無夫子聽一 誰使知音揚一 愈

これは中篇的な長さであり、比較的、用語も險奇でないので、全篇を引用して見たのである。思想は大體に於て一篇を貫いて居るものと言ふべく、韻は平聲の陽韻を以て一貫してゐる。

白樂天關係の聯句では、各人が五言四句を重ねるものが九篇、五言二句を重ねるものが四篇であつて、五言四句形態の方が優勢である。そしてその五言四句づつのものに於ては、三十聯（六十句）を連ねたものが六篇、十六聯（三十六句）のもの二篇、八聯（十六句）一篇で、五言四句三十聯の形式のものが最も多いのである。五言二句を連ねてゆくものには、八聯のもの三篇、十聯のもの一篇となつてゐる。韓退之のものに長篇が多いのに比べて、白樂天のものは、中篇で手ごろな長さのものが多く、その詞藻修辭に於ても、白樂天關係のものは、まことに優美であり平易である。我が國の人々に喜ばれたのは、恐らくこの『白氏文集』の聯句であつたらうと思はれる。前例に従つて、實例をあげると、五言二句では

薔薇花聯句

似錦如霞色	連春接夏開	劉禹錫
波紅分影入	風好帶香來	度
得地依東閣	當階奉上臺	行式
淺深皆有態	次第暗相催	禹錫
滿地愁英落	綠堤惜權回	度
芳濃濡雨露	明麗隔塵埃	行式
似著胭脂染	如經巧婦裁	白居易
奈花無別計	只有酒殘杯	籍

などは、美しく整へられた作と言ひ得るであらう。薔薇の美を、各方面から描いてゐる。韻は平聲の灰韻である。

花下醉中聯句

共醉風光地	花飛落酒杯	終途二二八
殘春猶可賞	晚景莫相催	禹錫送白侍郎

酒幸年々有 花應歲々開 居易送兵部相公

且當金韻擲 莫遣玉山頽 絳送度閣長

高會彌堪惜 良時不易陪 承宣送主客

誰能拉花住 爭換得春回 禹錫送吏部

我輩尋常有 佳人早晚來 嗣復送兵部

寄言三相府 欲散且徘徊 居易時戶部相公同會

これは花の下に酒杯をあげての應酬である。意想情調が花見を中心としてよく一貫してゐる點、前の薔薇花聯句と同様である。韻は平聲の灰韻である。次に、最も數の多い一人が五言四句宛を詠じた例をあげて見ると、

秋霖卽事聯句三十韻

蕭索窮秋月 蒼茫苦雨天

泄雲生棟上 行潦入庭前 白居易

苔色侵三徑 波聲想五絃

井蛙爭入戶 轍鮒亂歸泉 起

高響愁^ヒ晨坐^ニ 空階警^ム夜眠^ニ
 鶴鳴猶未^レ已^ト 蟻穴亦頻^リ遷^ル 劉禹錫
 散漫疎^ニ還密^ニ 空濛斷^ニ復連^ニ
 竹霑青玉潤^ニ 荷滴白珠圓^ニ 居 易

(下略二十二聯四十四句)

これは秋雨を題目として、その様々の景情を作り連ねたもので、三十聯六十句を連ねてゐる。各人二句と各人四句との差別は、あまり見られない。即ち一人四句を連ね作る際にも、二句づつ對をせしめてゐるからである。この事は、人事的な情懷を連ねた聯句に於ても同様であつて、聯句の特色とする所である。人事的な例としては

宴^ニ興^ニ化池亭^ニ送^ニ白二十二東歸^ニ聯句
 東洛言^レ歸去^ニ 西園告^レ別來^ニ
 白頭青眼客 池上手^ニ中杯^ニ 度
 離瑟殷勤奏^ニ 仙丹委曲回^ニ
 征輪今欲^レ動^ニ 賓客爲^レ誰開^ニ 禹 錫

坐弄 ^ニ 瑠璃 ^ノ 水 ^ニ	行 ^テ 登 ^ル 綠 ^梅 苔 ^ニ
花低 ^シ 妝 ^ヲ 照 ^シ 影 ^ヲ	萍 ^散 酒 ^吹 醅 ^ヲ
岸 ^ノ 蔭 ^ニ 新 ^ク 抽 ^ク 竹 ^ヲ	亭 ^ノ 香 ^ヲ 欲 ^ク 變 ^フ 梅 ^ノ
隨 ^ヒ 遊 ^ニ 多 ^ク 笑 ^{ハク} 傲 ^シ	遇 ^ヒ 勝 ^ニ 且 ^ク 徘徊 ^ス
澄 ^{ダリ} 澈 ^シ 連 ^{ナル} 天 ^ノ 鏡 ^ニ	潺 ^{ダリ} 湲 ^シ 出 ^ル 地 ^ノ 雷 ^ヲ
林塘 ^ニ 難 ^シ 共 ^ニ 賞 ^ス	鞍 ^ノ 馬 ^ノ 莫 ^ク 相 ^レ 催 ^ス
信 ^ヲ 及 ^レ 魚 ^ノ 還 ^ル 樂 ^{シク}	機 ^ヲ 忘 ^ル 鳥 ^ノ 不 ^レ 猜 ^マ
晚晴 ^ノ 槐 ^ノ 起 ^リ 露 ^ヲ	新 ^ク 暑 ^ク 石 ^ノ 添 ^フ 苔 ^ヲ
擬 ^シ 作 ^ニ 雲 ^ノ 泥 ^ノ 別 ^ニ	猶 ^ホ 思 ^フ 頃 ^刻 陪 ^テ
歌 ^ヲ 停 ^ム 珠 ^ヲ 貫 ^ス 斷 ^ス	飲 ^ム 罷 ^シ 玉 ^ノ 峰 ^ノ 頽 ^ル
雖 ^モ 有 ^リ 消 ^ス 搖 ^ル 志 ^ニ	其 ^レ 如 ^ク 磊 ^々 落 ^ク 才 ^ニ
會 ^ハ 常 ^ニ 重 ^ク 入 ^ル 用 ^ニ	此 ^ニ 去 ^ル 肯 ^テ 悠 ^ク 哉 ^ニ
	籍
	居
	易
	禹
	錫
	度
	籍
	居
	易

など、その代表的なものであらう。

第一章 漢土に於ける聯句

以上で、大體中唐時代までの聯句について、時代的にその展開の姿を見て來たのであるが、次で、日本の聯句を考へる際の比較に便するために、漢土の聯句について、その特色の要點をまとめて見ると、

一 形式に於ては、柏梁型・問答型・連詩型・聯對型の四つに分けられるかと思ふ。柏梁型は、各人が七言一句づつで、各句に韻をふみ、内容は、首句の意味内容に連關のある意味の句を、各人が詠じ連ねるのである。問答型のもは、五言二句を相互に連ね、その第二句目に韻をふみ、内容は、二人の間答を連ねたものである。連詩型のもは、各人が五言四句で、隔句に韻をふみ、その四句は、大體二句づつで對句を成してゐるが、一人が四句を詠む故に、各人の作は一つの詩的内容のまとまりを持つて居る所に特色がある。聯對型は、大體各人が五言二句を連ねて行き、その二句は對句の形式を取つて、第二句目に韻をふむ。而して、詩想は、前句の作者の詩想を受けて展開して行くのである。ただ、一人が二句であるために、まとまつた詩想としての重みに於て乏しいから、連詩型のもとの區別するのが妥當だと思ふのである。尙、此他に、雜體ともいふべきものがあるが、それは戲作的興味に發したもので、一般的な類型とは見なしがたい。

二 内容上より見ると、二種に分ち得る。一は眞面目なもので、詩的な思想を開陳して行くもの、二は戲笑的なもので、一場の戯れに終るものである。そして、戲笑的なものは、その形式に於ても、常型を逸脱してゐるのが特色である。漢土の聯句に於ては、第一の眞面目な詩的内容を持つたものが、本格的なものであり、作品の量に於ても、歴倒的である。

第二章 平安時代の日本聯句

日本に於ける聯句は、勿論漢土の聯句に學んで作つたものであらうと思はれるが、平安時代の作品も、殆んど残つて居らず、公卿日記などにも、聯句を行つた記事は稀に見られるが、その作品は殆んど記されてゐない故に、詳細にこれを知る事は、先づ不可能に近い。僅かに『江談抄』などに數個の例を見るのみであるが、その作品は、漢土のそれとは大分と趣を異にしたものばかりである。従つて、これ等の資料から推論する事は、相當に危険であつて、正鶴を逸する怖れは大分にあるのだが、他に資料の無いために、しばらく、警戒を加へつつ、眺めて行かうと思ふ。

七言述志

天紙風筆 畫雲鶴
山機霜杼 織葉錦

後人聯句

赤雀含書時不_レ至_二 潜龍勿_レ用未_レ安寢_一

とあるのを以て、最初とすべきだと、『詩鞞』には述べてゐる。これは、大津皇子の薨後に、後人が作り連ねたものであるから、所謂異代聯句であつて、嚴密な意味からは、聯句とは稱し難いが、漢土に於ても、唐の文宗が「人皆苦_二炎熱_一、我愛_二夏日長_一」と作り、柳公權が「薰風自_レ南來、殿閣生_二微涼_一」と聯ねたのに對し、宋に至つて蘇東坡が「一爲_レ居所_レ移、苦樂永相忘、願言均_二此施_一、清陰分_二四方_一」と聯ねたのを以て、やはり聯句の一體の如くに見てゐる例もあるから、全然聯句でないとも言へないのである。又、後人の作も、對句を以て皇子の作に對し、錦に對して寢と同韻をふんでゐる所も、聯句の法式に叶つたやり方である點、やはり聯句的意識を以て附けたものと考へるのが妥當であらうと思ふ。

『懷風藻』以後に於ける聯句の状態は、殆んど見るべき資料の無い今日に於ては、甚だ茫漠としてたどり難い。わづかに『江談抄』第六、長句事の條に、次の如き例を見得るのみである。

連句七言

尾拂_二樹間_一黃牛_背 手打_二門前_一白雁_聲

五言

二藍經一夏菅

朽葉幾回秋紀

泡垂觀藥口泰能

貧負泰能肩齊名

芸閣二貞序公任卿

蘭臺八座賢惟貞

何能才子何人齊信卿

明法生爲親稱何能

朝器非朝器秀才

茂才是茂才

深草人爲器匡衡

小松僧沸湯

負牛一屋具

乘馬二分人

千六百年鶴棟

二三兩月鷺明衡

人曰山城介

扇亦貢士腰佐國

家々懸孔子

世稱水驛官

文武兩家性隆兼

處々呼彭侯

貫月查浮海棟

江平一士名

宣風坊在京明衡

處々呼彭侯

第二章 平安時代の日本聯句

これ等の句中には、作者名のもれたものもあつて、断定は出来ないが、大體平安時代中期までのものと考へてよいであらう。何れも聯句の一斷片であり、五言にしても七言にしても、連続したものでないから、韻のふみ方や、前後の聯との關係等も、明らかにし難い憾みがある。が、これ等の例を通じてうかがはれる特色は、各人が大てい一句づつ作り、二人の作が相寄つて、一聯を形づくるといふ點である。二藍經一夏の聯に於ても、泡垂觀藥口の聯に於ても、何れも一人が一句を作るだけである。勿論漢土に於ても、各人が一句づつ作る例はある。柏梁體を別としても、大言聯句・小言聯句・醉語聯句等は、何れも一人一句を連ねたものである。しかし、それ等は、各人がその句尾に韻を踏んでゐるのである。その點で、柏梁體も同様である。しかるに、この江談抄に見える聯句は、共通の韻をふんではゐない。二藍の句の夏字と朽葉の句の秋字、泡垂の句の口字と貧負の句の肩字、何れも韻を異にしたものである。この點に、漢土の聯句とは相當の違ひのある事が感じられるのである。かやうな例を漢土の作品に求めると、多くの中に、僅かに唯一の李益・諸葛覺等四人の作つた「天津橋南山中各題一句」があるのみである。しかもこれは、「各題一句」であつて、嚴密に言へば、聯句的意識に於て連ねられたものであるか否かは、やや疑問に屬するものである。従つて、日本の平安時代の聯句が、この天津橋南山中各題一句に倣つ

たものであるといふ事は、言ひ難いと思ふのである。

第二に、『江談抄』所載の聯句から觀取せられる日本聯句の特色が、機智的滑稽的ともいふべき特色を持つといふ點である。但しこの點についても、長篇の聯句が残存して居ない爲に、斷定的に言ひ切る事は出来ないが、漢土の韓退之や白樂天の聯句を見慣れた眼で見ると、何としても戲笑的傾向のあることは否定しがたい。例へば、泰能が「池垂觀藥口」と言ふに對して（この泰の句自體がすでに滑稽を意圖してゐる）、齊名が、相手の名を句中に入れて「貧負泰能肩」と連ねた如き、戲笑をねらふ以外の何物でもない。「二藍經一夏」の句に對して「朽葉幾回秋」と連ねたのも奇智の應酬で、二藍ふたあはと朽葉くちはといふ衣の色目で對し、經一夏に對して幾回秋と對せしめて、二藍の衣で一夏を過すといふに對して、朽葉の衣は何年これを着ることか、と言ふやうな洒落を構成してゐるのである。朝器非朝器に對して茂才是茂才とつけたのも、奇智の弄びである。かやうな點では、我々は平安時代の短連歌の奇智滑稽を想ひ合はさざるを得ないのである。漢土の樂語聯句や滑稽聯句等も戲笑的であるといふ點に於ては、共通性があるが、それ等は所謂「物はづくし」的であつて、日本のものの如き、奇智對應といふ如き性格はないと見てよいと思ふ。

かやうな奇智をたたかひし戲笑に遊ぶ行き方であつた事は、『江談抄』以外のものに於ても指

摘し得られる。『古事談』第六には、

敦基朝臣、參_リ法性寺殿_ニ（藤原忠通）、褒_ニ美子息等事_ヲ。其後有_ニ聯句會_ニ之時、茂明候_ニ其座_ニ。殿下思_ニ食出先日事_ヲ、被_レ仰_セ云、愚息稱_ニ賢息_ニ。心得テトリモアヘズ、令明與_ニ茂明_ニト申シケレバ、頻御感アリケリ。

といふ話を載せてゐる。これは、令明と茂明とは共に敦基の子であることが面白いのであつて、敦基が忠通の御前に参つた時に、盛んに子供の事を褒めちぎつたので、後日の聯句會の時に丁度敦基の子の茂明が一座してゐた際、忠通が、「愚息を賢息と稱してゐる」といふ意の句を作つて、からかつた。その意を察して茂明は直ちに「それは令明と茂明のことぞせう」と應酬したといふのである。又、『古今著聞集』には、文學の部に

或人連句のたびごとに、想像花陽洞とさだまれることにいひけり。或日人々よりあひたりけるに、かの人案のごとく、又この句をいひたりけるを、素俊法師とりもあへず、左存松子亭といひたりける、滿座興に入りて、陽をきりけるとぞ。この素俊は、連句の上手なりけり。

春調_ハ春鶯囀_ハ 古聞_ハ古鳥蘇_ハ 琵琶_ニ稱_ニ牧馬_ト 鞞鼓_ニ習_ニ泉狼_ト
これ等も、素俊が秀句とぞ申侍る。

これは、想像に對して、左存（左様に存じます）と洒落て、いつもの御定まりの句が出るだらうと存じてゐたと皮肉をとばしたものであり、その點で滿座が笑ひとよめたのである。次にあげられた聯句も春鶯囀と古鳥蘇といふ雅樂の曲名を面白くもぢり、牧馬といふ琵琶の名器に對して、泉狼（泉郎）といふ鞆鼓の八聲の一つを出して、對せしめたものであつて、奇智の面白さに於て名を得たのである。又、頼長の『臺記』の康治二年二月廿日の條には、

終日連句興、俊道上句云、田豆、又田豆、幽明下句云、野篁復野篁。此句尤有興。

と見えてゐる。これも、田の豆や野の篁といふ意味と、島田忠臣や小野篁などといふ著名な詩人の名とを掛詞にした洒落である。これ等の例より見て、平安時代の聯句に於て、人々が如何なる點に感興を求めてゐたかが、大凡に想像出來ると思ふ。それはあたかも、歌會の後の餘興に連歌を樂しむ如く、詩會の餘興として、聯句を樂んでゐたものと考へて良いであらう。

聯句の流行は、連歌の流行と同じく、平安時代の後期が盛んであつたと想像せられる。そしてその頃の聯句の状態を或る度まで物語るものとして、『本朝無題詩』の卷二に見える「賦連句」の二篇は注目すべき價值がある。その一篇は、法性寺入道殿下（藤原忠通）作で、他は藤原茂明の作である。（この兩者の聯句についての逸話は、前に古事談を引用して述べて置いた）。先づ忠通

の作は、

連句從來感^{ナシ} 叵^レ休^ム、每^ニ延^ス 此^ニ席^ヲ 自^ラ忘^ル愁^ヲ、問^フ聲^ヲ 屢^ニ詠^ス 紅^ク爐^ノ下^ニ、案^シ韻^ヲ 微^ニ吟^ス 華^ヲ
 燭^ノ頭^ニ、詞^ノ苑^ニ 久^ク爲^リ 銷^ス 日^ヲ、文^ノ亭^ニ 只^ラ作^ル 送^ス 宵^ノ 遊^ヲ、漫^ニ加^ス 座^ノ 末^ニ 材^ヲ 疎^ク 客^ヲ、無^レ顧^ム 不^レ收^ム。

右の第一二句は、聯句の感興はまことに極まりないものであつて、その席を開く毎に愁を忘れるものであるといふ。次の第三第四句は、當時の聯句が、やはり韻をふむものであり、又平仄をも顧慮するものであつた事を告げる。(韻は隔句に踏み、平仄は五言詩の格によつたものであつたらしい)。第五第六句は、聯句が當時の人々に於ては、詩に比べて氣樂であり樂しいものとして眺められてゐた事を語る。銷日の數れであり送宵の遊びであつたのである。第七第八句に於ては、詩才の乏しきものも一座に加はり、字對なども不十分なものも存在したことを告げる。これを讀むと、後世長連歌の流行した時代を想ひ起さざるを得ないやうな状態のものであつた事が、想像せられるのである。次に茂明の作は

緣^ニ底^ニ 通^ス 宵^ノ 令^ム 睡^ム 驚^ク、提^テ 携^シ 連^ス 句^ノ 感^ヲ 相^シ 并^ニ、爐^ノ 邊^ニ 折^リ 紙^ヲ 失^フ 催^シ 興^ヲ、燈^ノ 下^ニ 接^シ 襟^ヲ 各^ニ
 動^ス 情^ヲ、百^ノ 韻^ヲ 滿^テ 來^ル 吟^ム 月^ノ 曉^ヲ、五^ノ 言^ヲ 綴^リ 得^ル 賦^ス 花^ノ 程^ヲ、文^ノ 寶^ヲ 詩^ノ 友^ヲ 今^ニ 爲^ス 道^ヲ、詞^ノ 海

如何欲釣名。

此の作に於て、第一二句は、聯句を催す宵の感興の深さを言ひ、第三四句は聯句の座の光景を描いてゐる。この中「折紙」とある事より、當時すでに聯句を記すに連歌の懷紙の如きものを用ひてゐた事が知られる。連歌に於ても、『明月記』などを見ると折紙五枚とか折紙六枚とか記されて、連歌の長さを折紙數によつて示してゐる記事がある。次に第五第六句に於て注目すべき事は、百韻といふ形式が存在して居た事と、月を賦し花を賦するといふ如きことが存在して居た事とである。當時の記録にあらはれてゐる聯句の記事を見ると、必ずしも百韻ではなくて、種々の場合がある事は明らかであるが、次第にこの百韻といふ形式が本格的なものになつて行く姿がうかがはれる。(少し時代はおくれるが、兼實の玉葉に見えるものは、支字三十餘韻・七十韻・先仙五十韻・尤候百韻・陽唐百二十韻・支脂百韻・眞臻百韻・虞模百韻・先仙百韻等が、治承・養和・壽永・文治の頃に記されてゐる)。又、月を賦すとか、花を賦すとかいふものは、後世の連歌の花の座とか月の座とかいふ如きものにまでなつてゐたとは考へられないが、連歌の賦物とは性格の異つたものであり、聯句の進行中に於て、月を詠じたり、花を詠じたりする句のあることが、必要な條件になつてゐた如くに思はれるのである。又、「五言綴得」とあることより、聯句は、五

言句が常型であつた事も知られ、『江談抄』所引の實例と共に、平安時代聯句の姿を推測し得るのである。

以上、僅少な資料ながら、それによつてうかがひ得た平安時代の聯句に關する事項を要約して見ると、

一 我が國に於ける聯句は、『懷風藻』の頃に既に試みられた事はあつたが、それが詩人の間に甞ばれるに到つたのは、大體平安時代の中期、道長時代かららしく思はれる。記録に見える賀陽院水閣歌合の聯句の記事も後一條天皇の長元年中のことであるし、『江談抄』に見える公任や齊信などの聯句から考へても、大體の時代が一致する。

二 聯句は、漢土に於ても、極めて特殊なものであり、今日残つてゐる作品も、詩の量に比べれば、九牛の一毛とも言ふべき僅少なものである。従つて、全く詩人の餘技であり、それも殆んど試みる人が無いといふも過言ではない。我が國に於ても、それは同様であつて、詩文に比して、甚だ作られる機會は乏しいものであつた。詩集の類に聯句が記されてゐるものは無く、わづかに『江談抄』に僅少な聯句の例があげられてゐるに過ぎないといふ事實は、こ

のことを物語るものである。それは又、漢土に於ても我國に於ても、聯句といふものの位置が、詩文に比べて非常に低い價値にしか評價せられず、従つて、それに専心に打ち込むといふ人も無かつたといふ事を物語るものでもある。

三 聯句の形式としては、五言句のものがやはり歴倒的に多かつたと思はれ、韻は隔句に踏んで居たと思はれる。その點では、やはり漢土の聯句に倣つて作つてゐたものと思ふ。ただ、聊か唐土の聯句と異なる傾向が生じて居たと思はれる點は、各人が五言句を一句づつ作り連ね、二人で一聯を構成してゆくといふ形式も、相當に多く行はれてゐたらしい事である。『江談抄』の實例や『臺記』に見える實例は、この事實を告げる。かやうに、一人が一句づつ作り、二人で一聯を構成するといふやうな行き方が生れたのは、我が國の連歌（主として短連歌）からの影響であるまいかと考へられる。

四 一篇の句數については、初期には任意で、句數もさして多いものではなかつたと思はれるが、平安時代の後期に入つては、次第に多く連ねる傾向となり、百韻又はそれ以上をも連ねるものも生じ、次第に、百韻が定型の如きものとなつた如くである。これは、『本朝無題詩』の詩からも考へられる。宮中の聯句には、廿餘韻が多く用ひられてゐたらしい事は、『玉葉』

の文治三年二月廿七日の條に「天永以往、多用廿餘韻」とあることから想像せられる。

五 平安時代の聯句は、詩會に於ける餘興、又は、消閑の遊戯の如くに考へられて居たと思はれる。『雲州消息』中に、「一日於小六條有和歌會。題云、花如雪、鶯出谷。序代右衛門佐書之。曉更講之。終夜聯句朗詠。且爲守庚申也」とあるのは、この事實を物語ると思ふ。その状態は、連歌が和歌の會の餘興として弄ばれて居るのと、酷似したものであつたと考へて良いであらう。聯句のみを中心として會合する如き事は、『玉葉』などには散見するから、平安時代後期に及んでは、聊か流行の勢を得て居たものと思はれる。これも、當時の長連歌の勃興と關係があるものの如く思はれる。

六 平安時代の聯句には、漢土の聯句を摸倣した眞面目な作も多く行はれたであらうが、その當時の人々の感興はむしろ機智的な作、滑稽的な作の方に、より多く惹かれて居たものと思ふ。『江談抄』所引の實例や、『臺記』や『古事談』などに見える聯句が、何れも、奇智滑稽の面白さを持つものであることから、かやうに考へるのである。これも、平安時代の短連歌からの影響であると考へるべきで、すでに平安時代に於て、聯句は著しく日本化し、連歌化して居たと斷じて良いであらう。又、かやうな奇智滑稽の聯句は、その性格から考へて、句

數は二句か四句位の、所謂言ひ捨てに近いものであつたらうと思はれる。

七 聯句を記載するのに、折紙を用ひる形式が既に出來て居り、月や花を賦する句などが、一篇の中には有るべきものといふやうな約束が出來てゐたことが、考へられる。この形式は、日本の長連歌に大きい影響をあたへたものであつた事も、想像して良いであらう。

第三章 短連歌の性格と其の發展

一 機智問答の性格

我國の連歌の起りは、一首の和歌を二人で唱和的に詠むといふ事から生じた。その點で、萬葉集卷八の、大伴家持と尼との作品を以て、起源と考へるのが定論となつてゐる。唱和意識のみから言へば、家持以前からあり、歌問答といふ形から言つても、家持以前からあるが、それ等は、一首の短歌形式の中に於て、二人が唱和や問答をしてゐるものでないから、連歌の始めであると
は言ひ得られないと言はれてゐるのである。『菟玖波集』卷十九の雜體連歌の中には、日本武尊の「にひはりつくば」や、聖武帝の「いはで思ふぞ」などが加へられてゐるが、右の條件に於ては失格である。家持等の作は、雜體の部には入れないで、卷十二の雜の部に入れてゐる所を見て

も、『菟玖波集』の撰者の意のある所は、十分に推測し得られるのであつて、これを以て正格な連歌の始と考へてゐたことは、確實と言ひ得る。

連歌のやうなものが、どうして起つたか。これは機智問答的な興味といふものが、何としても、その中心である。感情の詠歎的表出への意志からは、かやうな智的興味は起らない。従つて、和歌形式といふものが、十分に發達し、表現様式や修辭が或度までの發展をとげて、所謂詞花言葉を翫ぶといふ境地になつて、かかる形式は發生して來ると考へられる。家持の時代は、さうした時代の曙の時代であつた。

佐保川の水を堰きあげて植ゑし田を

尼 作

刈る早飯はひとりなるべし

家持 續

といふ作品について見ると、その前の、或者が尼に贈れる歌二首の「手もすまに植ゑし萩にやかへりては見れどもあかぬ心つくさむ」、「衣手に水澁つくまで植ゑし田を引板われはへまもれる苦し」との連關に於ては、何か尼の愛育した娘に對しての求婚者に對して、尼が上句を作つて、家持に下句を詠へたものと思はれるのであるが、その家持の作自體の構想修辭に於ては、全く後世の連歌と同様に、言語的洒落で以て作られてゐるのである。即ち、「ひとりなるべし」は、「獨り、

なるべし」と「樋取りなるべし」との掛詞である。佐保川の水を堰いて、樋を以て導き灌漑して作りあげた田の收穫（早飯）なら、それは正に樋取り（樋の力で以て收穫した）といふべきだろうとの、言語的な洒落が用ひられてゐるのである。

かやうに智的興味を以て、自己の言ひかけに對して相手がどう出るか、どう答へて来るか、といふ點に、感興を以て言ひかける形として、連歌は發達した。その立場から言へば、短歌の上の句を以て問ひかけ、相手が下の句を以て答へるといふのが、先づ自然に起り来る形式である。（下の句を以て言ひかけ、上の句を以て答へるといふのは、更に知的技巧の進んだ上のことで、上の句に對して下の句で答へるといふことが、相當廣く長く行はれた後の所産である）。且つ、上の句は、所謂言ひあました（上の句だけで言ひ切り、意味の完結したものでない）もので、一句獨立した形のものでないのが、先づ發生してくるといふことも自然である。尼の作の「植ゑし田を」といふ形や、『伊勢物語』の「かち人の渡れどぬれぬえにしあれば」といふ形などは、上の句に於て言ひあましてゐる。言ひあまして、上の句だけでは獨立しない所に、下の句が附けられる原因があり、答句を要求する問句の性格があるわけである。

以上のべたやうな、最初に發生して來ると思はれる形式のものを、二三の例をあげて示すと、

躬恒と貫之とがぐして、物へまかりけるに、奥山に

杣人の木挽く音の、舟こぐに似たりければ

奥山に舟こぐ音のきこゆるは

躬 恒

なれる木の實やうみわたるらん

貫 之 (後頼嗣)

熱みと海との掛詞を以て、難問に答へたのである。

すきものども集りて、詠みがたかるべき末を付けさせんとて、かくいふ

わたつみの中にぞ立てる小牡鹿は

いでこれが末付けよといへば

秋の山べやそこに見ゆらん

(榕垣集)

海中に立つと見えるのは、秋の山が海にうつつてゐるためであらう、と述べたのである。

殿上人、桂より舟にてわたるに、星のかげの見えければ

みなそこにうつれる星のかげ見れば

公 任

あまの戸わたる心地こそすれ

實 方 (小大君集)

機智的な着想の面白さで、前句に答へてゐる。

同じ人の許に、葵をやりたりしを、年をへて、祭の日おこせて

としごとには昔は遠くなりゆけど

といひたりしに

あふひは今日の心地こそすれ

(赤染衛門集)

逢ふ日と葵との掛詞で面白く答へたものである。

四月祭見に出でたれば、かの所にも出でたりけり。さなむめりと見て、むかひに立ちぬ。待つほどのさうざうしければ、橘の實などあるに、葵をかけて

あふひかと聞けどもよそにたちばなの

と言ひやる。やゝひさしうありて

君がつらさをけふこそは見れ

とぞある

(蜻蛉日記)

逢ふ日(葵)かと聞いてゐるが、逢はうともしないで、よそに立ちてゐる(橘)のは、といふ言ひかけに對して、君のつれない心は今日こそはつきりと見とどけた、といふのである。

宮失せさせ給ひての又のとしの春、大納言參りたまひて、すびつの灰に手習に

花の香の匂ふにももの悲しきは

とありしに

春やむかしのかたみなるらん

(辨乳母集)

春が來花の匂ふのに、物悲しいのは、といふ言ひかけに對して、その春は、亡せ給うた人のかたみであるためであらう、と附けたのである。

二 下句起しの形式の發生

以上の形式に對して、七七の句を以て問ひかけ、五七五を以て答へるといふ形式は、ややおくられて發生してゐる。山田孝雄博士は、これを以て、連歌發達の第二期と考へるべきだと言つてゐられるが、七七に對して五七五をつづけるといふ事は、長連歌が發生してくる素地を開いたものといふ意味で、非常に注意すべき事柄である以上、博士の説は何人も首肯せられるであらう。而して、かやうな形式のもの初見としては、『拾遺集』に見える六首の連歌の中に、

思ひたちぬるけふにもあるかな

藤原忠君

かからでもありにしものを春がすみ

むすめ

くらすべしやは今までに君

侍 女

とふやとぞ我も待ちつる春の日を

廣幡御息所

といふ二首のあるのを初とすべきであらう。これは、七七を以て問ひかけたに對する答であるから、五七五の句は、それ一句としては完結してゐないのは、自然であらう。他の例を二三あげると

人のもとにて、あまた人々

ねまちの月をふして見るかな

といふもとをなん付けつるとききて

いざよひもたちまちにやはいづるとて

(相模集)

寐待ちの月(十九夜の月)を伏して見る(伏待月は廿日以後の月)ことだ、といふ前句に對して、十六夜の月も、忽ち(立待月は十七夜の月)に出るものではないから、といふ答句の洒落である。

九月の朔に、人に物いふ折に、夜いたう更けて、ほのかに雁のなくを聞きて、すぐ

してもあるべきに、かれ聞けいかが、といふ人のありしかば
心そらなる旅のかりかな

また人

一聲も聞かぬ寐覺はなけれども

さやは言はむと思ひつると、心の中に

めづらしき聲と聞けども小夜中に

(相擬集)

この例は、自分で問の句を出し、相手がそれに答へたのに對して、自分もまた答句を附けて見た例である。「心も空に旅雁の聲を聞くことだ」、といふのが前句で、「いづも寐覺めには聞く雁の聲であるけれども」といふのと「珍らしい聲だとは聞くけれども、この小夜中では」といふのが答句である。

春の月あかき夜、公達あまた参りて遊ぶに、内より、御物忌にこもり給へとて來たれば、かたきものをとて、みちかたの辨

いづる空なき春の夜の月

とありしに

故郷にまつらん人を思ひつつ

(赤染衛門集)

自身立ち出る氣がしないといふことを、春の月に託して言つたのに對して、それは故郷に待つ人があるためであらうと洒落て附けた句である。

大納言、宣耀殿の御前に花のいみじう散りければ、いかが見給ふとありしかば
散るこそ花のさかりなりけれ

といひしかば

咲き咲かぬ所もわかず吹く風は

(辨乳母集)

「散るのが花の盛りだ」といふのは、矛盾した言ひざまである。さうした問ひかけの句に對して、これを正當化するために、「咲く所も咲かぬ所も區別なしに吹く風から言へば」といふ句を附けたのである。咲かない所は吹いても花は散らう筈はない。だから、散る所こそ花盛りの所なのだ、との意である。

小一條殿の人々、なぞなぞ物語りす

かたず負けずの花の上の露

といひけるに

すまひ草あはする人のなければや

(實方集)

前は謎的な問ひの句である。「その勝たず負けずの花」といふのを、勝負させる人がなくて、咲いたままにしてある相撲草、といふ風に機智をはたらかせたところに、此の附句の面白さがある。

火たきやに雪のつもりけるを、宮の下野

いかでか積る火焼屋の雪

と言へば

けむり立つ富士の白嶺もかかるにや

(康養王母集)

火たきやであれば、焼く火のために雪も消える筈であるのに、雪が積るといふは如何、といふに對して、富士の山も烟を出してゐつつ雪がつもるといふから、丁度この火焼屋の雪の如きであらう、と答へたのである。

以上は、何れも七七を以て問ひかけ、五七五を以て奇智的に答へたものであつて、附け句たる五七五は、一句としては完結しない言ひ餘しの句である點が共通である。

かやうに七七の句を以て、問ひかけてゆく連歌といふものの起つて來る起源として、既に存在

する和歌の下の句を前句として、それに五七五の上の句を、幾つも附け試みる事が、既に紀貫之や在原滋春や凡河内躬恒によつて行はれてゐた事實を、山田博士が指摘せられたことは、達見といふべきである。その一部分は、『菟玖波集』の卷十九雜體連歌に採られてゐるが、全貌は『古今六帖』の第四帖に於て見る事が出来る。即ち、紀友則の、「女をはなれて詠める」と前書した「瀧つ瀬に浮草のねはとめつとも、人の心をいかが頼まむ」といふ歌の下句を前句として、

かげるふのかげをば行きてとりつとも 貫之

わたつみの波の花をばとりつとも

漕ぐ舟の棹のしづくは落ちずとも

荒るる馬をくちたる繩につなぐとも

我が袖の涙に魚は住みぬとも

袖の内に月の光はとどむとも

散らずして去年の櫻はありぬとも

劫の石を蟻に負ほせて運ぶとも

滋春

蚊の眉に國郡をば立てつとも
火を打ちて水の内にはともすとも

ますかがみ主なき影はうつるとも
かるかやを螢の火にはともすとも
年の内に月なき月はありぬとも
わたつ海を掬びて底は見せつとも
手をさへて吉野の瀧は堰きつとも

躬 恒

の如く各自が附けてゐるのである。これなども、見方によれば、後世の前句附けの源流であると言ふことが出来るであらう。

三 各句の獨立性の唱道

次に、源俊賴やその後をうけて藤原清輔などが、連歌についての要件としてあげてゐる各句の独立性について見よう。『俊賴髓腦』に「連歌といへるものあり。例の歌のなからをいふなり。本末心にまかすべし。そのなからが中に、言ふべき事の心を言ひ果つるなり。心のこりて、付くる人に言ひ果てきするはわるしとす」といふのがそれである。前句に於ては、意味が一句として完結してゐなくてはならないといふ條件である。これを擴充すれば、附句もやはりそれ一句として意味の完結といふことが求められることとなる。かやうな例は、古い所では、『公忠集』の、「延喜の時に五位なりしに、御位さらせ給ひたれば、ひらぎぬの装束にてまかりたれば」と前書して

ほどもなくぬぎかへてけるから衣

女 房

あやなき物はよにこそ有りけれ

公 忠

の如きもの、又、天曆御製に對して、滋野内侍のつけた

さよふけて今はねぶたくなりけり

御 製

夢にあふべき人や待つらむ

内 侍

や、同じく『拾遺集』の

春はもえ秋はこがるかまど山

霞も霧もけぶりとぞ見る」

清原元輔

人ごころうしみつ今はたのまじよ

良岑宗貞

夢に見ゆやとねぞすぎにける」

平定文

の如きものがあるが、多數の例があげ得られるのは、平安時代中期の道長時代になつてからである。

よるの間にいしばしばかり寐てゆかん

草の枕に露は置くとも

(清少納言集)

これは、中將齊信が、石橋のほとりで殿上人の遊んでゐる際に、石橋に言ひかけた歌をと望まれた前句に對して、清少納言の附けた連歌であるが、石橋と寝暫しと言ひ掛けて、しかも上の句で一句完結した形となつてゐる。

都出でてけふここぬかになりけり

とうかの國にいたりしかな

(赤染衛門集)

『俊頼髓腦』によれば、赤染衛門が尾張國に下つた際、途中病氣で暫くとどまつてゐる中に、九日にもなつたので、守が前句を言つたに對して、赤染が附けた句で、十日のと疾う彼のと掛詞を

用ひてゐる。これも上の句で、句意完結してゐる。

山の井のふた木の櫻咲きにけり

みきと語らん來ぬ人のため

(赤染衛門集)

「花見に歩きしに、山の井といふ寺の櫻の、二木あるを、もろともなる人」と前書がある。赤染の句は見きと三木とを掛詞としてゐる作。上の句で句意完結してゐる。

數ふれば今いつ月になりにける

むつきにならばとふ人もあらじ

(實方集)

此の句は、爲相がかうぶり(五位)を得べき前年の八月に、月の明るい夜、物語などした序に、實方が、「數へると、汝が五位に敘せられるまで、残り五ヶ月になつた」といふ意の前句をよみかけ、爲相が、「睦月(六月)にもなるならば、もう問ふ人もないだらう」と答へた連歌であるが、やはり前句で言ひ切つてゐる。

さを鹿の耳ふりたてて聞しめせ

おもとを犯す罪はあらじな

(實方集)

前書に、「六月祓に、ある家垣の前をわたれば」とあつて前句を記し、「といふ人あれば、いと疾

く」として、實方の附句が記されてゐる。従つて、前句は詠みかけられた句でなく、祝詞の一節であるが、その一節を、前句として、同じく「犯す罪はあらじ」といふ祝詞の一節を洒落て、一つの連歌の如くに仕立てたのである。

以上は、前句が五七五で、和歌の上の句の形式でありながら、それ一句として、意味も句形も完結したものの例をあげたのであるが、更に時代が下つて、俊頼の『散木奇歌集』になると、前句に於て言ひ果ててゐない連歌は、總數五十三首ある中に、一首もなくなつてゐるのである。従つて、院政時代に及んで、一句の獨立といふ事は、はつきりと確立せられたものと考へて良い。平安時代中期では、まだ言ひ切つたものと言ひ切らぬものが、相半ばするといふ程度であつたのである。

四、對句的表現の短連歌

次に、第三の發展と見るべきものは、前句と後句が、それぞれに、對句的に考へられ作られた

作品のあらはれて来たことであらう。例へば金葉集の

桃園の ももの花こそ咲きにけれ

頼 經

梅津の梅は散りやしぬらん

公資朝臣

の如きである。桃園と梅津が對を成し、桃の花と梅とが對をなし、咲にけれと散りやしぬらんが對を成してゐる。漢詩に於ける對句の行き方そつくりの手法が見られるのである。かやうな作品は、『金葉集』や『散木奇歌集』などに相當多くあらはれてゐる。『散木奇歌集』から數例をあげて見よう。

とりと見つるはうさぎなりけり

木の實かとかきはまぐりもきこゆれど

「鳥かと思つたのは兎であつた」といふに對して、「かきやはまぐりも、名を聞いただけでは木の實かと思はれるが」といふ附句で、對句的に構成せられてゐる。しかも、兎と鶉、鶯とを掛詞として「鳥と見つるは」に應ぜしめ、「かきはまぐり」では、牡蠣・蛤と柿・栗とを掛詞として、「木の實かと聞ゆれど」應ずるやうに仕立てられてゐるのである。

たるきには山のうつばりさしてけり

軒には海の月を宿して

棟から軒先にわたす極木と軒と對し、山のうつばり（雉子）と海の月（海月）と對し、さしてけりと宿してと對して、一句全體としての對句構成をとつてゐる。極木に山の梁をさすといふことは、難題的な前句であるが、附句はそれを巧妙にさばきあしらつてゐるのである。

田笠きてはたけに通ふ翁かな

牛にむまくはかけたるもあやし

前句が、「田笠を着るなら田に行きさうなものだのに、あの翁は舟に通つてゐる」と、田と鳥との矛盾を指摘したのに對し、附句は、「馬にかけるならば名實相應する筈なのに、牛に馬鞆をかけてゐるのはをかしい」と、牛と馬との矛盾を指摘して、前句と構想的興味に於て對句ならしめたものである。

内侍こそ仕度の内を出でにけれ

外記はおもひのほかにも參れど

これも、内侍と外記と、支度の内と思ひの外と、出でにけれと參れどと、それぞれに對せしめて、對句的構成をとつたものである。

以上のやうな對句は、一句づつとして對し、又、その中の語までも對應させてゐる。かやうな行き方は、漢詩の對句に學んだものであるが、漢詩の對句は、五言對なり七言對なりで、對する句の文字數が同じであるから、鮮明に對句となり得るに比べて、連歌は一方が五七五の長句であり、一方は七七の短句である爲に、漢詩的な對句は作り難い。又、言葉の性格も異なるから、その困難さは更に倍加するわけである。従つて、努力した割合には、その連歌的な面白さは乏しく、効果も薄いといふことになり、次第に又作られなくなつて行つた。従つて、短連歌は、一句で獨立した意味を持つ句を對應させて、難題的な又は謎的な言ひかけに對し、それを巧妙にあしらひさばく奇智巧妙な附句をつくるところが、何と言つてもその中心とならざるを得ないのである。

第四章 鎖 連 歌

一 鎖連歌の發生の問題

鎖連歌くまりの發生と漢土の聯句との關係は明らかではない。といふのは、鎖連歌が、漢土の聯句に暗示せられて、三句以上を連ねるに到つたのか、或は、五七五—七七といふ短歌形態に再一句を加へ又は數句を加へて、長く連ねる事が生じた後に、六朝や唐などの聯句を、参照するに到つたのか、その間の消息は、今日に於ては徵すべき資料文献が無い故に、斷定を下すことは、甚だ困難である。今日我々の見得られる材料からすれば、鎖連歌に聯句からの影響と思はれる部面はたしかにありはするが、それを以て、直ちに、鎖連歌は聯句を學ぶことによつて發生したものであると論ずる事は出来ないのである。

従つて、此の問題については、臆測的な推斷を下すより仕方がないのであるが、種々の方面から考へて、私は、鎖連歌の發生には、聯句は參與しないものであり、鎖連歌の發達には、聯句が參與したものであると、考へるべきだと思ふのである。

既に山田孝雄博士も指摘して居られる如く、五七五に七七の句を附ける行き方以外に、七七の句に五七五を附けるといふ附け方が生じ、それが相當に多く行はれてゐる時代になれば、五七五・七七といふ短歌形態に、その七七を前句として更に五七五を連ねて見るといふ事は、極めて容易に行はれ得ることでもあり、且つ興味をそそる事であつたと考へられる。それは、或る一人のふとした思ひつきに發したものであつたらうが、一度さうした三句を連ねるといふ行き方が起れば、目新しい面白いものとして、多くの追隨者が出來て來ることは、當然に豫想せられることである。三句を連ねる試みが起れば、これが四句五句等から十數句にまでも延長せられることは、これ又、極めて易々たる事である。私はかくの如くして、鎖連歌といふ形態は發生したものだと思へるのである。

短歌形態の五七五・七七の、七七に連ねるに、更に五七五を以てする場合の、構想的興味は、すでに、『古今六帖』に於て、紀友則の「瀧つ瀬に浮草の根はとめつとも人の心をいか頼まん」

といふ歌の下の句を前句にして、貫之や躬恒などが試みてゐる多くの上の句を見ても感じられるのであるが、『古今六帖』の例は、友則の上の句と同様の構想の句を並べたものであつて、五七・七七・五七五とつづけても、その五七五の相互は類似してゐるために、意境の新しい展開はないのである。謂はば、意境はぐるぐる廻り的なものになつてゐる。それで、鎖連歌の第三句は、第一句と第二句とによつて作られてゐる世界とは、別の境地を、第二句と第三句とによつて作りあげるやうに構想しなければ、新しい展開の味はひは出で難いことになる。例を、『續世繼』卷八の連歌にとつて見ると、

奈良のみやこを思ひこそやれ

藤原公教

八重ざくら秋のみぢやいかならむ

源有仁

しぐるるたびに色やかさなる

越後乳母

といふ三句の連歌に於ては、これを解きほぐせば

八重ざくら秋のみぢやいかならん

奈良の都を思ひこそやれ

といふ歌と

八重ざくら秋のみぢやいかならん

しぐるる度に色やかさなる

といふ歌とが成り立ち得るやうになつてゐる。即ち、八重ざくらといふ五七五の句は共通であるが、その二つの歌は明らかに違つた意境を表現してゐる。ここに、くさり連歌としての展開性があるのである。

かうした觀點から考へると、短連歌を生み出した興味と、鎖連歌を生み出すに到つた感興とは、その出發點が異なるものであることを認めざるを得ない。短連歌は、一方の言ひ掛けに對して、當意即妙の答をする、といふ所に感興が胚胎してゐる。そして言ひ掛けが難題的なものであるほど、その答への句には奇智縦横なはたらきが必要となり、それがうまく巧妙に答へられる時、一同の者が感服し喝采するわけである。それに對して、鎖連歌の感興は、和歌の長句又は短句を取つて、それに附句をつけて、同じ一句が二首の和歌に共有であるといふ二つの歌を、構成する所に感興の中心がある。これも一種の奇智を必要とはするが、その智巧は、一句を共有する二つの和歌が、それぞれに、全く違つた世界を表現するやうに構想する所に發現するのである。『八雲御抄』に「かまへて連歌をば、あらぬやうに引きなしひきなし付くるなり」とあるのは、鎖連歌に於ては、

意境が思ひまよらぬ方へと、ぐんぐんと展開してゆくべき事を言はれたものであつて、此の點に、鎖連歌の感興の中心があるのである。

鎖連歌は、従つて、各句が鎖の環の如くに、その前の句と後の句とに連なつて、どこまでも延びてゆく。そして、一句毎に境地が變つて、打越（前句のもう一つ前の句）の句と、附句とは全く無關係であるのであるが、かやうな句々の進行は、漢土の聯句には全く見られない所である。

漢土の聯句は、柏梁體のもので、連詩型のもので、何れも一つの主題を中心として句々が連ねられて、詩想の統一を持つものである。鎖連歌には詩想の連なりは前後の二句の間にはあるが、全體としての統一を殊更に嫌ふのである。もし鎖連歌が、漢土の聯句に倣つて發生したものであつたならば、かやうな行き方をしないで、何か詩想なり主題なりに於て、一貫するものを持つ形として別な展開をしてゐたらうと思ふのである。例へば、『續世繼』の如きものであれば、奈良の舊都を中心として、文選の西都賦の如く、長句短句を交互に使ひながらも、主題に於て南都といふ一貫した統一を生み出し得る可能性はあつたと思ふのである。それなのに、鎖連歌として伸びて行つたといふことは、句毎に、あらぬやうにあらぬやうにと、引きなし引きなし附けるといふ點に面白さを感じ、その面白さによつてこれが發生し發展したことの爲であると思ふのである。

これは又、鎖連歌といふものが、娛樂遊戯としての出發を持つものであつた事にも因る。その點では、短連歌の奇智を戦はすことに遊びを感じて居た心と、全く共通のものである。鎖連歌といふやうな形式で、新しく眞面目な、和歌に匹敵するやうな詩を作り出さうなどといふ意慾はないのである。又、聯句に匹敵する如きものを構想しようといふ意慾も無いのである。

我が國に聯句が現はれたのは、『懷風藻』の頃であるが、記録の上では後一條天皇の長元二年の『賀陽院水閣歌合』の記事が最初であると言はれてゐる。それには「廿二日於山崎橋下乗舟、聯句、聯歌和漢任意」とある。これは歌合に勝つた方の連中が、五月廿一日に京都を出發して、八幡や住吉に參詣した際の記事であるが、船中の徒然をまぎらはすために、或者は聯句を、或者は連歌を試みたといふのであり、連歌の部に加はるか聯句の部に參加するかは、各人の意に任せたといふのである。従つて、此の時代には、聯句も連歌も、面白い遊びの一つとして、相當に貴族社會には流行して居たものである事が知られる。長い鎖連歌が発生したのは、大體院政期に入つての後であらうと言はれてゐる。例の『續世繼』には「越後の乳母・小大進などいひて、名高き女うたよみ、家（源有仁の家）の女房にてあるに、公達まいりては、くさり連歌などいふこと、常にせらるるに」とあるが、「くさり連歌などいふこと」と記した記しざまは、勿論短連歌に對

しての區別意識からのものではあるが、何となく、それが其の頃から流行しはじめてゐたもの
如きことを感じさせるやうな書きざまである。若し、くさり連歌が、一條天皇の頃にはまだ發
生して居らず、院政期に入つて發生したものとすると、連歌人が聯句人と共に徒然をなぐさめ
たほどに、連歌と聯句が接近關係にあつた後の發生なのであるから、鎖連歌の發生には、聯句が
參與したと見る方が、妥當ではないかといふ意見も提出せられるであらうと思ふ。それに對して
は、勿論否定する資料は全くないのであるが、鎖連歌といふものの性格から言ふと、どうも聯句
に倣つて發生したものは、私には考へ難いのである。

二 鎖連歌に及ぼした聯句の影響

鎖連歌の發達途上に、聯句の及ぼした影響が、如何なるものであつたか。その點を検討して見
たい。

(一) 句數

鎖連歌の句數に於て、發生時代の當初には、別に句數が定まつて居たとは思はれない。感興のある限り連ねて、興が止めば、何句でも終りとしたであらう。それは又、比較的句數も少ないものであつたらうと想像せられる。それが百句又は五十句などと、一定の數が大凡に定まるに到つたのは、『八雲御抄』に、「昔は五十韻百韻とつづくる事はなし。ただ上句にても下句にても言ひかけつれば、いま半なからをつけけるなり。今のやうにくさる事は、中比よりの事也。賦物なども中比よりの事歟」と述べられてゐる事から考へて、賦物といふことの發生と相當に密接な關係に於て定まつて來たものと思ふ。例へば、永萬元年に、いろはを冠に置く連歌が行はれ、小侍従が、「うれしかるらん千秋萬歳」といふ前句に對し、「あはこよひ明日は子の日とかぞへつつ」と付けて名譽を博したことが『古今著聞集』に見えるが、それは、各句の句頭に、いろはを置くものであるから、完備すれば四十七句となるべき性格を有する如きである。しかし、賦物と長連歌とは密接な關係があるとしても、百句を本體とするといふ事は、賦物からは發生し難い。そこで、一般に百といふ數が、數の多いものを區切るに便利な數として考へられてゐるといふ事に、その原因を持つて行くべきであらうと考へられてゐるのであるが、他面に於て、當時我が國で行はれて

るた聯句が、既に百韻を以て、一つの標準の如くにせられてゐたといふ事實も、長連歌を百句で以て標準とするといふ事に、大きい影響をあたへたものであらうと、私は考へるのである。當時の聯句の事を賦した詩が、『本朝無題詩』の卷二に、二首見えるが、その中の一首に

賦連句

藤原茂明

縁底通宵令睡驚 捉携連句感相并

爐邊折紙先催興 燈下接襟各動情

百韻滿來吟月曉 五言綴得賦花程

文資詩友今爲道 詞海如何欲釣名

といふのがある。この作者茂明は聯句に於てすぐれて居り、當時その道の雄として知られてゐた人物で、『古事談』には次のやうな逸話がのせられてゐる。

敦基朝臣、參法性寺殿（關白藤原忠通）、褒美子息等事。其後有聯句會之時、茂明侯其座。殿下思食出先日事、被仰云、「愚息稱賢息」。心得アトリモアヘズ、「令明與茂明」ト申シケレバ、頻ニ御感アリケリ。

この話は、令明も茂明も、共に敦基の子であることを考へると、興味深々たるものがあるが、と

にかく、崇徳近衛帝の頃に、茂明が聯句に於て有名であつた事はこれでも知られると思ふ。さて、この茂明の詩は、當時の聯句の状態を知るのに有力な資料であつて、諸種の事柄がこれから考へられるのであるが、句數に關係したことをして、「百韻滿來吟月曉」といふ一句は、當時の聯句が、百韻に及ぶものを以て、大體の標準としてゐた事を示すものであると思ふ。源有仁などが鎖連歌を喜び翫んでゐた頃は、詩人たちは、かやうな聯句に興を遣つてゐた時代であつた。従つて、連歌が段々にその句數をととのへるに到る時代になつて、その標準を、聯句の韻數に倣ふといふことは、十分にあり得ることと思ふのである。因に、諸種の記録に見られる聯句の句數は、區々たるものであつて、必ずしも百韻とは限らず、三十韻・七十韻・百廿韻・五十韻等があるが、百韻は水左記にもあらはれ、玉葉にはしばしば見える所であるし、茂明の詩にも見られるから、大體これを以て標準としたものと考へて良いであらう。

(二) 韻といふ名稱

句數に次いで、聯句からの影響と見るべきものは、長連歌に於て、五十韻・百韻等の名稱が用ひられてゐる事である。漢土の聯句には、隔句に韻がふまれて居り、百句連続の聯句ならば、五

十韻と稱する事は、名と實と相かなふわけである。然るに、我が國の長連歌には、韻字を用ひる事は無い。韻字に代はる如きものとして、賦物といふことが行はれてゐるが、賦物は各句に行はれて居て、隔句に行はれるといふ定めは無く、又、それは韻字を用ひるものでもない。従つて、長連歌の句數を示すのに、百韻とか五十韻とかの名目を用ひる事は、理論的に見て全く意義の無い事なのである。然るに、かやうな名稱が用ひられてゐる事は、全く漢土の聯句の名稱を借用したものに過ぎない。そして、かやうな借用が行はれたといふことは、長連歌の發達途上に、聯句の及ぼした一つの影響と見るべきものである。聯句が院政時代の末頃になつて、大體百韻といふ定型に落つて來た頃、長連歌も大體百句といふ數が標準と定まり、それを、聯句の稱呼に倣つて百韻と呼び、その半數五十句のものを、五十韻と稱へるに到つたのであらう。

かく考へるにしても、聯句に於ては、二句を以て一韻と計算するに對して、連歌では一句を以て一韻と呼ぶことゝの理由が明瞭ではない。この疑問に對して、山田博士は、「唐土での聯句は、二句一韻が一人の詠ときまつてゐた。我が國の聯句でも、勿論それが正式であつた」とせられて、聯句が一人一回の詠を一韻と稱するに對して、連歌に於ては一人一回の詠は一句である故に、一人一回の詠を一韻と考へて、百句を百韻と唱へるに至つたものであらう、と考へられた。この考

へ方はまことに面白く、私も賛し度く思ふのであるが、漢土の聯句は必ずしも一人二句一韻と定まつて居たわけではなく、白氏文集に多く見られる一人が一回に四句二韻を詠じた例や、又は、韓愈等の作品に見られる如く、一人が一回に四句以上を詠じた作品もあり、又、一人一回一句一韻といふ如き例もあるので、「唐土の聯句は二句一韻一人の詠と定まつてゐた」といふ事は言ひ難いかと思ふ。又、日本の平安時代の聯句は、その作品の傳へられるものが乏しいから、はつきりした事は言へないが、江談抄卷六の例句などより見ると、一人一句らしいものが多く、必ずしも、一人二句一韻と定まつて居たとも言ひ難いかと思ふ。前に引用した古事談に、關白忠通の「愚息稱賢息」に對して、茂明が「令明與茂明」と應じた如き、又、台記に於て、康治二年二月廿日の條に「終日連句興。俊通上句云、田豆、又田豆、幽明下句云野篁、復野篁、此句尤有興」とある如きも、一人一句で以て機智的に附けてゆく點が、興味多いものであつた如き印象を受けるのである。従つて、聯句は一人が一回に二句一韻であるから、一人一回一句の連歌も、一人一回を一韻と稱するに到つたものであるといふことは、猶明確には斷定し得ないかと思ふのである。強ひて説を立てれば、「平安後期に多く弄ばれた遊戯的な聯句は、一人一句が多かつたから、連歌も一人一句を以て、一韻と言つたのであるまいか」といふやうな論も成り立ち得るわけである。勿論か

やうな論は、一つの思ひ付きにすぎないものであるが、見方をかへれば、かやうな論も成り立ち得る可能性があると云ふことは、連歌の一人一句一回を一韻とかぞへる理由が、まだ十分な断定的資料を持たない事を物語るものではあるまいか。尙、この事については、後の、賦物の條に於ても考へて見たい。

(三) 賦物についで

(4) 賦物は韻字の代用

賦物むつものは、初期の長連歌の一特色をなすものであつて、『八雲御抄』の中にも、賦物に関する注意は、六ヶ條にわたつて述べられてゐる。その中に、賦物について「連句の韻におなじ」と述べられた條項は、賦物の性格を物語る言葉として、注意すべきである。

傍かたはらの賦物むつものをする事は、わろく聞ゆるなり。たとへば、賦禽獸にけだもののたぐひ、賦物にはあらで、郭公などする事は、よくよく思ふべき事也。是は常の事、深き難にはあらねど、ふし物にすぎざらんには、さうに及ばず。すぎなんにも、いたくはつくまじ。されど、すぎ

なんはあながちの事にあらず。連句の韻に同じ。

といふのがそれである。聯句には、必ず韻がふまれてゐて、その韻字といふものの存在によつて、形式的に一篇の統一が保たれるものである。ところが、連歌には、韻字を用ひるとか押韻的手法を考へるといふことは、日本語の性質上、無理であり、和歌に於てさへも、容易でなかつたことが、連歌の上で出来よう筈はなかつたのである。そこで、聯句の韻字に代る適當なものが何か無いか、といふ事からして、この賦物を以て、それに代用させるに到つたと考へられるのである。

賦物の賦は「分ちくばる」といふ意を持つてゐる事は、先人のすでに考へた處であつた。前にあげた六朝の梁の光華殿聯句の際に、曹景宗が競病の二韻を以てした時のことを、南史には「賦韻」の文字を用ひて居り、我國に於ても、賦韻のことは平安初期以來多く見え、「押韻として詩句の終に韻字を分ち配る」意に賦の字を用ひたことは、『凌雲集』や『本朝麗藻』の前書によつても知られる。和歌方面で「賦」の字を、分ち配る意だと述べたのは、藤原爲家の「八雲口傳」が初めの如くである。連歌に於て賦物について述べたものは前掲の『八雲御抄』をはじめ多く見られるが、『連歌辨義』には、それ等を參酌して、

「連歌の賦は、くばるといふ意なり。百韻五十韻、句毎に其物を（山何・何路・物の名の類也）くばる故なり。昔は、五ヶ十ヶなど定りたることはなし。或は鳥獸、或は草木、或は國の名、或は古今集の作者の名、或は源氏物語の卷の名、或は白黒、或は一字露顯、二字反音、三字中略、四字上下略、或は有心無心など、色々の事を賦りて興じたる也。

と述べてゐる。例へば、鳥獸を賦物にする場合には、長句には鳥の名を詠み入れ、短句には獸の名を詠み入れるし、源氏國名の百韻とすれば、長句には源氏物語の卷名を詠み入れ、短句には國名を詠み入れるといふ如きである。定家の『明月記』には、賦物の事がいろいろ記されてゐるが、それは大い

賦浮沈物。

賦魚鳥。

賦黑白。

賦木人名。

賦人草名。

賦魚河名。

賦草木。

の如く、二つのものが對してあげられてゐる。これは、長句が浮く物の名を詠み入れれば、短句は沈む物の名を詠み込むといふ如く、長句は長句として一類のものを、短句は短句として一類のものを詠み入れて行くのが、當時の方式であつた事を告げる。かくの如くして、長句には一貫して魚の名が詠みこまれ、短句には又一貫して鳥の名が詠み込まれるとすれば、それは聯句に於て、

同じ韻の字が、一篇を通じて、各作者によつて用ひられると同じやうな、形式の上の統一性を生み出して來ることになるのである。ここが、賦物を「連句の韻におなじ」と言はれた理由であると思ふのである。

かやうに連歌の賦物は、長句にも短句にも、それぞれに詠み込まれて居り、且つ、それが聯句の韻に相當するものとする、鳥獸の賦物ならば、鳥名も隔句にあらはれ、獸名も隔句に現はれて、「隔句に發現する」といふ點で、聯句の韻字と同性格を持つ事となる。そして、これが、韻字代用であるといふ點から見ると、「連歌は各句に韻字に代るものを持つ」といふことになるのである。連歌の句數を數へるのに、百句を百韻といひ五十句を五十韻と呼ぶ呼び方は、或はかやうな點に、その起源があるのではなからうかと、考へられるのである。

(四) 賦物の起因——物の名の歌

かやうな賦物は、一體何に起因して發生したか、といへば、和歌に於ける「物の名」の系統に立つものであることは、何人も認める處であらうと思ふ。『古今集』の卷十の物名の部には、歌の中に與へられた物の名を、うまく隠して詠み込むことによつて有名な歌が、集録せられてゐる。

即ち、

今幾日春しなければうぐひすも物はながめて思ふべらなり (すももの花)

足引の山たちばなれ行く雲の宿り定めぬ世にこそありけれ (たちばな)

山高み常にあらしの吹くさはにほひもあへず花ぞ散りける (しのぶぐき)

の如くであつて、李の花とか橘とか忍ぶ草などといふ物の名を、その一首の中に、隠して詠み込んでゐるのである。『古今集』の序の「かぞへ歌」といふ名目に於て、例歌としてあげられてゐる「さく花に思ひつく身のあぢきなき身にいたつきの入るもしらずて」の歌は、鳥の名の「つくみ」と、鳥を捕へる道具の「いたつき」とが、物の名として詠み込まれた歌であるが、その「かぞへ歌」は、六義の名目の賦に當るものである。

賦即ち「かぞへ歌」といふものが、「物の名」の歌を意味するものであると斷定することについては、相當に考慮を要するところがあつて、今俄かに定めがたいが、かやうな物の名を詠み込むといふ遊戯的な興味は、掛詞を用ひて一言二義的な言語遊戯を楽しんだ事から發生してゐる。例の『萬葉集』卷八の連歌「刈る早稲飯はひとりなるべし」の「ひとり」が、「一人」と「極取り」の掛詞の洒落であることなど、古い例としてあげることが出来る。「物の名」といふ部立ては、

『古今集』以後の勅撰集の中からは消えてなくなつたが、さうした言語遊戲的な和歌を詠ずる事は、連綿としてつづき、清輔の撰した『續詞花集』卷十九には、又「物名」の部を設けて、物の名の歌と、聯歌とを收めてゐるのである。しかも、その聯歌十七首を見ると、

いちなしにちしほ八千しほ染めてけりこはえもいはぬ花の色かな

誰ぞこのなるとの浦に音するはとまりもとむるあまの釣舟

雪ふればあしげに見ゆる生駒山いつ夏かげにならんとすらん

あしのかみ膝よりしものさゆるかなこしのわたりに雪やふるらん

いなり山ねきをたづねて行く鳥ははふりに夜半の霜やおくらむ

昨日きてけふこそ歸れあすはより三日のはらゆく心地こそすれ

の如く、何れも皆掛詞秀句を以て仕立てられ、物の名的な表現を内具してゐるのである。

かやうな觀點から、『俊賴髓』に收められてゐる連歌を検討してみると、四十一首の連歌の中、物の名的に、掛詞を用ひて表現した作は三十首に及んで居り、短連歌に於ても、一句を仕立てる重要な修辭的要素として、物の名的なるものを使つてゐた事が知られるのである。

ただし、短連歌に於ける物の名的な修辭と、長連歌に於ける賦物との相違は、又、明瞭に一線

を割すべきものがあることは明らかである。短連歌に於ては、機智の應酬として、秀句的表現が用ひられ、それによつて戲笑的な感興を惹起させることが目的とされてゐる。然るに、長連歌の賦物は、戲笑的な感興や機智の面白さといふことよりも、長句ならばすべての長句に、何れも鳥の名が何かしら詠みこまれ、短句ならばすべての短句に、何れも獸の名が何かしら詠みこまれてゐるといふ風な點に、一卷全體を見渡した際の感興といふものが中心となつて來るのである。それ等の鳥の名や獸の名が、如何に巧みに物の名的に詠み込まれてゆくか、といふ點に、創作の感興が持たれることは、短連歌のそれと異なる點はないが、全體としての上に於ける一類の物の名の統一的な詠みやうが、その感興の中心であるのである。その點で、聯句に於て、同韻の韻字を如何に生かして句を作るか、一度用ひられた韻字はなるべく避けて、他の同韻の字を以て句作しようとなつて努力するところの感興によく似た所があると思ふのである。

四 「物の名の歌」と漢詩の離合・雜名詩

漢土の聯句には、賦物に類するものは全く無いのであるが、詩の中には、連歌に於ける賦物や、和歌に於ける物名に類した技巧を用ひた作品は、漢土にも多く行はれ、それを模倣して、我が國

の平安時代の詩人もこれを作つて居るのである。従つて、我が國に於て、一首の中に物の名を隠して詠み入れるといふやうな遊戯的な和歌が生れて來た原因は、漢土のかやうな詩の行き方を模倣した所にあるといふことは、大體斷言して差支へないものであらうと思ふ。その點から言へば、賦物の最も遠い源流は、漢土の詩にある、といふことも言ひ得るわけである。

これ等の詩は、離合體又は雜名詩などと稱せられるものであるが、離合體について、『詩人玉屑』には、

離合。字相折合成文、孔融漁父屈節之詩、是也。

といひ、離合體の題下に

藥名詩、起自陳亞非也。東漢已有離合體。至唐始着藥名之號。如下張籍答鄱陽客詩云。江臯歲暮相逢地、黃葉霜前半夏枝、子夜吟詩向松桂、心中萬事豈君知、是也。(西詩詩話) 禽言詩當如藥名詩。用其名、字、隱入詩句中。造語穩貼無異尋常詩、乃爲造微入妙、

如藥名詩云。四海無遠志、一溪甘遂心。遠志・甘遂、二藥名也。

とその解説を下してゐる。前の張籍の詩に於ては、その中に、地黄・半夏・桂心といふ三つの藥名が隠して詠まれて居り、後の詩句には、遠志・甘遂といふ二藥名がかくして詠み込まれてゐる。

その他、『詩轍』所引の例をあげると

水、涉、黄、牛、浦、山、過、白、馬、津、(歌名)

啼、鳥、怨、別、鶴、曙、鳥、憶、還、家、(歌曲名)

澗、谷、永、不、變、山、梁、冀、無、累、(人名)

の如きものがあげられてゐる。又、唐の陸龜蒙の作の寒日古人名は、

初、寒、朗、詠、徘徊、立、欲、謝、玄、關、早、晚、開

昨、日、登、樓、望、江、色、魚、梁、鴻、雁、幾、多、來

とあつて、寒日と謝玄・梁鴻といふ二人名とを詠み込んでゐるもので、何れも我國の「物名」に

近いものである。我が國の例としては、最も顯著なものとして、『江吏部集』にある「五言、奉

試賦、得、教、學、爲、先、八十字成篇、每句用仲尼弟名」をあげることが出来る。即ち、句毎に孔子の弟子の名を詠み

込んだものである。

建、國、君、民、者、須、令、教、學、行、誨、來、予、不、倦、習、處、若、寧、輕、稽、古、長、鑽、仰、

于、今、自、化、成、有、時、歡、受、賜、何、日、忘、研、精、照、卷、月、清、潔、拾、螢、火、滅、明、

文、求、無、墮、地、賢、愧、不、齊、名、豈、敢、非、來、學、誰、應、得、退、料、幸、逢、施、德、世、

開、帙樂、心情。

教學を先とするの意を詠じた詩の中に、鄭國・樊須・宰予・有若・公冶長・縣成・端木賜・顔何・廉潔・滅明・冉求・宓不齊・秦非・冉耕・施常・漆離開の十六人の孔子の弟子の名を詠じ入れたものであつて、頗る手の込んだ作と稱すべきものである。我國の例でいへば、古今集の作者名を賦物に取つた連歌に似たものと言へるであらう。

離合詩は、本來は文字の偏や傍を離したり合したりして、文字の遊戯をなす一體であつて、

明、王施、化瑞昭然

月、照階、蕤水醴泉

侍、衙官、撻霜戟銳

人、臣節、伴雪松堅

第一句頭の明より日を離して第二句頭の月とし、第三句頭の侍より寺を離して第四句頭の人とする如き、又

佃、魚始化

人、民穴處

意、守醇樸

音、應律呂

耒、梓被原

卉、木在野

錫、鑿未設

金、石弗舉

害、咎蠲消

吉、德流普

谿、谷可安

奚、作棟宇

媯、然以喜

焉、懼外侮

熙、神委命

己、求多祐

嘆、彼季末

口、出擇語

誰能默識 言喪厥所 壘敵之諺 龍潛巖阻 眇義崇亂 少長失序。
を離合して「思楊容姬難堪」とする如きである。即ち佻より人を離して田とし、意より音を離して心とし、田と心を合せて思とする。素より卉を離して木とし、錫より金を離して易とし、木と易とを合して楊とするといふ風に、以下順次に離合して行けば、容・姬・難・堪が得られるのであつて、純然たる言語遊戯である。我が國の歌には、かやうな例は先づ絶無に近いが「むべ山風を嵐といふらん」など、聊かこの氣味がないでもない。

かく、本來の離合詩は、殆んど我國の和歌に關係を及ぼして居ないが、連歌の賦物の一種には、ややこれに近いかと思はれるものがある。それは、三字中略・四字上下略と呼ばれる賦物である。それは、三字中略は三字名詞の中を略しても、二字の名詞となるもの、例へば、霞を中略すれば紙となり、菖蒲を中略すれば雨となり、桂を中略すれば唐となる如きである。四字上下略は、四字の名詞の上と下とを略しても、二字の名詞となるものをいふ。例へば鶯が杭となり、玉章が松となり、苗代が橋となる如きである。これ等は、離合の離に當るわけで合といふべき所はないが、聊か離合的な色彩を有する點で、注意すべきものであるまいかと考へてゐる。

次に、雑名詩の中の一種で、雑數詩といはれるものには、冠字連歌や、冠字和歌などに影響を

及ぼし、その源流となつたのではあるまいかと思はれるものがある。例へば、陶淵明の四時詩は、
 春。水滿四澤 夏。雲多奇峰 秋。月揚明輝 冬。嶺秀孤松
 となつてゐて、春夏秋冬を句頭に置いたものである。又陳の沈炯の六甲詩は、

- | | | | |
|--------|-------|--------|--------|
| 甲。折開衆果 | 萬物具敷榮 | 乙。飛上危幕 | 雀乳出空城 |
| 丙。魏舊勳業 | 申韓事刑名 | 丁。翼陳詩罷 | 公綏作賦成 |
| 戊。巢花己秀 | 滿堂草自生 | 己。乃忘懷客 | 榮樂尙關情 |
| 庚。々聞鳥囀 | 肅々望鳧征 | 辛。酸多惘惻 | 寂寞少逢迎 |
| 壬。蒸懷太古 | 覆妙佇無名 | 癸。己空施位 | 詎以召幽貞。 |

の如く、甲乙丙丁の十干の名稱を句頭に配したものである。尙、此他に建除詩と稱せられるもの
 が行はれ、六朝時代に多く作られて、鮑照や梁宣帝や苑雲や沈炯等もその作を残してゐる。それ
 は我國にも傳へられて、經國集の中には、治文雄の「五言、奉試賦以建除等十二秋興字居句頭一首」と
 云ふものへ見えてゐる。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 建。酉星初轉 | 除。濕金正王 | 滿。江鴻翼正 | 平。陸菊聚香 |
| 定。識幽閨女 | 執。梭織錦章 | 破。簾虫網薄 | 危。隴月光涼 |

成_レ雨葉亂聲 收_レ芳草色黃 開_レ書周覽後 閉_レ戶歎_レ潘郎。

これも、建除等の十二字を句頭に冠した作であつて、伊勢物語の「かきつはた」といふ五文字を和歌の句頭に置いて詠じたといふ「唐衣きつつなれにしつ、ましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」といふ作など、かやうな詩體のある事を心に持つて作られた作であると言ひ得るであらう。又、源順の有名な「あめつちほしそら」を冠に置いて詠じた作なども、やはりこの類のものといふべきであると思ふ。現存する賦物連歌の、最も時代の古いものとして見られてゐる「いろは」を冠に置いて作つた長連歌なども、此の系統に屬するものであるから、離合詩に比べては、この建除詩や雜數詩などは、遠歌の賦物に近接的關係を持つものであると言へるであらう。

(二) 上賦・下賦の發生と新しい韻字的意義

賦物の變遷を見ると、後鳥羽院の建保の時代までは、白黒とか魚鳥とかの如く、長句と短句とに於て、それぞれ詠み込むべき物の類が指定せられてゐたのであるが、承久の亂を経て、嘉祿の頃になると、白何何屋・何山河何・何聲片何・何草下何・何皮何絹・何金下何・松何何竹・若何中何・一之何何子・何水何木(以上何れも『明月記』に見える)などといふ賦物となつて來てゐる

るのである。これは後世に、上賦下賦と汎稱せられるものである。

これ等は、如何にして賦物として取扱はれるかといへば、「何水何木」であれば、長句は何水で、短句は何木といふ風に、長句と短句とが、それぞれ一類の賦物を取る點では、白黒とか魚鳥とかいふ以前の賦物と相違は無いのである。ただ、それを詠み込む際に、水とか木とかいふ文字に連なつて熟語になり得る語を、その句中に出すのである。例へば、何水についていへば、その何にあたる語としては

山水 河水 谷水 花水 石水 玉水 流水 雨水 手水 澤水

池水 忘水 沼水 田水 雲水

の如く、數多くを求めることが出来るし、何木についていへば

常木 常盤木 千木 古木 流木 埋木 櫻木 浮木 老木

若木 朽木 黒木 枕木 鹽木

の如くに數多く求めることが出来る。それを、連歌の中に、詠じ入れるのである。後世の作品で實例を示すと、天正十三年十月五日の心前や紹巴等の「賦何路連歌」では、

玉篠の野は風ませの霞かな

時雨をはらふ袖の寒けさ

鹿の音に夕暮ふかき山越て

月に成りゆく谷あひのみち

川霧や水上よりも暗ぬらん

さしくだしぬる船のかずかず

柴人のをくれし友を待つれて

日も落ち方の里の一むら

となつてゐて、野・雨・山・谷・川・船・柴・里等は、その下に「路」といふ文字を添へれば、一つの熟語となり得る文字であるから、「何路」の賦物といふ約束をみたし得るわけである。又、川何・下何したなどの如きものは、川の字や下したの字の下に連ねて、一つの熟語を構成し得る言葉を探めて、それを句中に詠み込めばよいのであつて、

川水、川瀬、川霧、川淀、川船、川岸、川中、

下葉、下帯、下蕨、下思、下心、下繪、下紐、

などの、水・瀬・霧や、葉・帯・蕨等の語を、句の中に詠み入れれば良いのである。

かやうな賦物は、従前の白黒の賦物や魚鳥などの賦物などから、如何にして發展して來たものであらうか。その因由をたづねて見る事は、賦物と韻との關係を側面から明らかにするものの如くに私には考へられる。

聯句の韻は、詩の韻と變りはなくて、一篇を通じて、一韻を用ひるのである。文字は變つてゐても、同韻の字であるといふ點に於て、共通點を持つわけである。又、連歌の賦物では、鳥ならば鳥類、魚ならば魚類の名を詠み入れるのであるから、鳥の名はそれぞれに異つてゐても、等しく鳥類であるといふ點に於て、共通點を持つてゐたのである。その點で、聯句の韻字に相當する性格があつたのである。ところが、何木水何とか、何船何路といふ如き賦物になると、その韻字に當るものは、句の表面からは全く姿を消すことになる。そして、韻字に當るものは全く隠されて、作者同志の心の中にだけ知られてゐることになつたのである。而して、この隠され伏せられてゐて、表面的にあらはれてゐないといふ點では、前の賦物に似通つた性質が保持せられてゐる消息を見るのである。

かく、表面には全くあらはれないで、作者の心の中にだけ働いてゐるところの字（何木ならば木といふ文字、船何ならば船といふ文字）は、見方を變へれば、表面からこそ姿を消してゐるが、

一卷の連歌を貫くところの韻字の役目を負つたものであると言ふことが出来るかと思ふのである。それは、單一の木とか船とかいふ文字であるから、若しこれを表面に出して、何れの句も木とか船とかの文字を詠み込まなければならぬとすると、頗る句意なり句境なりを束縛し、句毎に句境を展開することを妨げる。それ故、これを作者の心の中に於て働くところの韻字の如くに扱ひ、それを以て一卷の統一を計らうとする企ては、考へて見ると、甚だ伶俐な氣の利いた行き方であつたと稱すべきであらう。但し、これを全く秘してしまつては、鑑賞者に、韻字的な感興を起させることが出来ないために、題として、何木だとか何船だとか、その賦物の名稱を、一卷の初に記すこととしたものであると思ふ。聯句の表面にあらはれた韻字的制約を、連歌に於ては、全く裏面に隠した制約と化して、創作の自由さと句境の變化とを保ち得たものが、上賦や下賦の賦物であると考へる時、かやうな行き方を案出した連歌の指導者たちの苦心のほどが、忍ばれるわけである。

かやうな賦物に於ては、その用ひられる度数が多く、又、用ひ易いものが、次第に勢力を得て來るのが自然であつて、その結果として、五ヶ賦・十ヶ賦などといふものが定められるに到つた。

これは、後嵯峨院の寛元の頃かと言はれてゐるが、それよりも後代になつてのことであらうと思ふ。五ヶ賦は、山何・何路・何木・何人・何船の五つを言ひ、十ヶ賦は、朝何・夕何・花何・花之何・唐何・青何・白何・手何・下何・初何の十の賦物をいふ。これ等は、最も多く用ひられたものである。

これに伴つて生じた變化は、賦物が二つ用ひられないで、一つだけが用ひられるに到つた現象である。定家の明月記に見える賦物は、必ず二つが並べ上げられ、それは、長句と短句とに於て、それぞれに用ひ分けられてゐるのであるが、後になると、何人なら何人といふ一つの賦物で以て、長句短句の區別なく、一律に詠まれてゆくのである。前にあげた例（何路の例）などは、何路を以て一卷が貫かれてゐる消息を物語るものである。

賦物は、それ自身として見ると、智的興味を持ち、一種の感興をそそるものであるが、實際に於ては、連歌の文藝的な性格に對しては、格別に寄與する所が無い特殊な約束に過ぎないし、又、百韻全部にわたつて賦物を詠じてゆくといふ事も、中々容易なわざではないのである。従つて、連歌が次第に文藝的に進歩してゆくにつれて、賦物は漸次に省略せられる傾向になり、後になると、表八句（發句から第八句目まで）だけ賦物をとるが、後の句では省略するとか、或は發句脇

句第三までの三句だけに用ひるとかいふ風になり、遂には發句だけが賦物を用ひるといふ風になつて來たのである。これは、連歌が文藝的に發達してゆくためには、當然にかやうな風に進まなくてはならないものであるから、賦物が衰へてゆくことは、連歌の文藝的發展の度合ひを示したものと云ふべきであらうと思ふ。元來が聯句の韻字に當るものを、無理に連歌の上に求めてのものであり、遊戯的奇智的な感興を中心としたものであつたのであるから、これは當然の運命であると思はれるのである。

三 懷紙の形式

以上の他に、連歌が聯句から影響せられたと思はれる條項を考へて見ると、第一に、連歌を記すに用ひる懷紙なども、聯句のそれに倣つたものであらうと推量せられるふしがある。それは、前に掲げた本朝無題詩の中に見える藤原茂明の「賦連句」といふ詩中に、「爐邊折紙、先催興、燈下接襟各動情」といふ句の見える事である。これは、爐邊に打集つて聯句を作る連中が、それを

記すべき懷紙を折つて用意してゐる有様を描いたものである。連歌懷紙は、後世は四枚懷紙と一定し、表八句裏十四句、二枚・三枚は表裏各々十四句、第四枚は表十四句裏八句、といふ風に記す定めとなり、その懷紙を規準として種々の規則も定められてゐるが、本式連歌は表十句の定めであつたといふ。然るに、聯句の懷紙も、王澤不渴抄註によれば、四枚懷紙であり、異制庭訓往来によれば「面則可書三十句」とあつて、本式目連歌の書きざまに似てゐる。これなども、連歌の懷紙が聯句の懷紙の記しざまに倣つたものではあるまいか、と思ふのである。第二に連歌では、後世、月と花とが、一卷の中で重んぜられてゐる。月花の數とか定座などといふ事は、後世の連歌書には特に記され、その考へ方は俳諧にまでも流れてゐるのである。然るに、前にのべた藤原茂明の「賦連句」の詩中には、「百韻滿來吟月、曉、五言綴得賦花程」といふ句が見られる。この「吟月」といふのは、實際に曉月に對して句を吟じ上げる意の如くにも解せられて、聯句中に月を詠ずるといふ意ではあるまいとも取られるが、次の「賦花程」といふ語は、どうしても、聯句の中に於て花の句を賦するといふ意に解しなくては、意味が通らないのである。それと對句的に作られてゐるといふ立場から言へば、「吟月」も、月を賦する意と取ることが可能となる。その點にはまだ幾分の疑問があるが、聯句に於ても、月や花を吟ずる句といふものがあつて、それ

が相當に重んぜられて居り、それが連歌の方面にも流れて行つたものではあるまいかといふ臆測が生じて來るのである。第三には、連歌の第一句を發句といひ、第二句を入韻などと呼ぶ名稱も、漢詩の方面の名稱が借用されたものであるまいかと、今までは考へられて來てゐたのである。

四 無心連歌より有心連歌へ

連歌が長連歌となり、百句又は五十句などと連ねられる時、それ等が悉く機智的なをかしさを以て連ねられるといふ事は、先づ有り得ない。機智の滑稽は、短い詩形のやりとりの間に於ては成功するが、長い連歌をこれを以て貫くといふ事は、甚だ無理であり困難でもある。この事は、山崎宗鑑の編した犬筑波集の作品と、荒木田守武の守武千句とを比較して見れば、何人といへども承認せざるを得ない所である。従つて、長連歌が發達して來たといふことは、それは連歌が滑稽や奇智の面白さと訣別しなければならなくなつた、といふ事である。賦物が行はれたのは、一面には聯句の韻に代るものをついふやうな要求からでもあつたが、他面に於ては、その賦物によ

つて、機智的な面白さが幾分なりとも、長連歌の中に生き残ることに對しての願ひに出でたものと言ふことが出来るかと思ふ。少くとも、建保の頃の賦物は、有心連歌の中に、いささかの無心的要素を留める點に、その主要な感興があつたものと思ふのである。

乙女子がかづらき山も春かけて

かすめどいまだ峯の白雪」

家隆 (白黒賦物)

つくばねやたきつ岩ねを行水に

せかれぬ戀よいかにしのばん」

定家 (三字中略四字上下略)

前の家隆の作は葛城山の早春をうたひ得た有心體の連歌であり、後の定家の作は、戀の情を陽成院の御歌を下に持つて作つた有心の連歌であつて、意味の連なりに於ては、聊かの滑稽も奇智も見られない。しかし、それに、乙女のかづら(黒)・白雪(白)が賦物になつてゐることを思ふと、智的遊戯の面白さが随伴して居り、定家の作の前句にはたづ(たきつの中略)いね(いはねの中略)が、附句には鱧(せかれぬの上下略)が賦物として働いてゐる面白さが見られる。

後鳥羽院の建永元年八月には、有心無心の連歌比べが行はれ始めてゐる。明月記の同月十日の

條には

日來左中辨宣綱等、人々多同心。和歌所輩を、狂連歌ニ可ニ籠伏一由結構。下官雅經等以ニ尋常
歌詞ニ相挑之。此事及ニ三度許、事達ニ寂聞。石斗拔彼方張本等、長房卿・宣綱・清範・重輔、

以之稱無心衆、態出ニ狂句。中納言・雅經・具親、候ニ御方、以之稱有心。乘燭以後還御
とあり、翌十一日及び十八日には、有心無心の競争が行はれ、二回ともに無心方が敗北した事が
記されてゐる。越えて建暦二年の十二月にも、有心無心の連歌合せが盛大に行はれた記事が見ら
れる。無心連歌は狂連歌とも狂句とも言はれてゐる如く、滑稽諧謔を中心とした連歌である。従
つて、短連歌の直系を引いた連歌であるが、それを以て無心（無心所着の意）といひ、和歌的な
連歌を有心と稱してゐるところに、當時の連歌の趨勢が、如何なる方角に向つて進んで居たかが
うかがはれると思ふ。即ち、和歌的發想の優雅な連歌といふものが、連歌界の向ふ所であり、過
去の滑稽機智のものは、漸次にその影を失ひつつある姿が見られるのである。明月記によつて調
べると、無心連歌の記事は、建保三年以後には見られない。これは、建保の末頃に到つては、連
歌は大體に有心的なものが中心となつて、無心連歌は次第に驅逐せられた事を示すものであると
思はれる。

五 連歌式目の發生

有心連歌が中心となつたといふことは、それが文藝的に面白く感興深く連ねられるやうに進展したといふことである。一卷に様々の變化の妙と、又、秩序の美とが、十分に考へめぐらされるに到つたことである。それは、當時のすぐれた堂上歌人の歌才を以てするならば、さして困難では無かつたと思はれる。従つて、最初の頃は、格別な規則めいた事を設けなくても、作者の心得一つで十分に變化の妙をつくし、又、統一もとれてゐたことと思はれる。しかし、多數の者が一座して、それぞれが各自の意見で附けてゆくのであるから、そこに何かの大綱的な規準を立てておく方が、更に作り易く又便利でもある事から、後世の式目の源ともいふべきものが生じて來たのである。八雲御抄卷一の連歌の部に示された十五ヶ條ばかりの心得條々は、かやうな立場のものである。

御抄の中では、連歌の席に臨む心得として「近年こそ繁多事なれば、付_レ之有_二少々故實又禁制事、及_二末代_一尤可_レ存事也」として、故實や禁制があげられてゐるが、發句に關する事二ヶ條、賦物に關する事六ヶ條、初心者_ノ斟酌すべき事三ヶ條ほどあつて、後世の去嫌ひに關する事とし

ては

三句が中は病をさるべし。四句五句が内にも、同事は用意すべし。されどそれまでは云べきにあらず。すべて一座の連歌に、いたく同事の多かるは悪事也。

さきの上句に、春くればなど云ひはてたるに、下句ばかりを隔てて、何すればなど、は文字ある體の事は、尤すべからず。あしくきこゆる也。

是は、下句せむをり思ふべし。上句に山櫻などしはてたらんに、花のながしと付る事はわろき事也。又、つけむ人の、同じさまに案ずるやうが、すべてわるきなり。

かまへて連歌をば、あらぬやうに引きなし引きなし付くるなり。春にて久しく、秋にて久しきは、連歌せぬものの集りたる折の事なり。

といふ四ヶ條ほどに過ぎない。まことに簡單なものである。先づ、第一の、「三句が中は病を去るべし。四句五句が内にも同事は用意すべし」とあるのは、歌道の方面で唱へられてゐる歌病を、連歌の方にも適用したものと思はれるが、四病八病七病等を悉く避けようといふのではないと思ふ。『八雲御抄』の歌病の條には、避けるべきもの、苦しからぬもの、差支なきものといふ風に、歌病について論ぜられてゐる。その中、鎌倉時代まで避けるべきものとせられてゐるのは、同心

病・平頭病・聲韻病などに過ぎない。同心病は詩の方で叢聚病そうしゆともいひ、孫姬式には、「一篇之内、再用同詞、或謂之和聚聯」とある。同じ語が二度あらはれるので、同事の病ともいふ。これは「四句五句が中にも同事は用意（警戒）すべし」とある故、三句の中には勿論さけなければならぬ。弘安新式・建治新式・應安新式等、何れも同字（同事も）は五句去りとなつてゐる。次に、平頭病は、上句の第一字と下句の第一字が同字である場合をいふが、定家は『毎月抄』では、平頭は苦しからずとのべてゐる。聲韻病は上句の末尾と下句の末尾とが同じ字であることで、定家も聲韻は避けなければならぬとのべてゐる。連歌ではこの病は、殊に禁制で、同様な語尾が接近した句にあらはれては、誠に見苦しいのである。これは、新式（弘安・建治・應安）には、「韻字の事」の條にその禁が見える。僻連抄には

韻字。物の名と詞の字と、不可嫌之。物の名と物の名と、又可嫌之。可嫌打越の詞、
つつ・かな・らん・して。他准之。如此之類、可嫌之
と見えてゐるのである。

第二の「さきの上句に、春くればなど云ひ果てたるに、下句ばかりを隔てて、何すればなど、は文字ある體の事は、尤すべからず」とあるのは、前の「韻字」の戒めに當るもので、同様のて

にをはが、打越にあらはれる事を戒められたものである。

第三の、下の句をする際の心得として「上句に山櫻などはてたらんに、花のながしと付ることは悪きなり」といふ條は、前句の山櫻と附句の花とが差し合ふのである。山櫻といふのに花といつては、その聯想があまりに密接で、「句毎に、あらぬやうにと、引きなし付くる也」といふ連歌本來の目的に副はなくなる故である。新式には、「花のある面には櫻を嫌ふ」となつてゐる。

第四の「かまへて連歌をば、あらぬやうに引きなし引きなし付くる也。春にて久し、秋にて久しきは、連歌せぬものの集りたる折の事なり」は、連歌の附け方の根本を説いたもので、附句が、打越と前句との構成してゐる世界から、ぐつと離れた境地へ轉すべき事を説いたものである。新式が、次の、「春にて云々」は、句數の連續の事に關する式目の源流と見るべきものである。新式に於ては、春秋は三句以上五句まで、夏冬は一句から三句まで、といふ風に定められてゐる。但し、此の條では、まだ季句の句去りに關しては語られてゐないのである。

かやうな單純な心得書きから、所謂本式新式等のあらはれる文永弘安の頃までに、連歌は如何なる風に、式目が増加して行つたか。わづかに應安新式を見、又、僻連抄の式目等、南北朝時代

のものを見ることの出来るに過ぎない現在では、これを明らかにすることは容易ではない。ただ幸なことに、我々はこの文永の頃に行はれてゐた聯句の式目ともいふべきものを見ることが出来る。それは『王澤不渴抄』に、良季が聯句の事を述べてゐる中に見えるものであつて、頗る連歌の式目に類似したものである。この事實は從來殆ど紹介せられてゐないものであるから、詳しく詳細に検討を加へたいと思ふ。その結果として、我々は鎌倉時代中期の聯句が、如何に日本化され又連歌化されたものとなつて居たかをも、明らかにし得るであらう。

第五章 聯句に及ぼした連歌の影響

一 王澤不渴抄に見える鎌倉中期の聯句

『王澤不渴抄』は、池之坊不斷光院の僧良季が、後宇多院の建治年中に撰したもので、詩文に係ある事柄をのべた書である。その中に、聯句に關して、詳細に述べてゐるが、それによつて、從來は全く不明であつた當時の聯句の状態や作品を知る事が出来る。

客云、連句者其様如何。予云、避^ケ聲^ヲ居^{ユル}韻^ヲ次第、准^{ジテ}詩^ニ可^ル知。大旨五言也。二四不同二六對。又、七言連句尤稀也。所謂、「朝候日高冠額拔、夜行砂重沓聲忽」此連句云々。以^レ此雖^レ爲^ス七言例、近來七言連句无^ク之、皆以五言也。

以上は、聯句に關して、(一)四聲平仄や押韻は詩に準ずる。(二)七言の聯句も稀にはあるが、(朝

候日高云々の聯句は、和漢朗詠集に出づるものである）、五言聯句が普通であり、當時は七言は絶えてゐるといふ實狀をのべてゐる。

執筆言_ニ發句_一、多分例也。入韻_ニ亭主或座中高位言_レ之。入韻者、發句_下半句也。因_レ茲略頌曰、
執筆發句亭主入韻云々。

此條では、聯句の發句は執筆の役に當つたものが出すのが流例となつて居ること。入韻（連歌で言へば脇句に當る）は、亭主か又はその一座の尊貴な人が附ける例であること。従つて、俗に「執筆發句亭主入韻」と言ひならはされてゐること。「入韻は發句の下の半句也」といふのは、最初の二句（上句と下句）を以て、發句と考へる故、第二句は發句の下の半分の一句をいふとの意である。

尋常會、大旨用_ニ巡句_一。云_ニ巡句_一者、一人不用_ニ半句_一。一句三句等是也。必用_ニ重句_一。一句四句是也。

これは、普通の會では、大ていは、一人が一回に二句又は四句等、偶數句を作るのが常で、一句とか三句とかの奇數句は作らないものだといふのである。二句一聯一韻のものを作るのが常型となつてゐた事を知る。

於_二花月等_一名字_二者_一、一折_レ面許_二三字_一云々。於_二詞字_一者、不_レ嫌_レ之。

これは、花や月や霜や雪等、體のある字は、懷紙一折の面に三字までは同字の出る事が許されるが、それ以上はいけない。それに比べて、詞の字（用言の如きもの）は、何回出ても差支ない、といふのである。

發句不_レ用_レ對如_レ詩。春會言_二春景_一、夏會言_二夏景_一。若_レ又、言_二當座事_一。

これは、發句には對句的な表現をしないといふことで、詩の第一句と第二句との關係に似てゐるといふのである。即ち、執筆の句と亭主の入韻が、對句とならないやうにする意である。それは、後にあげる實例によつて明かになるであらう。又、發句は、春の季節の會であれば、春の景をのべるといふ風に、それぞれの當季を詠するのが常式である。若し、當季の景でなければ、その當座の事柄を詠ぜよ、といふのである。

客云、假令、發句、_ハ如何、就_二四季雜等_一、_ナ聞_二一兩句_一、_ヲ子云爾也。

春 大蕨萬春始 携文樂未_ナ央_ナ

二月芳菲候 有_レ花又有_レ鶯

三月盡今夜 紫藤下悵望

夏 孟夏上旬候

此時待郭公

六月祓今夜

每人祝萬年

秋 秋來三四日

想像一星情

秋日以文會

如何添岳情

冬 當重陽翌日

翫菊是如珠

雪裏閑遊好

任地梁園冬

雜 燈下逢文友

閑談動故情

祝言 萬悅好文世

佳期與古同

連句發句、大體如此。凡何不_レ稽古_レ難_レ成。連句殊重_レ座入_レ功可_レ翫_レ之。不然者、易_レ瘳

忌事也云々。

以上は、聯句の發句の例である。第一句は執筆、第二句は亭主の入韻であるが、その二句を合して、發句と見立ててゐる消息がわかる。そして、實例に於ても明かな如く、二句は決して對句とはなつてゐないのである。

客云、發句躰存知畢。中間句又聞一兩句。予云、

春

花、父、母、爲、雨

雁、兄、弟、點、雲

春、日、詒、春、日

夜、行、遇、夜、行

霞、光、殷、自、火

露、色、越、于、珠

夏

魚、戲、蓮、浮、葉

鷓、鳴、植、立、枝

衣、是、生、衣、衣

扇、加、團、扇、扇

所、動、同、心、扇

攸、歸、如、意、輪

秋

生、野、末、糸、薄

御、山、與、玉、椿

代、燭、草、螢、影

薰、衣、蘭、麝、匂

大、井、川、紅、葉

小、倉、山、翠、松

冬

時、々、時、雨、雨

夜、々、夜、光、光

後、澗、松、與、柏

先、敗、蕪、將、蘭

廣、瀨、龍、田、祭

飛、瀧、熊、野、盟

雜

千、六、百、年、鶴

二、三、兩、月、鸞

東、三、條、地、靜

北、陸、道、途、遙

第五章

聯句に及ぼした連歌の影響

一越調調子

八齋戒戒師

水清清水

泉冷冷泉泉

八角圓堂佛

九重寶塔尊

以上は、發句から揚句に到る中間の句について、その實例を示したものである。その特色は、何れも對句をなして句が作られてゐる點である。例へば「花父母」に對して「雁兄弟」、「爲雨」に對して「點雲」の如き、「魚戲」に對して「鴈鳴」、「蓮浮葉」に對して「植立枝」の如き、それぞれに、嚴密な對を成してゐる。この對句が、特別な技巧によつて、殊更に機智を弄して作られた例は、「春日詣春日」の如きに對して「夜行遇夜行」とつて、「衣是生衣衣」に對して「扇加團扇扇」とつて、「時々時雨雨」に對して、「夜々夜光光」と附ける如きものである。對句の構成が全く均齊的に作られ、しかも非常に困難な前句に對してあざやかに附句が附けられてゐる點は、誠に感興深きものがある。言語文學の遊戲も此處まで來れば、又それだけで人を樂しませる力を持つものである。第二の特色は、これ等の聯句は、漢土の詩句や聯句の句々に比べて、甚しく和臭を帯びたものであり、且つ奇智滑稽的な創作意圖が働いて居ることである。その點では、江談抄に引用せられてゐる平安時代の聯句の持つて居た特色が、殆んどそのまま此處にも流れて

來てゐることを感じる。

客云、聞ニ中間句一、既得ニ其意一。有下可ニ存知一事上乎。予云、凡連句、以ニ對鹿ニ爲ニ下手一。詩自雖不レ對、大方其句聞好評レ之。連句毎レ字可レ對レ之。縦文字讀雖レ違、以レ對爲レ佳。假令

西有ニ彌陀佛一 南無觀世音

此句、上句讀レ點、下句直讀レ之。雖然、西南・有無、寄來對也。仍爲レ佳。又不レ存隨レ訓

異聲字一、有レ難ニ付句一。

唐衣朝夕衣

此句、不レ存ニ異訓字一、不レ可レ付。所以者、何避レ聲事二四不同。對字事、重點對ニ重點一、同字

對ニ同字一。上句既第二第五字、同也。下句又可レ然。衣字訓レ衣平聲、訓レ衣他聲。仍下句可レ

置ニ如レ此字一。若先仙韻

夏扇古今扇

此扇字、訓レ扇他聲、訓レ扇平聲也。仍此句付也。唐與レ夏對レ之、夏字以ニ夏國義一對レ之。此

事可レ存歟。

此の條では、聯句に於ては、對句が非常に重要視せられるものである事を説いてゐる。普通の詩

であれば、對句にならなくても、その聞きが良ければ許される事もあるが、聯句では、字毎に前句と對せしめることが要求せられるといふのである。例としてあげられた句は「西有彌陀佛」に對して、「南無觀世音」である。一方は西方淨土に阿彌陀佛が居ますといふ意であるに對して、對句の方は、觀音の名號を唱へる語であるから、「南方に觀世音は無い」といふ意ではない。従つて、意味の上からは全然に對句をなすべきものではないが、西と南と、有と無と、彌陀佛と觀世音と、それぞれ字對をなしてゐるから、聯句の上では、好き對句となつてゐるといふのである。全く奇智的な産物であるが、その面白さを聯句では喜んでゐるのである。次の「唐衣朝夕衣」に於ては、衣を名詞とすれば平聲で、「着る」と動詞にすれば他聲となる。それで、附句も、第二字と第五字が同じ文字であつて、且つそれが名詞と動詞とによつて、四聲が異なるところのものを用以て附句をつくらねば、字對を果すことは出来ないといふことになる。そこで、「夏扇古今扇」といふ附句が生れたのである。第二字第五字が同字で、異なる四聲を持ち、唐衣と夏扇、朝夕と古今、衣と扇と、それぞれ對して居る。更に、「夏」は漢土の古代の國名にある故に、「唐」に對して、對句的な働きをも持つといふのである。かやうに、聯句に於ては、對句を重んじ、字對を要求する故に、「前句に同字が用ひられて居れば、附句も同字を用ひ、前句に重點（處々、方々の如

き)があれば、附句も重點を以て應ずる」といふことが、その原則となるのである。
 客云、已辨^ニ其意^ハ。欲^ク聞^ク連句之體^ヲ矣。予云、然也。

連句

仲呂下句候	執	筆	雨中綴一章 ^ヲ	亭
郭公聲處々	實		杜若色方々	廣
雲聳石門洞	實		月明履道坊	行
卯花爲夏雪 ^ニ	行		南菊帶秋霜 ^ニ	實
手動合歡扇	行		口羞來樂觴	廣
可舖青篋簾	亭		應峙綠蓼床。	

風情如此。輪廻等同詞同體、以^テ上句^ヲ糺^メ之也。

此の條では、聯句一篇の風體を、實例をあげて説いてゐる。韻は「章」に於て、平聲の陽韻と定まり、方・坊・霜・觴・床と同韻を以て進められてゐることは、唐聯句と異なる處はない。「仲呂(四月)下句候」を執筆が作り、「雨中綴一章」と亭主が入韻の句を作るのも約束通りである。そして、この二句が、大體發句に當るわけであつて、そこには對句的表現がさけられてゐる。次で、

「郭公、聲處々」といふ句で、四月下旬の景物を出し、次の作者は、それに對せしめて、「杜若、色方方」と作つてゐる。郭公と杜若、聲と色、處々方々と、字對を以て構成せられてゐる。次に「雲聳石門洞」と、句境を轉じて唐土の事をのべたに對し、字對を守つて、「月明履道坊」と、同じく唐土の景を以て應じてゐる（石門洞・履道坊は、共に廬山にあり、白樂天の居所として知られてゐる）。次に「卯花爲夏雪」と、卯の花の白く咲いたのを夏の雪と見たてた句に對して、「南菊帶秋霜」と、夏菊の花色を霜に見立てた句を作り、卯花と南菊（卯は漢土では方角にも用ひる字である故、南に對し得るわけである）夏雪と秋霜・爲と帶と、字對を用ひてゐる。次に「手動合歡扇」に對する「口羞來樂觴」も、手と口・動と羞・合歡扇と來樂觴と、各々字對をなして、或は扇を動かし或は盃をすすめる場面を描いてゐる（合歡は扇の事で、班女詩に、裁爲合歡とあるに基づく。來樂は盃の異名である）。最後に、「可鋪青篋簾」といふ亭主の句に對して、「可峙綠蓼床」と對句にしてゐるが、可鋪と可峙と、青篋簾（青色のたかむしろ）と綠蓼床（綠の床）が、何れも字對をなしてゐる。以上の實例をあげて、聯句の風情はかくの如きものであると言ひ、輪廻のこと、同詞の事、同躰の事については、上の句を以てこれを糺してゆくのであると述べてゐる。

又、近來連句連歌、優客好人翫之。無別子細。連句付連歌、連歌付連句。韻字賦物等如常。付事必不定句數、隨出來矣。

此の條は、後世の和漢や漢和が、既に文永の頃から行はれて居たといふ事實を告げるものとして、注目すべき記事であると思ふ。それには「近來」とある故に、建治を去ることあまり遠くない頃、即ち文永の頃から流行したものである事が知られる。それにはまだ十分に式目等は整つて居なかつたのであらうが、韻字の事や賦物の事などは、常の如しとある故、連歌は連歌の規則に、聯句は聯句の規則に、それぞれに従つて作り進めたものであるやうである。又、句數の連續に於ては、必ずしも定つた規則はなくて、聯句でも連歌でも、出来るに従つて附け進めたものであることが知られる。この點は、和漢でも漢和でも、後世まで大體この行き方で行はれてゐるのである。

聯句と連歌とが、並び行はれた事は、既に平安時代からあつたのであるが、それは、聯句は聯句を作る者同志で、連歌は連歌をする者同志といふ風に、それぞれに別々に作つてゐたのであつた。即ち場所や時は同一の時所で行はれても、兩者が入り混つて作るものではなかつたのである。然るに、鎌倉時代に入り、長連歌が流行し、それとやらんで聯句を弄ぶ者も多くなつて來て、

ここに両者が一座になつて、聯句と連歌とを交互に附け進めてゆくといふ新しい文藝形式が生れて來たのである。それは全く社交遊戯的な立場からの所産であつたと思はれるが、かやうな文藝形式が生れたとなると、連歌をする者も聯句に關する一通りの常識をそなへ、作品を鑑賞するだけの素養をつまねばならなくなり、聯句を作つてゐるものも、連歌に關しての式目の知識や作品についての常識を持つてゐなくてはならなくなつて來たのである。それが無ければ、一座して附け進める感興は得らるべくもないからである。

二 聯句の連歌化的傾向

次に、かやうな状態に於て、如何やうな變化が連歌や聯句の上に生じて來るか、と言へば、連歌の行き方に、漸次に聯句が引かれて行き、聯句の性格は益々和臭をおびて來て、句數の連續に於ても、四季の句數にそれぞれ連歌的な約束が出來たり、發句は當季を詠むべしとか、あげ句は祝言的なものであるべきだとか、戀の句は如何などといふ風に、次第に連歌の式目に接近した規

準が發生して來たと思はれる。それと共に、同事を何句去りにするとか、名ある字（體言）と詞の字（用言的なもの）との使ひ方の度數を如何にするとかの事も、本來は聯句の上の約束ながら、やはり連歌のそれに影響せられて來たであらうと思ふのである。これと同時に、連歌が聯句に影響せられることも有り得るわけであるが、その方面は、長連歌の發達途上で、相當に影響を既に受けてゐるのであるから、和漢や漢和が出來たからといつて、格別に大きい變化は受けなかつたであらうと考へられる。それで、結果より見れば、聯句が次第々々に漢土の聯句から離れて、日本式な和臭の多い聯句と變じたといふ結果が生れて來たと思ふのである。

この『王澤不渴抄』を見ても、その聯句が、如何に和臭をおびたものであるか、又、短連歌的機智を中心とするものであるかは、誰人でも認めざるを得ない所であらう。況んや、發句は執筆が作り、脇句は亭主が作るとか、月花等の名ある字は一折に三回までは許すがそれ以上は許さないとか、詞の字には嫌ひはなくて何回でもよろしいとか、發句は當季の景とか當座の事を詠ずべきだとか、輪廻や同詞や同體の制禁が設けられてゐるとかは、全然に漢土の聯句には無いものであつて、全く日本聯句に於て發生したものであることを考へれば、聯句が連歌の影響を如何に多く受けたものであるかは、極めて明瞭であると思ふ。

この『王澤不渴抄』は、連歌に於て、本式が作られたと傳へられてゐる文永の頃の聯句の約束を傳へてゐる。そこから考へると、この聯句の約束を通して、本式などが制定せられた頃の、連歌の式目の状態を想像することも十分に可能であると思ふのである。尙、この『王澤不渴抄』には、その意を解説し補説した『王澤抄』と稱するものがある。作られた年次については明らかでないが、抄に見えない説明が補はれてゐて、参考になるものと思はれるから、次にその所見をあげて置くこととする。

連句ハ執筆ガ發句ヲ致セバ、脇ノ句ハ亭主也。引次々々一人ニテ一句ヅ、スル也。依テ連句ト云也。百韻スル也。又ハ卅六句モスル也。

連句ハ、發句ニ韻ノ字ヲバ不置也。脇ノ句ノ終ニ韻ヲ置也。如シ詩也。

以上は發句脇句の解説であるが、「引次々々一句ヅツスル也」といふところの「一句」は、五言一句なのか、又は二句一韻を一句と稱したのか、少し疑問がある。『王澤不渴抄』には、巡句（重句）を用ひて、一人の作は偶數句を作るものとし、「半句」（奇數句）は用ひないのが通則とせられてゐる。それから見ると、「一句」とは、上下二句一韻のものをさしたと考へねばならない。ただ、發句だけは例外であつて、執筆が半句作り亭主が入韻の半句を作るものと考へられるので

ある。しかし、『不鴻抄』の最後にあげられてゐる聯句の實例を見ると、その對句は、一人の作でなくて、二人で五言對句を作つてゐる如く感じられる。そこに疑問があるが、當時の聯句が全く傳へられてゐない現在では、やはり疑問のままにとどめて置くより方法はない。尙又、後世に、歌仙式と唱へられた卅六句形式が、聯句の形式から發生したものである事も、注目すべき事である。

連句ニ連韻ト云沙汰一向无キ也。大韻病、繁説病、此等自^{リキ}詩深^キク藪也。

繁説病トハ、韻ノ字ノ外ナル字ノ同事ノ夏也。

大韻病トハ、韻ノ字ノ韻デスルガ大韻病也。字モ韻ノ字ト同字ナレバ、字モ同ジ韻モ元ヨリ同ナレバ、大韻デモアリ繁説デモアリ、大ニ藪也。

これは、聯句に於て嫌ふ所の大韻・繁説の病をのべたものである。

百韻ヲ書様、紙四枚ニ書也。一折トハ一枚也。花月等ノ體アル字ヲバ、一面ニ三字迄ハ同字ヲ許ス也。詞ノ字ヲバ何字ヲモ置也。不^レ嫌^レ之也。體ノアル字ヲバ、三字ヲ過テハ不^レ置也。同字は五句去リ也。六句目ニハ同字不^レ苦敷^レ也。同字モ一句ノ内デハスル也。句ヲ隔テ五句ノ中ニハ不^レ致也。

同趣、四句去ル也、四句ノ内デ義ノ趣ノ同ナルヲバ不レ致也。

百韻ノ内デ、終ノ二句ハ祝言ヲスル也。連句ノ定事也。表十句ノ間ハ、當季々々ノ景ヲスル也。

ここでは、懷紙四枚で書く事・體のある字と詞の字との使用度数や句去りの事・同字に關しては五句を去ること・一句の中に同字を重ね用ひることは差支ない事・同じ意趣の句は四句去りの事・最後の二句は祝言の事・表十句の間は當季の景を詠ずること、等があげられてゐるが、これ等は漢土の聯句には無くて、連歌の影響によつて發生したものであることは明瞭である。

一ノ紙ノ面ハ十二句、裏ニハ十六句書也。都合廿八句也。二ノ紙ニハ、表ニモ裏ニモ十六句ヅ、書也。都合卅二句也。三ノ紙、是モ表裏ニ卅二句、二ノ紙ク如也。四ノ紙ハ面ニハ八句也。裏ニハ惣ノ人數ノ名ヲ書キ句數ヲ書也。紙四枚ニ爲ニ合百韻也。

これは懷紙に認める句數を記したものである。但し、これ等の形式は、時代と共に變更があつたと思はれ、異制庭訓往來には、聯句に關して

夫聯句、集衆口而綴詩句者也。以文會友、以友輔仁之謂也。其法式者、面則可書、十句一也。先唱句者、可詠當氣之景。同字者可去七句。但於上下者、一懷紙中同可

去之。同趣者可去四句。終兩句者可爲祝言。可被存。知此旨候也。

とある。表は十句書くことになつて居り、同字は七句去となつてゐるのである。又、寛文十一年に開版された『聯句初心抄』には、「懷紙書様ノ事」の條に、表十句、裏二十句、二枚目は表裏ともに廿句づつ、三枚目は表に廿句裏に十句書き、都合百句とある。これは三枚懷紙となつてゐるのである。連歌の方は變動が少くて、本式以來四枚懷紙であり、本式と新式の相違は本式が表十句、名残裏六句とあるに比べて、新式が、表も名残裏も八句となつてゐるだけの相違である。ただ、圖書寮所藏の『連歌初學抄』には、善阿の定めた式目には、三枚懷紙を用ひ、一の表十句、裏廿句、二の折が四十句、三の折三十句となつて居た由が記されてゐる。これは、『聯句初心抄』の書きざまに、そのままである點、注意すべきものであると思ふ。

輪廻等トハ、近輪廻遠輪廻ノ二ツ也。二三ノ句ノ間デ、前ノ義理ノ如ク作ヲ近輪廻ト云。一紙二紙隔テテ、以前ノ義理ノ如クスルヲ遠輪廻ト云也。二ツトモ義理ノ同ヲ深ク蓄也。

これは、聯句に於ても、連歌に於て輪廻を嫌ふ如く、輪廻を避けなければならぬ事をのべたものであるが、この輪廻といふ名稱などは、詩病には無い所であり、全く連歌といふ文藝形式から生じた嫌ひ物の名稱である。即ち、連歌に於ては

輪廻 薰物といふ句にこがると付けて、又紅葉を付くべからず、船にては付くべし。こがるといふ字、かはる故也。煙といふ句に里とつきて、又柴・燒・薪の類を付べからず、他准之。(僻連抄)

と、その意を説いてゐる。この僻連抄は、大體弘安新式に依つたものであるが、建治新式に依つた應安新式にも同様であるから、本式にもかやうなものが存在したことは考へられる。而して、輪廻といふ名は佛教から來た語であるが、前句を中心として、打越の句と附句とが、同様のものであるために、そこに句境の進展がなく、ぐるぐる廻りをする如き弊に陥ることに名附けたものである。即ち、連歌に於いてでなければ、かやうな嫌ひ物は生じないのである。遠輪廻は、

遠輪廻 花といふ句に山の霞と付て、又これを不可_レ付。雖_レ隔_二數句_一、一座に可_レ嫌_二之_一。(僻連抄)

とある。これは、同様な附け方の句が、折を隔ててあらはれることに對しての制禁である。「一紙二紙隔テ、以前ノ義理ノ如クスル」といふ意も、その意である。

『八雲御抄』の今日傳へられてゐるものは、承久以後に成り、大體文暦の頃に成立したものであ

らうと考へられてゐる。文暦から文永の中頃まで三十五六年の間に、八雲御抄に記されたやうな簡単な連歌の制禁の條項が、本式目のやうな詳しいものにまで發展したのである。(本式目は今日傳へられてゐないが、猪苗代兼載が、本式目と應安の新式との相違する點をあげたものは、傳へられてゐる)。これは、その間に、後嵯峨院の院政時代といふ連歌興隆の時代があり、堂上歌人や女房などのすぐれた連歌者が輩出し、地下の連歌も次第に流行の勢を増して來たといふ事實のあつた事を考へると、式目や禁制などが、次第に詳しくなつて發展して來た事も、十分に首肯出来ると思ふ。後鳥羽院の建保の時代の連歌と、御嵯峨院の建長から文永に到る頃の連歌とは、大分と性格が變つて來、後鳥羽院の御時の連歌は、賦物を中心とした長連歌で、その中から次第に純正な文藝にならうとする傾向の時代と見れば、後嵯峨院の時代のそれは、賦物的な興味を漸次に離れて、一卷全體のまとまりに進み、句數の連續(例へば四季句は何句つゞけるといふ如き)の工合や、去嫌ひなどを考へ、更に用ひる詞の頻出の度數に對する制限(一座何句のもの)などが考へられて來た時代と考へて良いであらう。さうした際の式目は、最初の間は、それぞれ指導者によつて適宜に定められてゐたと考へられる。例へば、爲家であるとか爲氏であるとか、さうした歌界の重だつた人々がその任に當つたのであらうが、各々のグループがそれぞれに異つた式

目であつては、相互が相集まつて一座して連歌をする事が出来なくなるために、次第に大同につく傾きが生じて、本式目の如きものが生れて來たと思ふのである。

かやうな時代に、聯句を弄ぶ者と連歌を弄ぶ者が相寄つて、戯れに句々を連ね合ふといふことが試みられ、それが又、新しい形式のものであるために流行して、和漢連句や漢和の連句などが發生して來たと考へられるのである。従つて、聯句そのものも著しく連歌の式目の影響を受けるやうに傾いて來たといふ事は、争ひ難い事實であると思はれるのである。

第六章 連歌と聯句との結合としての和漢連句

一 和漢連句

和漢連句（又は單に和漢ともいふ）が、行はれはじめたのは、從來の説では、鎌倉時代の末頃であらうと言はれてゐた。それは、『榮玖波集』に見える和漢連句は、元應元年のものが最も古く、それ以前のもが見られぬといふことが、その考への據り所となつたものと思はれる。しかし、我々は、建治年中に記された『王澤不渴抄』の記事によつて、既に文永の頃には、和句と漢句を交へて作る和漢の連句が行はれはじめて居た事を知り得たのである。勿論その頃には、まだ連歌の式目さへも、まぢまちな時代であるから、和漢連句に式目などが出来よう筈はない。ただ、漢詩や聯句を作る者と、連歌を弄ぶ者とが、遊戯的に、社交的にかやうな連句を試みてゐるに過

ぎなかつたと思はれる。

建治から四十年を経て、元應の頃となると、和漢の連句は、よほど各方面に廣がり、多くの人がこれを連ねるやうになつてゐたと思はれる。勿論それは、學問的な教養の高い貴族階級や、五山の僧侶などの交りに於てだけで、地下の連歌人などは、この方面に交はることは、彼等の漢學的教養から言つて、無理であつたらうと思はれる。が、とにかく、元應元年に、後宇多院が、六條内大臣の禪林寺の家に御幸遊ばされた時には、そこで、和漢の聯句が行はれ

紫禁貴神璽

二たび世を助けつるかな

御宇多院御製

孤身虚夢魂

古郷にかへる心は涙にて

花園院御製

春秋運契長

幾たびか花紅葉にもなれぬらん

後醍醐院御製

といふ御製の句もあり、

放鶴知臣量

玉章を雁につけたるたぐひとや

六條内大臣

竹戸風開閉

友なふものはたゞ月のかげ

前大納言尊氏

塵根萬事非^{ナリ}

捨てざりし世を思ふこそ悔しけれ

大宰權帥俊實

などといふ句が、『菟玖波集』に收載せられてゐる。これは菟玖波集撰定の頃には、此の當時の懷紙がまだ存して居り、それから抜き出されたものであらうが、至尊の行幸を迎へて行はれたといふ事から考へて、當時には、和漢の連句といふものは、連歌や聯句と匹敵するほどのものにまで考へられて居たと思はれるのである。

これ等の連句を見ると、前の漢句の心持をよく味はつて、それに對應するやうに附句が附けられてゐる事が知られる。例へば「宮中に於て神靈が尊崇せられてゐる」といふ句に對して、「二度も國難を救はせ給うた」と附け、「獨り身で中々夢も結ばれない」といふ句に對して「心は涙ながらに故郷に馳せてゐる」と、旅情を以て連ね、「春秋の運行は永しなへである」といふ句に對して、「花や紅葉になれ親しんだのも、もう何度であらうか」と對を取つて附け、「鶴鳥を放つて

臣下の器量を知る」といふ句に對して、玉章を雁にたくした蘇武の故事を附け、「竹の戸はたゞ風のみが開き又は閉ぢる」といふ閑栖の様の句に、「友とするものはたゞ月影のみ」と附け、「六根の六塵は悉く悟りを妨げるいけないものだ」といふ句に、「出家以前の在俗の時代を思へば、後悔することばかりだ」と附ける如き、何れも前句に應じて、連歌的な展開の仕方であつて、附句が作られてゐる様相を知るのである。従つて、元應の頃には、和漢の連句も、相當に文藝的になつてゐたと考へて差支ないであらう。

次で時代の古いものは、嘉曆四年七月に行はれた宮中に於ける聯句連歌であつて

野中清水涼

契り置きしものと心を思ひ出でよ

後醍醐院御製

又見草螢光

雪をとそ昔は窓にあつめしに

六條内大臣

可_レ大_ニ賢_人業_一

老木の松につもる雪かな

後光明照院前關白左大臣

の三連が『堯玖波集』に見られる。後醍醐院の御製は、「いにしへの野中の清水ぬるけれどもと

の心を知る人ぞくむ」といふ歌を本歌とせられた附句であつて、寄合も本歌の取り寄りも誠に巧みである。六條内府有房のも螢光に對して窓雪の取り合せて、寄合ひも良く叶つてゐる作である。前關白道平のは、賢人の事業の偉大なることに、老松が雪を戴いた氣高さを以て附けたものであつて、所謂心附に當るものである。

以上の他に、貞和五年に催された足利直義家の和漢連句の會に於けるもの、二條良基の千本花見に於ける和漢連句等、十四五の附句が出されてゐるが、その附け方や構想等は、何れも前句をよく味はひ、それに巧みに對應する如くに出來てゐる。

夕陽殘_ニ木末_ニ

花の陰より鐘はひびきて

前大納言尊氏

隔_レ海_ヲ故郷遠_シ

老のむかしは夢にだに見ず

夢窓國師

山人歸_ニ夕陽_ニ

つま木には紅葉一枝折り添へて

菅原長綱朝臣

客心雨滴愁

第六章 連歌と聯句との結合としての和漢連句

とまれかし草の庵の今日の暮

關白前左大臣」

など、前句は緊密に附けられて佳作と稱すべきものであらう。

『菟玖波集』のものは、断片的な附句があげられてゐるだけであつて、百韻と揃つたものではない。百韻のそろつたもので、現存する最も時代の古いものは、夢窓國師がその交友たちと共に行つたものである由、福井久藏博士は傳へてゐられるが、まだ私はそれを見る機會を得てゐない。それで、當時の日記に見えるものから材料を求めると、義堂周信の『空華日工集』に、九句連続の一例が見られる。

義堂周信によつて代表される五山文學は、漢詩文である。當時の禪僧は、詩文を弄ぶかたはら、聯句をも弄んだ。日工集庚曆三年十一月廿二日の條には、天鏡和尚の想ひ出をのべて「余在東山、時之舊交、性喜聯句、故雖臥病、亦與客聯句」と記してゐる。病臥中でも聯句をせずにはゐられぬほどの好士であつたといふのである。その當時の聯句が、如何なるものであつたかは『王澤不洩抄』の條に於て前にも述べた如く、甚だしく和臭をおびたものであつたと思はれる。義堂周信も、聯句詩序（空華集十一）に於て、漢士の聯句と當時のそれを比較して、

夫聯句之作尙矣。祖乎虞舜廢載、述乎漢武柏梁、自晉而下、陶謝之流、繼作而不見也。洎唐韓孟劉白之徒、擴而充之、倡而和之、聯句之體於此備矣。有七言焉、有五言焉、有律者焉、有古者焉。而成主賓倡答首尾鋪陳、如出乎一人之手、不失其序。と漢土聯句が、詩的であり、首尾あり、一人の手に出る、如き統一を有するものであるに比べて然今之青衿者、抽黃對白、比月聯風、所以不克成一體。姑取其資一時杯酌之侑而已。可笑也。

と、日本のそれは徒らに字對を中心とした興味のものであつて、一體を成すことあたはざるものであり、ただ、酒前茶後の娛樂となつたものに過ぎない、と述べてゐるのである。漢詩にすぐれた周信などより見れば、それは「可笑也」であつたであらうが、その代りに、それは和漢聯句にはふさはしいものとして、發達して來たのである。

五山の詩僧と公家者流とは、將軍を中心として、一座する機會が多かつた。さうした場合に、その兩者が相互に参加し合へる和漢聯句が、文雅風流の交りとして採用せられた事は、まことに自然な現象であつた。義堂周信も、京都に住するやうになつて以來は、一面には將軍義滿の補佐役の如くなると共に、關白二條良基等とも親しく交はつて居り、良基等と一座する際には、必ず

和漢聯句が行はれてゐる。良基も、漢詩文に關しては周信に教を乞ふといふ有様であつた。一例をあげると、『空華日工集』康曆三年九月廿五日の條には、

問云、三體詩可學否、曰可也。千家詩格可學否、曰可也。杜李可學否、曰可、不可矣。曰如何。曰、才器大則可、小則不可……。

といふ面白い問答が記されてゐる。和漢連句に關する記事の二三を紹介すると、

康曆二、八、八、赴二條殿倭漢聯句會。入自西門、延視泉園池亭水石、其美不可勝言。……既而准后出、接余于水亭、互敘久渴之懷、引入御榻閣、倭漢聯句百韻。

永德二、八、四、參相府……君則命諸公和漢聯句。攝政准后發句曰、「風キヨシ松ト水トノ秋ノ聲」。

永德二、十、十三、承府君（義滿）之命、赴西芳精舍紅葉之會。……和漢聯句。二條攝政殿發句曰、「松ハタラヌキハ紅葉ノ錦カナ」。府君命對句於余。余曰、「秋雨灑如絲」。

永德三、七、八、赴上生院駒瀧倭漢會……府君首唱曰、マチクラセ秋ノ月毛ノコマガクキ。攝政殿歎美之。……聯句百韻終。復就干院而飯。飯罷聯句。攝政發句曰「ハヤイデヨソノ曉ヲマツノ月」。月秋續之曰、「龍華秋未萎」。

の如きものがある。これ等の記事では、一句二句のものであるが、永徳四年十一月晦日の條には、九句連続した記事がある。即ち

府君（義滿）臨駕……會^ス於南枝、倭漢聯句一百句。齋訖道話移^ス刻、官駕乃還。發句二條殿
曰、カズ八千代名モ玉松ノ霰哉。府君命^ジ余續^ス第二句例也。曰、歲晚喜^シ回春。府君曰、チ
ル比ノ花ヤ山デヲカクスラン。余曰、鞋香草欲^シ句。二條曰、雪ノアユミハアトモシラレズ、
府君曰、ケサミツル花ハムカシニチリナシテ。國師曰、春遊跡易^シ陳。二條曰、秋ノ田ノミツ
ホノ國モヲサマリテ。大清曰、晁旒拜^ス紫宸。

これは、和句と漢句と交互に連ねたものであるが、季の連続に於ては、冬冬春春春秋雜となつてゐて、連歌の式目に比べて秋が一句といふ違ひがある。又、義滿の第三句と第五句に、「花」が重複してゐる點もやや不審である。或は誤寫かとも思はれるが、寓目した二三のもの、何れも右の如くである。發句は祝言を利かせた作で、當時の發句としてはすぐれてゐる。脇句は、歳晚に春のめぐり來るを喜ぶとあつて、發句に相應じて無難である。義滿の第三は、春に轉じて、山路の落花を詠じてゐるが、脇からは聊か離れ過ぎた難が無くもない。周信の第四句は、義滿の句によく附いてゐて、散る花のために、鞋は香り、草も匂ふばかりであると述べてゐる。良基の第

五句は、落花の雪をふみ通るわけであるから、跡もはつきりとはわからない、と附けたのであるが、やや第三句と輪廻に近い構想である。義滿の第六句も、やはり落花で、彼の第三とやや同巧に隨してゐる。國師の第七句は不即不離で先づ無難である。良基の第八句は秋に轉じて、國家の太平をのべ、大清の漢句は、國の治まるといふに對して、帝王を紫宸殿に拜してゐるといふ治國の様を畫いてゐて、良く出來た句である。韻字の關係は、漢句の方の春・句・陳・宸、何れも平聲の眞韻であつて法則に合つてゐるのを見る。

二 和漢連句の心得

良基は連歌に於ては、當時最大の指導者であつたが、これ等の記事を見れば、和漢に於ても相當に造詣が深かつた事が知られる。その良基が、和漢に關しては、如何やうな意見を抱いてゐたかを見ると、初期の僻連抄や連理秘抄にはその記事がなく、中期の述作にかかる擊蒙抄（延文三年）、筑波問答（應安二年）、晩年の九州問答（永和二年）等に、聊かづつこれにふれた記事があ

る。

一、和漢連句の躰、尋常の連歌には聊かはるべし。當世朗詠樂府などを被_レ付事、常に見ゆ。連歌の時は、いささか句に力あるやうにて可_レ有_二餘情_一也。所詮、太白・子美・東坡・山谷などが風情を、和に取りなすより外は、不_レ可_レ有_二故實_一。但、漢句の風情を和にとりなす事、殊に作者の骨法あるべし。心を取て、詞をう_二つすべ_一からず。詞あひ叶ひたるものあるべし。骨なき人のとりたるは、やがて詩の如くなる也。殊に用心すべし。(學蒙抄。開口神社本)

和漢連句には、殊更かやうの古き詩の心などは、興あるべき事也。大かた和漢連句をば、心を取て、詞をまはすとぞ古き人は申侍りし。(筑波問答)

凡、毛詩ハ唐ノ歌ノ本様ナリ。……殊ニ和漢聯句ノ時ハ面白カルベキ也。其外、三體家法、李杜等ガ詩、蘇黃等ガ句ナドハ、和漢ノ時、面白カルベキ也。詩ノ詞ヲ取バ、殊更幽玄ニヤ、サシキ事ヲ取ルベシ。コハゴハシキ事ヲバ不_レ可_レ取。又、和漢ノ時、心ヲ取テ、詞ヲ捨ル事アリ。凡、和漢連句ニハ、詞ヲ捨テ心ヲ付事也。是口傳也。又、朗詠樂府ノ詞、此比ハヤリタレバ不_レ及_レ申。カカリモ詞モ、晚唐ノサザメキタル詩ニモオトリ侍ニヤ。(九州問答)

以上を見渡して、良基の和漢連句に關する見解をまとめて見ると、(一)和漢の際の和の句を作る

際には、漢土の有名な詩人、例へば、李白・杜甫・東坡・黄山谷の如きの詩を、連歌の句のやうに和らげて、句を作るのが良い。(二)漢詩を和句に取りなす際には、その詞を取り用ひる事を避けて、その意趣を取ることが、最も大切である。(三)詞をとり用ひる時は、やさしく優美な詞だけに限定して用ひるべく、こわごわしい詞は避けなくてはならない。(四)和漢連句の時の和句は、常の連歌と異つて、句に力があるやうにし、且つ餘情の豊かなやうに句を作らねばならない。大凡以上の四項目にまとめ得るかと思はれるが、良基の考へ方には、中年と晩年とで格別の相違もなく展開も見られないのである。

以上、良基の見解の基本たるべきものを見たのであるが、これを一言にしてつくせば、連歌人も、和漢連句に臨むためには、十分に漢詩文の素養をつみ、これをよく消化して居なくてはならない、といふ事につきるであらう。相手の漢句が十分に鑑賞出来なくては、到底氣の利いた附句は作る事は出来ないであらうし、又、相手の出方に應じて句の構想をかまへる時も、漢詩的なるものを和様に仕かへるのでなくては、相手に取つては附け難い句を作ることになるからである。連歌に於ても、良基は漢詩文の素養のある事を希望してゐるのであるが、和漢に於ては、特にその必要をのべてゐるのである。

良基の和漢聯句の論は、専ら現實の實作に即してのべられてゐるのであるが、彼が、和漢の時には、特に和句に「力あり、餘情ある如くせよ」とのべてゐる事は、宗祇に到つて、極めて明確な藝術意識を以て説かれてゐるのである。「吾妻問答」に

一、和漢連歌の時、心づかひ侍るとは如何。

答曰、如_レ仰常の連歌の心得にては、無下に心きたなき事侍るべし。其故は、連歌は大略こまかなる事を先として、長高き所少し。連歌の上にてだにも、是のみぞ口惜く侍る。ましてや詩人にあひて、さやうの心侍らば、何の興かあらむ。いかにも心をたかく持ちて、細かに入り候はで、大きに句を仕立て、風情眺望を心にかけて、一句も心きたなき事をせじと、

可_レ案候哉。歌も詩歌合の時は、長高く詠めと申す事侍るとかや。

とある。詩歌合に於ける和歌は、漢詩に壓倒せられない爲には、雄大に長高く詠むべしと言はれてゐる。和漢の連句は、言はば詩歌合せにも似て、漢句と和句が相桔槔し相映發し合はなくては、その感興が乏しい。そのためには、こまかな言葉の綾に没頭したやうな和句では、漢句に比して、甚しく小さく見劣りがするために、効果が上らない。どうしても「心を高く持ちて、大きに句を仕立て、風情眺望を心にかけ」た長高體の句でなくては、漢句に應ずることが出来ない、といふ

のである。

連歌は良基の時代には、まだ心附けが十分に發達しないで、前句の語の縁語にたよる寄合附けが多く行はれてゐたのである。良基自身は、心附けを推稱してゐるのであるが、必ずしも詞の寄合ひを否定するものではなかつた。それが次第に心附けを本流とするやうに傾いて來たのは、宗、砌心敬等の時代を経て、宗祇に到つて完成したと言へるのである。かうした心附けを尊重する風體は、和歌の理念を連歌の中に導き入れ、親句よりも疎句を大切にするやうになり、風情の映發を心がけるやうになつた事に主要な原因があるのであるが、和漢の連句といふものが、それに與へた影響も見のがし難いと思ふ。和漢に於ては、前句のてにはや詞などに縁を求めるやうな小細工では、漢句に匹敵するだけの大きさを持つ句は作れるものではなく、前の漢句全體の風韻を聞き取つて、その風趣に合致するだけの大きなやかな風情を先づ考へ出し、然る後にこれを長高く句作りするといふ行き方が要求せられる。その點で、和漢の連句が、連歌に與へた側面的影響は十分に高く評價さるべきものであると思ふ。

三 和漢連句の式目

連歌の式目は、應安新式によつて、大體從來の本式新式等様々に別れてゐたものが統一された。そして良基によつて追加が加へられ、一條兼良によつて今案が加へられて、完成したのである。しかし、和漢連句に關しては、特別な式目は定められる事はなかつた。それは、必ずしも和漢を連歌よりも輕視したわけではない。和漢の連句は、時として單なる連歌よりも高尚なものときへ考へられてゐた。少くとも、價値に於て連歌に劣るものとは考へられては居なかつたのである。然るに、それに特別な式目が無かつたといふのは、結局、連歌の式目の大綱に立ち、連歌式目の一應用として、連歌式目がその代用となつて居たものと思はれるのである。聯句を作る詩人も、和漢の座に連なる時には、連歌の規則の大體を心得てゐなければならぬし、又、作品の上から見ても、相當な心得を持つてゐたらしい事が推測出来るのである。それで、和漢といふ形式の文藝が始まつて以來、非常に長い歳月を過ぎて、はじめて和漢の式目らしいものが、一條兼良によつて作られた。それは、連歌の式目を整備して居る中に、和漢にも何かの式目を設けて置く方が便利であると考へた爲もあらう。又、兼良の時代になると、宮中などで和漢の行はれる事が多く、

月並の和漢の會などが、連歌の會と並んで行はれるやうになつて、多くの同好者から、式日の制定を兼良に希望したといふやうな事情もあつた爲であると思はれる。

兼良の定めた法式は、『和漢篇』として今日知られてゐるが、それには、七ヶ條の大綱的なものがあげられてゐる。事實上、これだけで十分であつたと思はれる。先づ、

一、大概法、可用_レ連歌式目_二事。

と、概括的に断定してゐる。大概のことは連歌の式目に准據せよ、といふ教へは、それまでも、和漢連句は大體連歌の式目によつてゐた、といふ事實に立脚しての言葉であると思ふのである。次で、連歌の式目と、小異のあるべき事を六ヶ條にわたつて述べる。

一、和漢共以_二五句_一爲_レ限。但、至_二漢對句_一可_レ及_二六句_一事。

これは、連歌式目には不要であるが、和漢に於ては、和句と漢句と、それぞれに連続する句數の限度を定めなくては、懷紙づらも不調和になり、一卷としても變化の面白さを缺く故である。大體五句連續を限度とするが、漢對句は六句に及ぶも可とする、といふ。しかし、實際には五句まで連續することは稀であつた。

一、景物・草木等員數、和漢可_レ通用_二事。但、雨・嵐・昔・古・曉・老等之類、和漢各可_レ

用之。

これは、一座一句物・一座二句物・一座三句物・一座四句物等として、新式に規定してある草木や景物等の句數については、原則としては、和と漢とを通じて、その使用度數が、二句のものであれば二句、三句のものであれば三句といふ風に、新式の規定に従へといふのである。ただ、雨・嵐等は、連歌に於ては一座一句物であるから、それを一方で使へば他方で使へなくなるが、さうした一句物だけは、漢に一度和に一度使用を許すといふのである。

一、同季可_レ隔_二七句_一。同字并戀・述懷等、可_レ隔_二五句_一。自餘隔_二七句_一之物、可_レ隔_二五

句_一。日と月。の類也。隔_二五句_一之物、可_レ隔_二三句_一。山類と山類、水邊と水邊、木と木の類、日と日、風と風、猶同字戀物也。隔_二三句_一之物、可_レ隔_二

二句_一。嫌_二打越_二之物、同_二連歌式目_一。

これは、句去りに關したものであつて、その中、連歌の式目に同じきものと、連歌の式目よりも寛大にしたものがあるが、連歌式目そのままは、同季・同字・戀・述懷であつて、他は著しく寛大にせられてゐる。これは、漢句を交へる上から、制限をゆるめたものである。

一、山類・水邊・居所等、不可_レ有_二體用之分別_一事。

これは、體と用の區別は、和漢に於ては、敢て守る必要がないといふのである。連歌に於ては、

早くも僻連抄に體用の別が説かれ、應安新式にも式目中に含められてゐるが、和漢連句にこれを用ひることは、作句を難澁たらしめるために、この項目を設けたものと思はれる。

一、萬物異名、就本體可定其季。但可爲本體外事。假令、金鳥は日、銀竹は雨、金

衣は鶯、鳥衣は燕、霜蹄は馬、鯨は鐘如此之類。可依連歌異名之物例。

この條は、漢句に於て特に多くあらはれる異名のものについての注意である。連歌であれば鶯とか燕とか雨とかいふ語そのままに用ひるのであるが、漢詩文では、さうした普通の名稱の他に、金衣とか鳥衣とか銀竹とかいふ語を用ひる例が多い。必ずしも洒落た名稱を好むといふことばかりでなく、平仄の關係から、かうした使用をしなくてはならない場合もあるのである。それで、さうした異名を用ひる場合には、式目の上から如何にこれを扱ふかといふ事を述べたのである。そして、(一)異名の季は、その本體の季に准ずる。例へば金衣は春の如きである。(二)異名を用ひて作つたものは、その數に於ては、本體の數の中には加へないといふのである。

一、聯句中、可定其季等二字事。暖芳有花之意。紅同、淑氣・燒痕・踏青・芳草如此之類。新

綠・霖・暑・炎熱・草木之茂字・清和四月之類。初夏也。初涼新涼同。冷爽・金氣・黃落如此之類。枯

草木之心也。臘・探梅・春信・守藏如此之類。信書信・容非賓客之容也。一葉身舟・歸字・漂泊如此之類。

錦字・御溝葉・私語如_レ此_之類。人名可_レ爲_レ人倫。姓は不可_レ。但可_レ依_レ事也。名利塵意世_之・浮跡・出處如_レ此_之類。一

絲釣糸之意。可_レ爲_レ水邊也。禪定・錫如_レ此_之類。釋教也。

以上は、漢句に於て使用する語について、それぞれに、式目の範疇に従つて、春夏秋冬の四季に分類し、或は、旅・戀・人名・述懐・釋教に類別するところの實例を示したものである。即ち、これ等の分類に従つて、それぞれに、季句としての連續と去嫌ひとか、戀・旅・釋教等の連續と去嫌ひが、前に掲げた規則によつて定められるが爲である。

以上、和漢篇の所説を通じて考へられることは、和漢の連句は、その形に於ては、和句と漢句とが入りまじつて居るけれども、その文藝的な味はひとか、一卷の進行に於ける變化と秩序等に於ては、全く連歌と同じ立場に立つものであつて、漢句そのものも、和句と同様の扱ひを受けてゐるものだといふ事實である。即ち、漢句のみの聯句に比して、更に更に日本化せられ、連歌化せられて、渾然とした文藝にまで進んでゐることである。そして、その特色としては、連歌的でありながら、又、連歌とは違つた味はひを持つといふ事である。當時、和漢が連歌と相並んで行はれ、流行してゐたといふのは、この一種獨得の味はひに惹かれた事も大きい一原因だと考へられるのである。

四 和漢連句の實例の吟味

以上で、和漢を連ねる際の、創作上の心得かたや、その際に準據とすべき式目等について、通りの概観を終つたので、次に實際に百韻が如何やうに連ねられてゐるか、又、式目は如何に守られてゐるか、その藝術的な味はひはどんなものであるか等を見る爲に、應永元年十二月に後小松院が作られた『後小松院御獨吟和漢聯句』をあげて見たい。應永元年は、良基の薨後六年、一條兼良が『和漢篇』を作つたと思はれる享徳元年よりは六十年前に當るので、その式目は、兼良の定めてゐる『和漢篇』に必ずしも合致するものではないが、大體に於て、二條良基晩年時代の和漢の状態を想見することが出来るものである。且つ、獨吟である爲に、十分の推敲が加へられてゐる點は、藝術性を吟味する上に甚だ有力な材料である。

ちる雪の花にいとほぬ嵐哉

(冬)

歳寒梅獨芳

(冬)

北窓晨呵筆

南 陌 曉 露 裳

霧薄き外山の月に旅たちて

秋かぜ遠く分る草むら

斷 續 亂 蛩 響

去 來 飛 鳥 忙

暮かかる浦わの舟の數みえて

江 畔 水 微 茫

興 永 石 磯 釣

醉 闌 金 殿 觴

ひかりそふ花の木のまに日のさして

霞曙れゆく山の朝明

みね越て今もや歸る春の雁

情 疲 天 一 方

滴 愁 孤 館 雨

(秋・月)

(秋)

(秋)

(春・花)

(春)

(春)

第六章 逆歌と聯句との結合としての和漢連句

聯句と連歌

點^メ發^ニ半 閨 霜。

月白き枕の上に秋ふけて

夢もま遠にうつはさごろも

漸寒き比にや賤も馴れぬらん

なびくけぶりは竹の夕風

ニオ
遺賢林下器

美女帳前粧。

獨坐對^シ紅燭^ム

孤眠憐^ム素商^ナ

うきおもひ夜なく月もうれへきて

ちぎりもかれつ露の下草

妻あはぬ野はらの鹿の聲しほれ

物寂しきは山本のくれ

松^ハ高^{クニテ}煙^{タリ}漠々

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋・月)

(秋・戀)

(秋・戀)

榴^ヘ發^{ヒライテ}火^カ煌^{クワ}々^{クワ}

(夏)

除^レ熱^ヲ薰^フ風^ノ閣^ノ

(夏)

奮^フ寒^ヲ朔^ノ吹^ク郷^ノ

(冬)

柴の戸を叩くあられの横ざりて

(冬)

人こそとはね冬のおく山

(冬)

ニラ
歌^カ聲^ノ加^{リテ}伐^リ木^ヲ

酒^{サケ}味^ノ更^ニ成^ス章^ヲ

譽^{ホメ}遠^シ房^ノ兼^テ杜^ノ

道^{ミチ}洪^ク虞^ノ與^リ唐^ノ

聖^{セイ}叡^ノ新^ニ飽^キ瑞^ニ

仙^{セン}術^ノ屢^ク呈^ス祥^ヲ

菊はこれ遠きよはひの種なれや

(秋)

なみの花ちる秋のくに川

(秋)

月の色移るみ山に風たちて

(秋・月)

第六章 連歌と聯句との結合としての和漢連句

聯句と連歌

啼猿晚斷腸ス

袖かけて寒き木のはや時雨るらん

たのむかけなきわび人の宿

難シ學ビ一瓢樂

尤ル寄スルニ双鳥ノ翔ス

三才

乾坤唵興濶
枕簟夢魂長シ

小蝶こそさく花ぞのをすみかなれ

おりしる志賀の故郷の春

浦人はおきの霞の網ひきて

淑氣トサシ鑠ニ瀟湘

佳景アツ須レ催ス句ヲ

閑時ソノロニ轉ク炷ク香ヲ

おこなひは猶怠らぬ寺ふりて

(冬)

(春・花)

(春)

(春)

(春)

ふるや軒ばの杉のむら雨

洞_ニ口_ニ雲_ニ舒_ニ卷_ニ

波_ニ心_ニ艇_ニ有_ニ亡_ニ

風むかふしほせに霧の立迷ひ

さしくる月の影はほのく

ミウ

鈎_コ籬_ス山_シ菘_ソ色_シ

昔_タ草_ク野_ノ春_ハ光_ク

農_ノ舍_ノ鶯_ノ兒_ノ語_リ

宸_チ宮_ノ燕_ノ子_ノ揚_ル

うららなる風は雲井ををとづれて

萬_{マン}象_ノ忽_チ歸_ル陽_ノ

民_{ミン}喜_ビ昇_ル平_ノ化_ル

儒_ノ思_フ學_ノ業_ノ常_ニ

ひまとめて鼓や窓をてらすらん

(秋・月)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

(夏)

みえて葉のぶるわか竹の露

(夏)

我涙心よはくも落そめて

(戀)

つつむに堪へぬ戀のくるしさ

(戀)

風添團扇恨

(戀)

絮題少詩狂

(春)

春樹綠千里

(春)

晚花紅一場

(春)

うつろはん心の色はみるもうし

(戀)

おもひたゞばや人しれぬ中

(戀)

惆悵倚欄處

(戀)

寂寥携杖傍

(戀)

月のぼる山のすそ野は夜に成て

(秋・月)

をざさのくまにすだく虫の音

(秋)

置く露の哀や仇に頼らむ

(秋)

よるづうき世ぞ思へ身のはて

禪 榻 茶 煙 淡

疎 籬 竹 影 藏

披 書 塵 夏 少

和 瑟 漏 聲 央

魚 躍 奔 流 白

鳥 啼 寄 嶺 蒼

松原のむもれし雪の村ぎえて

かすまぬ月の猶寒き比

風あるる春の湊もよる舟に

あまの袖まで波やかくらん

沙 際 辰 樓 聳

城 邊 鳳 闕 康

(春)

(春)

(春)

第六章 連歌と聯句との結合としての和漢連句

右の和漢聯句について、先づ形式方面を檢して見ると、百韻を通じて、隔句に韻をふむ形式が採られてゐることがわかる。勿論、韻をふむべき句（この聯句で言へば、偶數の句）が、和句である場合には韻はふんではないが、漢句であれば、韻をふんでゐる。韻は、陽唐の韻であつて、○印の圈點を打つた文字は、皆「陽」韻の文字である。この韻のふみやうは、他の和漢聯句を見ても、大體同様であるから、和漢聯句一般に通ずる約束であつたものと考へて良いであらう。隔句に同一韻字を用ひるのは、漢土の聯句の形式以來の習慣である。

次に、和句と漢句の句の連續の仕方を見ると、『和漢篇』に「和漢共以_二五句_一爲_レ限。但至_二漢對句_一可_レ及_二六句_一事」とある條項に、完全に一致してゐるから、『和漢篇』に記されてゐる此の規準は、良基時代から大體行はれてゐたものかと考へられる。和句に於ては、一句のもの三回、二句連續のもの六回、三句連續のもの三回、四句連續のもの五回であつて、五句連續のものはない。又、漢句を見ると、一句のもの一回、二句連續のもの四回、三句連續のもの五回、四句連續のもの五回、六句連續のもの二回、となつてゐて、五句連續といふ形は無い。

次に、漢句に於ける對句を見ると、二句連續のものでは、四回ともに對句となつてゐる。三句連續の場合には、殆んどすべてが、その第二句と第三句とが對句となつてゐるのである。四句連

續のものは、何れも、第一句と第二句、第三句と第四句、が、對句となるやうに構成せられ、六句連續のものは、二回ともに、第一句と第二句、第三句と第四句、第五句と第六句、とが、何れも對句を成してゐるのである。

次に、季句の連續と去嫌ひとについて檢して見ると、和漢にわたつて、春季三句連續三回、春季四句連續二回、夏季二句連續二回、秋季二句連續一回、秋季三句連續四回、秋季四句連續一回、冬季一句一回、冬季二句連續一回、冬季三句連續一回、となつてゐて、連歌式目から見ると破格は、秋季二句連續のもの一回だけである。又、『和漢篇』に、「同季可_レ隔_二七句_一」とあるに對して、それに抵觸するものは、初裏から二表へかけての部分に、秋季が五句だけを隔てて再びあらはれてゐるだけである。その他の去嫌ひは犯してゐる部分は見られない。

次に、月や花の句が如何に配列せられてゐるかを見ると、表には第五句目に月があり、裏には第五句目に花、第十一句目に月がある。二表には第五句目に月があり、二裏には第九句目に月がある。三表には、第三句目に花、第十四句目に月があり、三裏には月も花もない。名殘の表には第二句に花があり、第七句目に月がある。名殘の裏には第四句目に月があつて、花は無い。従つて、月や花については、必ずしも連歌の約束に従つてゐないで、適宜にこれを配したものである。

と見てよいであらう。

次に、此の和漢聯句に於ける藝術的な味ひについて検討して見る。その味はひにも、漢句の對句としての面白さもあれば、和句の附合ひの面白さもあるわけであるが、此の條では、主として、和句から漢句への移り、漢句から和句への移り、に於ける藝術味を中心として眺めたいと思ふ。和漢聯句の面白さは、この點が中心であり、又この點が、聯句と連歌との藝術交渉の焦點となる最も大切な所であると思ふ故である。

先づ、漢句から和句への移り方から見よう。その點で注意すべき點は、その附け方が、詞や縁語の寄合ひ付けを、如何ほどの程度に離れ得て、心附けの方面に進展してゐるか、といふ點である。

南 陌、曉、霑、裳

霧深き外山の月に旅だちて

南陌北巷は、道路のちまたをいふ語である。「曉天に道のちまたで裳のすそを濡らす」といへば、自然に、農夫や樵夫とは異つた人の姿が想はれるので、附句では、これを旅人として扱ひ、霧深

い曉、外山の山の端に殘月の殘る頃の旅立ちとして描き出してゐる。心附けである。

去シヤ 來キ 飛トビ 鳥トリ 忙シヤ

暮かかる浦わの舟の數見えて

飛鳥がさかんに空をとびかけり、いそがしげな状態である、といふのが前句である。それは何等特別な季も刻限も又鳥の種類をも限定してゐない。燕でも渡り鳥でもかやうな場面にふさはしい。それを附句では、海邊の景とし、「暮色せまる頃に、浦わには澤山の舟が集つてゐる」と附けてゐる。句境の轉じ方がすばらしいと思ふ。海上の舟たちの忙しげな夕暮と、さうした海邊に盛んに鳥がとび翔り埒に急ぐらしい氣分のあわたたしさが、よく照應してゐる。芭蕉の句ひ附けに近い味ひである。

醉サケ 闌ナリ 金 殿 簾

ひかりそふ花の木の間に日のさして

實に絢爛華麗な附け合ひである。金殿玉樓に於ける酒宴の興がたけなはに達してゐる、といふ光景に配するに、咲きみちた櫻花に陽光が燦々とふりそいでゐる景を以てしたのである。これも芭蕉風な句ひ附けと稱し得る。

孤 眠 憐 = 素 商

うき思ひ夜なく 月もうれへきて

ひとりの淋しい床で素商(秋)のあはれを感じるといふ前句に對して、「うき思ひ」の附句は、やや附きすぎた感じがあり、「孤眠」に對して「うき思ひ夜なく」、「憐素商」に對して「月もうれへ來て」は四つ手附け的になつてゐるが、單なる縁語の寄り合ひではなくて、一句全體の情調に於て兩句が相通ずるところがあるから、心附けの味はひと稱すべきであらう。

奮^フ 寒^フ 朔 吹^フ 郷

柴の戸を叩く霰の横ざりて

はげしい寒氣を起しながら北風の吹きまくる郷、に對して、さうした里にありげな柴の庵を點出し、その戸を、吹きなぐられた霰が、はげしく叩きながら又吹きとばされてゆく様を附けたのである。「叩く霰のよこざりて」といふ表現は、前句の強くすさまじい氣分に、よく響き合つてゐる。朔風に霰は、少し附きすぎた感がなくもないが、心附けの句として良く出來てゐる。

仙 術 屢 呈^ム 祥

菊はこれ遠きよはひの種なれや

仙術を修する者が、しはしば瑞祥の發現を奏上する、といふ前句であるが、附句は、南陽縣の菊水の故事を踏んで、「菊はこれ即ち遐齡の種である」と附けてゐる。共におめでたい祝言の氣分で以て、二句が連ねられてゐて、寄合ひ附けからは、遠く離れてゐる。句ひ附けに近い附け方である。

啼 猿 晚 斷 腸

袖かけて寒き木のはや時雨らん

前句は巫峽の猿聲を思ひやつた句であるが、附句は、さうした斷腸の思ひをさせる猿啼を聞く人の身の上に轉じたものである。それは正に旅人であるべく、従つて、木の葉の時雨がふりかかる旅衣を以て、その人の姿を描き出したものである。二句は旅情の句ひで連なつてゐる。

枕 簟 夢 魂 長

小蝶こそさく花ぞのをすみかなれ

前句は、たかむしる臥して快よい夢を見てゐる意であつて、枕簟といふ語は、何となく漢土の隱逸者を思はせる。附句は、これを、莊子の夢の如くの場面と取りなして、莊子が夢の中に胡蝶と化して、花園の中をひらひらととびめぐつた故事で附けた。いはゆるおもかげ附ともいふべきも

のである。

閑時ソノトキ 轉マユ 炷ツ 香カ

おこなひは猶愈らぬ寺ふりて

前句の炷香といふ語からの連想で、寺といふものに着想したのであるから、寄り合ひ附けの一種であると見られる。閑寂な氣分が二句の間を流れてゐる。

以上は、漢句から和句への移りについて、その味はひを見たのであるが、心附けから、更に進んで、芭蕉の匂ひ附けに酷似したもので、既に見うけられる點は、大に注目すべき所であると思ふ。

それで次には、和句から漢句への移りを見よう。これは、連歌の藝術的な發展には、殆んど無關係であるかのやうに考へられるかもしれない。しかし、漢句が、如何に和句の餘情なり風情なりを生かして得てゐるか、といふことを知ることが、聯句の作家が、如何に連歌から多くの影響を受けてゐたかといふ事を知ることになる。

秋かぜ遠く分る草むら

斷續、亂、蛩、響

秋風裡に、遙かに草むらの小徑をわけ進む風情に對して、斷續して聞えて來る虫聲をあしらつてゐる。心附けとして、前句からの離れぎわは、あまり離れ得て居らず、少し附きすぎた感じはあ
るが、漢句であるから、附け過ぎる位でない、氣分が移つて來ない爲と思はれる。

みね越て今もや歸る春の雁

情、疲、天、一方

此句は、後世の句附けに相當する。天の一方をながめて嗟嘆する心情と、峯を越えて歸つてゆく春の雁に何となき別離の哀愁を感じる心とは、よく句ひあひ響きあつてゐる。

物寂しきは山本のくれ

松、高、煙、漠、々

山麓の暮色のさびしさを詠歎した前句に對して、その山麓の山家の體を描き出したもの。夕餉の仕度の炊煙があたりを立ちこめて、その煙の中からは高い松の梢があらはれてゐるといふのであつて、一幅の畫面である。

月の色移るみ山に風たちて

啼猿 晩斷腸

前句は、夜ふけて月も西方に傾く頃の深山に、はげしい風が吹きはじめたといふので、凄蒼荒寥たる景色である。その前句の氣分に應じて、附句は、所謂聞く者をして斷腸の思ひをさせると言はれてゐる夜猿の啼鳴の聲を配したのである。蕉風の「ひびきの附け」に該當するものである。

たのむかけなき侘び人の宿

難學 一 弧樂

何等の庇護者もないうらぶれた侘び人の住居に、陋巷のおもかげを感じて、顔淵の故事を學ぶことの如何にむづかしいものであるかを附けたのである。心附けである。

浦人はおきの鏡の網ひきて

淑氣 鑲瀟湘

前句は、漁夫が霞の立ちこめた沖に舟を出して、網引きをしてゐる景である。それに對して、附句は、春氣が瀟湘のあたりをつつんでゐる意をつけた。即ち前句の海邊の春望を附句では漢土の瀟湘洞庭のあたりの光景に見立てかへたのである。心附けと見ることが出来る。

つつむに堪へぬ戀のくるしさ

風、添、團、扇、恨

前句は、自分の心一つに包みかくしてゐる事も出来ないほどの戀の惱みを句にしたものである。その惱みを、附句は、思ふ男が通つて来てもくれない宵のなげきに轉じた。そして、訪れるものは夕風ばかりで、その夕風は一しほに、班女の團の扇の恨みを自分に添へなやますやうな氣がするといふのである。これなど句ひ附けに近い味はひがある。

思ひたたばや人しれぬ中

惆 悵 倚 欄 處

同じく戀の句である。前句は打越の「うつろはん心の色は見るもうし」といふのに關聯させて見ると、戀の思ひをふつつりと斷念しようといふ意である。それを附句では、欄干に凭れて悲しさに惱んでゐる姿に移した。思ひ切らうと思ふ心は又、思ひ切れない心でもある。そこに惆悵があり、欄に倚つてながめ嘆息する姿も生れるのである。句ひ附けとも言ひ得るであらう。

よろず浮世ぞ思へ身のはて

禪 榻 茶 煙 淡

前句は打越の「置く露のあはれや仇に頼むらん」といふ句と共に、釋教的無常觀を中心としてゐる

る。此世は萬事憐ない浮世である、思ふべきはただ身の果てである、といふ意である。それに對して、附句は、茶煙の淡く立ち上る禪刹を以てした。(禪榻は禪僧のよる椅子の意)。まことに面白い附句であつて、蕉風の句ひ附けと全く同じである。

以上少數の例ながら、漢句の附け方の藝術的な味はひを見たのであるが、これ等を通じて、漢句は心附けか句ひ附けを以て附け進められてゐる事が、はつきりと感じられる。即ち寄合附けや縁語附けのやうな、細かな技巧を施すことは、漢句に於ては不可能であり、どうしても前句全體の意趣や氣分に應じた句を附けざるを得ないのである。これは、附け方に於ける小技巧を封じ去る上から見ると、まことに慶すべき事である。正格な連句の連接は、どうしても心附けか句ひ附けであらねばならない。かやうな立場から見ると、和漢聯句といふものは、連歌の附け方に寄與する事が頗る多いものと見なければならぬ。俳諧時代になつて、貞門の末期に和漢の俳諧が再び流行し、その影響が談林俳諧の天和時代の漢詩文調を惹き起し、それを通過して芭蕉の「句ひ附け」が生れたことを考へる時、室町初頭時代の和漢聯句が、やがて宗砌・心敬・宗祇等の心附けや句ひ附け的な手法を生み出す有力な原因となつたものであらう、と想像することは、許されて良い事だと考へるのである。

第七章 室町時代の聯句管見

建治年間に良季によつて著された『王澤不渴抄』が、我國に於ける當時の聯句の状態を見る上に、非常に有力な資料である事は、既にのべた。そして、それには、我國の長連歌からうけた影響が、相當に濃厚に見られるものである事も、明らかにし得た。それで、次には、其後の聯句の變遷は如何になつて行つたか、といふ事について考へて見たい。

聯句は、多くの詩僧によつて玩ばれた。勿論、五山の詩僧の本領は、詩にあつて、聯句などは詩作の餘興であるに過ぎなかつたが、『空華日工集』などにも、非常に聯句を好んで、病中にあつても見舞客を相手に聯句を試みてゐたやうな詩僧の逸話が見られるから、此の道に専念する者も多少はあつたであらう。又、室町時代のものであるが、『翰林蒔蘆集』に見える「題小楠彦龍聯句後」や、明應二年に龍澤の書いた聯句序に見られる所の、彦龍や小楠の聯句好み逸話など、

まことに面白うと思ふ。

延徳庚戌（二年）之冬、萬年彦龍興公藏主不_レ安。忘年友小楠横川翁問_レ之。雪月奇夜、爐無_レ炭、窓有_レ梅。二人衝_レ口吟_レ、信_レ手而書_レ。然後抛_レ擲於鹽投推_レ也。

といふのである。芭蕉の所謂「文臺引下せば即ち反古なり」を實地で行つたものである。又、策彦といふ詩僧は、甚しく聯句を好んだらしく、その「城西聯句」は、彼が彼の交友と連ねた聯句九千句を収めた一大聯句集である。かくの如く詩僧たちの或る者は、聯句に熱中して居たのであるが、社會全體より見れば最も流行したものは連歌であり、それに次ぐものは和漢聯句であつて、聯句はその行はれる範圍は極めて小さいものであつた。従つて、當時の僧侶の日録等を檢して見ても、詩や和漢會の記事は相當に見られるが、聯句に關したものは、殆んど見られない。その中、やや詳しくこれにふれたものとしては『臥雲日件録』に

享徳二、二、十七。（前略）一日絶海就_レ慈恩寺_二拈香_一、觀中太岳從_レ焉。仲芳知_レ之相招。座有_レ東福楞嚴頭、聯句。破題曰、「涼雨城南寺」。絶海續曰、「清標天上仙」。次慶雲莊有_レ句、觀中對_レ之。偶忘_レ之。次某曰、「滴露薔薇架」。太岳對曰、「來風齒_二瀆漣_一」。時鄂隱執筆書_レ之。又、仲

芳分_レ座東福_二之日、太白惟肖叔英等同來。將_レ作_レ詩。立_レ題以_レ春齋留_レ客。時雨下。恐_レ其歸

路日暮、罷詩作句。某曰、「留春春齋雨」。太岳續曰、「梅邊分半雲」。凡聯句五字中、除韻外不許用同句中字。然絕海仙韻外用天字、太白雲韻外用分字。從是而我山中不必修之云々。

と、聯句に關する往昔の物語りを記してゐるのが目につく程度のものである。

應仁の大亂以後になつて、幕府の恒例の月並連歌などが次第に行はれなくなると共に、却つて禁中に於ては、月並連歌・月並聯句・月並和漢などが盛んに行はれたらしく、公卿日記には、さうした禁中文雅の會の記事が多く記されてゐる。この方面で最も多くの資料を求め得るものとしては、『實隆公記』が最も我々の渴望をみたしてくれる。聯句の會や和漢の會には、當時の有名な詩僧が多く參加して、公卿者流と一座してゐる。實隆公は、聯句にも和漢にも又連歌にも出席して、その英才ぶりを發揮してゐられる姿がよくうかがひ得られ、少數ながらその座の作句までも引用せられてゐて參考となるものが多い。一々の引例は煩瑣にわたるので省略して、次に、當時の聯句の式目が如何やうなものであつたかを、探つて見ることにしたい。

以上は、記録類から見た聯句の状態について述べたのであるが、記録日記に於ては、聯句の式

目とも言ふべきものは、明らかにし難い。その方面の簡單なものは『異制庭訓往來』に

其方式者、面則可書十句也。先唱句者、可詠當季之景。同字者可去七句。但於上二者、一懷紙中同可去之。同趣者可去四句。終兩句者可爲祝言。

と見えてゐるが、これは往來物であるために、詳細をつくし難くて、極く肝要を抜き出したものである。それに比べると、漆桶萬里の『梅花無盡藏』には、「聯句說」なるものがあり、室町時代の中期に於ける聯句の方式ともいふべきものが、割合に詳細にうかがへる記事があつて、參考になる。

萬里は、先づ聯句の歴史を簡單に述べてゐるが、そこには格別の新説もない。珍しいものとしては、東坡が幼年時代に作つたといふ六言の滑稽な作品をあげてゐる點であらう。面白いから引用して置く。

東坡云、余幼時、里人程建用。楊咨・家弟子由、會草舍中、大雨聯句六言。程云「庭松偃

蓋如醉」、楊云「夏雨淒涼似秋」、余云「有客高吟擁鼻」、子由云「無人共喫饅頭」、坐皆絕倒也。

萬里は次で、聯句の方式に關して

詩話小説之中、未_レ看_レ記_二其規矩繩墨_一之者。哀哉、所_レ學所_レ見不_二廣大_一。蓋有_レ之矣、我未_レ見_レ之。

と述べて、未だ聯句の法式を記したものを見た事がないといひ、それは自分の淺學の爲であらうと歎じてゐる。漢土の詩話の類に、聯句の規則が見られないといふのは、今日に於ても變りはない。それは、一理ある事であつて、漢土の聯句は、日本の後世の聯句とは異つて、格別に規矩式目を定めて置かなくても、詩人文人であれば、十分に連ね得るからである。各人が、前の作者の意をうけて、韻と對句とに心をくばつて作れば、それで漢土の聯句は十分に聯ね得るのである。従つて、萬里が詩話小説類の中に、聯句の法式的なものを見出し得なかつたことは、別に彼の漢學の爲ではないのである。萬里はつづけて、

但、本邦_レ老古錐、爲_二童蒙_一有。

と、我國の老古錐が、童蒙のために設定した式目ともいふべきものがあると述べて、それを引用してゐる。

聯句破題之五字、第二置_レ仄、是爲_二正體_一。第二置_レ平、是爲_二偏體_一。動避_二一三之聲_一、又名_二四一之聲_一。

これは聯句の第一句に關する注意であつて、平仄の事を論じてゐる。

或乾坤、或時候、或氣形、或體藝、或生植、或器材、或食服、或光彩、或數量、或複用等、各其門類、隔_二六句八句_一用_レ之。句去法、同者避_レ之。

この條は、聯句に於ける去嫌ひを論じたもので、注目すべき條である。ここにあげられた乾坤・氣形・體藝等の門類は、連歌で言へば、四季・山類・水邊・居所・神祇・釋教・戀・述懷等の類別に相當するものであつて、連歌に於て、水邊と水邊・山類と山類・戀と戀・旅と旅等々について、それは何句を隔てなければ詠んではならない、といふ様な規則が設けられてゐるのに倣つて、聯句の方面に於ても、かやうな式目が生じて來たものと考へられる。連歌に於ては、これ等の類別それぞれに、連ね得る句數の規定（何句以上何句まで連ねるといふ規定）と、去るべき句數の規定（何句を隔てなくては用ひてならないといふ規定）とが定められてゐるが、聯句に於ては、去り嫌ふべき規定だけが設けられてゐる所に、相違點がある。

聯句の此の門類の分ち方が、何れの時代から行はれたものであるかは明らかでないが、『不渴抄』にはかやうな分類は記されて居ない所より見て、大體南北朝の時代からではなからうかと思はれる。そして、この門類の分ちは、江戸時代にまで引つづき用ひられて居た事は、寛文版の

『聯句初心抄』にも十二門の分ちが記されてゐることによつて明らかである。この『梅花無盡藏』に見える所は、乾坤・時候・氣形・體藝・生植・器財・食服・光彩・數量・複用の十門類であるが、『初心抄』の方では此他に人倫・所名・支體等の名目があつて、時候といふ名目が無い。これ等が如何なる内容のものであるかは、その名稱によつて大體の想像はつくが、特殊なものもあるので、一應の解説を加へると、乾坤は天地山川日月星等の類、時候は春夏秋冬の類、氣形は大體動物を指すものと見るべく、體藝（初心抄には態藝とある）は大體動詞形容詞の類を言ふものと考へて良い。（例へば悲・傷・愁・喜の類）。生植は植物を意味し、器財は道具材料等の意である。食服は食物や服飾であり、光彩は色彩や光澤の意で、丹朱墨清淡濃などその例である。複用は、『初心抄』には見えない名目であるが、虚押の字の類かと思はれる。そして、以上の門類に當てはめて、それぞれの文字が分類せられてゐる。従つて、對句を作るにも、光彩字に對しては光彩字を以て對し、生植字に對しては生植字を以てする、といふ風に定められてゐるのである。

前面之十句、春夏之氣象、則不雜秋冬之冷涼。他皆效之也。

これは第一の表十句に於ける禁制であつて、表十句の中に春又は夏の氣候景物が詠せられたならば、同じ表十句の中では、秋冬の冷涼を詠ずる事は禁ずるとの意である。發句は當季の景象を詠

ずるといふ事が定まつてゐるから、従つて表十句の中には他季を交へないといふことになる。その點で、連歌とは相違する。連歌では大てい表八句の第七句目が月の座となり、それを中心として發句の季節とは無關係に秋季の句が來る場合が多いからである。

於_二句中_一不_レ可_レ用_二同韻之字_一。挿而後、隔_二十句_一用_レ之。五十韻之中、態字_二、而虛字_三、亦可也。

これは聯句にのみ必要な注意であつて、韻字と同じ韻の文字は句中には用ひないのである。句中に用ひては、次々の韻字に妨げになる故である。若しさうした字を用ひた句があつた時には、少くとも十句を隔てねば、その同一字は用ひてはならない。且つそれなるべく同意でなく用ひねばならないとせられてゐるのである。次には、最初から五十韻までの間には、態字や虛字を二三用ひてもよろしいといふのである。

人之名多則點鬼簿歟。處之名多則輿地志歟。

これは、聯句中に、人名や地名を多く出しては見苦しいといふ注意である。かやうなものは、一名「朱引き」とも稱する。その文字に朱線を引いて、固有名詞であることを示すからである。人名が多ければ、まるで寺院の過去帳の如くであり、地名が多ければ地理書の如くであらうと洒落

てゐる。

夫佛語之烏鉢羅等、禪語之赤肉園等、莫森々、莫紛々、梵以梵對之、漢以漢對之、倭以倭對之。若至折角諸訛之處、則有私通車馬、豈敢守一隅。

この條は、先づ、梵語や禪語などは、あまり多く用ひてはならぬ事を説き、次で、對句を用ひる際の心得として、梵語を用ひた句には梵語を用ひた句を以て對句を作り、漢語のものには漢語のもので對し、日本語のものには日本語を以て對句を作るやうにせよといふのである。若しそれが、如何に苦心し骨折つても出來難い時は、裏道を通つた行き方をやつても差支はない。必ずしも規矩に拘泥する必要はないといふのである。

疊字・故事、忌其繁多。隔句、是謂扇對、扇對則五十韻中不可過二處三處、過三處爲甚矣。

疊字は文字を重ね用ひるもので、例へば「文文文苑鳥」とか「閑味味無味」の如きであり、又「片々」とか「丁々」とか二字重ねる場合もいふ。故事とは、句中に故事を詠じたものをいふ。かやうな疊字や故事の句は、多くては良くないといふのである。又、隔句は隔句對ともいひ、中間一句を隔てて對をするもの、例へば韓退之の寄孟刑部の聯句の中に「欲知相從盡、靈珀拾

織芥^ツ、欲^セ知^レ相益^シ多^ク、神樂銷^ス宿憊^ニとある如きである。これは、一人四句を詠ずる場合であればともかく、一人二句の場合であると、自己の二句に對して、附句者に對句を要求することとなるわけであるから、之を嫌つたものである。従つて、百句中に、せいぜい二ヶ所まで位に止めよと言ふのである。

江湖兄弟之高筵、莫^レ觸^シ今上蓮府及開山尊宿賓主年少等之諱^ニ。若觸^レ之則爲^ニ白官^ト。能守^ニ布置^ト爲^レ最^ト。

これは、貴人尊者の諱の字を警戒せよとの教へである。さうした文字を用ふるならば、明き盲たといふのである。

以上が、聯句に於ての式法の大略であるとのべて、この文を結んでゐるが、それには

是其大略也。且又至^ニ句之巧拙^ニ而、梨花李花之白、桃花杏花之紅、不可^レ不^レ辨。而、四書五經之語、能鍊^リ而用^レ之、則靈丹之一粒、點^レ鐵而成^レ金。不^レ鍊^レ而用^レ之、則大倉之紅腐無^ニ滋味^ト。吁^フ、老古錐之言如^レ此。謹錄^シ以爲^ニ聯句說^ト。

とある。老古錐なる人については、また調べが行き届かないが、恐らく禪僧の詩人であらうと考へてゐる。

第八章 結 語

以上、甚だ不得要領な敘述になつてしまつたので、簡単に、從來述べて來た事を要約し、聊かの所感を述べさせて頂くこととする。

聯句の發生は、柏梁臺聯句だと言はれるが、それは一種の儀禮的意識（君臣の治世謳歌）が中心であり、社交的な意味も含まれてゐて、聯句としての本來の性格はまだ十分ではないと考へる。聯句はやはり、六朝に到つて發生した問答體の聯句や連詩型ともいふべきものに到つて、その眞の性格があらはれたものと見るべきであらう。眞の性格といふのは、詩作力の相似た二人又は三人が、相寄つて共に一聯の句々を連ね、個人のみでは生み出し難い詩味を、一座の者の合力によ

つて創造する所にある。賈充夫妻の間答唱和は、我が萬葉集の相聞歌や平安時代の戀歌の贈答を思はせるものがあるが、和歌がそれぞれに獨立的な存在であるに比して、賈充等の作は、それぞれに於て完全に獨立してゐるものではなく、相互に相より相助けて、以て詩意を完結させてゐる點に、聯句としての性格があらはれてゐると思ふ。又、陶淵明や謝宣城などの、所謂連詩型の作品を見ると、各人が五言四句を用ひて、それだけで一篇の詩意を完成してゐるもの如くに見え、又、事實さやうでもあるが、さうした作が連ねられて、同一主題の線にそつて並べられてゐる所を見ると、各人單獨のものを味はふのとは異つた、綜合的詩境ともいふべき大きく廣い世界に面接する感じがある。これ等は絲竹管絃の合奏にも比べられようか。笛・篳篥・笙・琵琶・琴などの單獨の音色も愛すべきであるが、それ等が合奏せられて、一曲を成す時には、そこから別種の味はひが生れ、且つ深い音樂の世界が發現するのに酷似してゐるやうに思はれるのである。連詩型聯句の感興はかやうな所にあるかと思ふ。

又、韓退之や孟郊などが最も得意として居た五言二句宛を交互に附け進めてゆく聯句を見ると、それらは、一つの主題（例へば鬪雞なら鬪雞といふ主題）について、或はこれを時間的な経過に従つて描いたり、又空間的に各種の側面から描き出したりして、一座の者の協力で以て、個人單獨

では思ひ到り得ないやうな世界を展開し打出して來る所に、その感興があるわけである。而るに、各人の一回表現形態は、對句をなした五言二句であるから、一人としては自己の所思をそれだけでは完全に言ひ得るものではない。その點では連歌の一句と同様である。従つて、自己の作句は、前句といふもの（聯句で言へば、直ぐ前の一聯二句）との關連に於て、はじめてその機能を果し得るわけであつて、前聯後聯が相より相助けて、面白い詩境を展開してゆくわけである。従つて、この形態の聯句は、聯句する者同志の技倆が相伯仲し、それが所謂秘術をつくして附け進める時に、その感興は最高潮に達する。城南聯句の如きは、その典型的なものである。つまり、句を作り連ねてゆく瞬間々々に、聯句といふものの面白さがあり、全體として完成した後これを味はふといふ事には、さう大きい喜びはないものと言ふべきであらう。この點も、連歌の興味に似通ふ所があるかと思ふ。

聯句は其の性質上、會合し共作するといふ點に魅力がある。詩などを作る詩會も、會合し共に作詩するといふ點で、面白いものではあるが、共同して一篇を作るといふ風な、各人共通の關心的興味は無い。従つて、詩會などの餘興として、一座のくつろぎと楽しみを求める聯句の如きものが發達して來たのは、自然であり又意義のある事であつた。さうした性格の文藝であるから、

時に戲笑的な作が試みられることがあるのも當然である。中唐の太暦時代に、顔真卿などの一座で催された戲笑的な作品は、さうした空氣には生まれ出たものと思ふ。しかし漢土の文人は、この戲笑的なものの價値を認めようとはしなかつた。單なる言ひ捨てとしてこれをながめ、その表現形態も、七言を一句づつ言ひ連ねて、我が國の「物はづくし」の如きものにしたたり、又、古樂府の五雜俎のもぢりを試みたりして、五言二句又は五言四句といふやうな當時の聯句の常型をことさらに避けてゐる傾向がある。この點では、滑稽諧謔を好んで、勅撰集にまでも連歌部などを設けた平安後期の連歌人の方が、はるかに大膽であり勇敢であると言ひ得る。

二

漢土の連句をそのままに學んで作つたやうな作品も、平安時代には相當に存在したであらうと思はれるが、殘念な事には、さうした作品は、平安時代の詩文集には載せられてゐない。そして僅かに断片的に記しとどめられてゐるものは、『江談抄』に見える戲笑的なものと、『和漢朗詠集』の一例のみである。『朗詠集』のものも、やはり戲笑的なものであるところを見ると、平安時代人の意識に於いては、聯句は短連歌と同じやうな風に考へられてゐたものではないか、といふ事が

考へられて来る。眞面目な詩的な聯句も作られてゐたにも拘らず、さうしたものが残らないといふ事は、さうしたものは深い感興が感じられなかつたのではあるまいか。これは、眞面目に作つた聯句でも、それはやはり詩に比べると低位に見られ、記しとどめるに足りぬものと考へられたためかとも、一應は思はれるが、それならば戲笑的なものは尙更低く見られ、記しとどめられる可能性は一層に乏しくあるべきである。しかるに、戲笑的なものが小數であつても記しとどめられてゐるといふ事は、その戲笑的なものが聯句の特色として考へられてゐた爲であらうと思はれるのである。又、日本聯句は、形式に於ても、一人一句で、二人唱和して一聯の對句を成すといふ風な作も多かつたかと思はれる。これも又、我國の聯句と漢土の連句とに、創作して少く心理的興味の相違があつたためであると、考へざるを得ない。大きく言へば、國民性の相違であると言ふ事も出来よう。だが、日本聯句がかやうな風のものとなり、それを人々が面白がつたといふ事の最も近い原因は、短連歌の機智應酬の面白さを、聯句の世界にも推し及ぼして、聯句を連歌と同じやうなものとして、取扱つた所に胚胎してゐるのではあるまいか。即ち、平安時代の聯句は、その興味に於て、全く連歌の興味に影響せられて、日本聯句としての變貌を遂げさせられたものであると考へたい。

三

鎖連歌（長連歌）が発生したのは、短連歌に更に一句を加へて、その意境の展開の面白さを何人かが發見したことにあり、それを多くの人々がやはり面白く思ひ、支持し摸倣し流行し出した所にあると考へられる。従つて、聯句からの影響で、三句以上を連ねる長連歌が発生したとは考へ難い。その理由は、若し漢土の聯句に倣つて作り始めたとするならば、少くとも主題は一貫したものを持ち、その主題を様々の角度から描き出してゆくといふ風に進まねばならない。そしてそれは數人の合作による長歌の形態を取るものに向ふべき筈である。然るに、鎖連歌が、その名稱の示す如く、前後の兩句には意境の關連はあるが、その他の句々とは意味上全く無關係であるといふ事、又、同じ一句が、前の句とのつながりに於て構成する世界と、後の句とのつながりに於て構成する世界とは、がらりと變つてゆく事に於て、深い感興を感じるといふ事、などは、漢土の聯句に於ては全然に見られないものであるといふ點などから考へて、聯句の摸倣に出でた發生であるといふ事は、到底言ひ得ない。これは全く日本人が偶然に發見した新形態のものであると考へなくてはなるまいと思ふ。

又、鎖連歌は、短連歌を母胎として生れたものではあるが、その感興の性格は、兩者ひどく相違したものである點も、我々は注意しなくてはならない。「短連歌の感興は、機智問答の面白さであり、難問題を言ひかけた句に對して、見事な應答を以て切り返してゆく所に、感興の中心がある。然るに、鎖連歌は、前句と打越しの句との間に成り立つてゐる世界とは、全く違つた世界を、前句と附句とで作り上げ、同一句に二重の違つたはたらきをさせる所に感興の中心があり、句毎に意境が思ひもよらぬ方角に展開してゆく所にねらひがあるのである。従つて、鎖連歌は短連歌を母胎として生れはしたが、それは所謂「親に似ぬ鬼子」である。我々は、その間に共通する類似的の點としては、掛詞や縁語のもじりを以てする言語遊戯的な傾向を指摘することが出来る。鎖連歌に「物の名」的な賦物が用ひられてゐる點は、たしかに、短連歌の血を引いたものであると言ふべきだと思ふ。

鎖連歌が發達してゆく途上に、聯句からの影響を受けたと思はれる點は多々ある。句數の連續を百句といふ所にとどめた點。連歌を記してゆく懷紙の形式。第二句を入韻と呼び、又、句數をも百韻又は五十韻などと韻の字を附して呼ぶ事。月や花を詠ずる句といふものを必要とし、それ

を重要視した事、などは、たしかに聯句にならつたものであると思はれる。が、更に我々の感興を引くものは、聯句の韻に相當するものを求めて、物の名を詠み入れる賦物を考へ出した事であると思ふ。

聯句の二大特色は、二句一聯が對句的表現であることと、隔句に必ず韻をふむ事とである。この中の、二句一聯が對句的表現を持つといふ事は、連歌に於ては、長句と短句の交互連続であるために、それを摸することは形態上より言つて無理であり、又、短連歌に於て對句的表現を取つてゐるものも、その努力の割合に感興の乏しいものであつて、遂に發展しないで終つた例などより考へても、それが長連歌に於て摸倣せられることは、先づ不可能に近い。そこで、摸倣するとなれば、韻字を用ひることであるが、これも韻字といふものの無い日本語では無理な註文である。が、それも出来ないとなつては、連歌一篇を統一する形式的特色といふものが無くなる。そこで案出せられたものが賦物であつた。賦物であれば、古來「物の名」の歌に於て、我が國の歌人に親しまれ使用されて來たものであるから、容易である。

賦物は、我が連歌に於ては、長句は長句同志の間に二類の物の名を詠み入れ、短句は短句同志の間で、長句の類とは異なる一類のものを句毎に詠み入れた。初期の賦物が、鳥獸とか、魚鳥とか、

源氏國名とか、必ず二つの類の異つたものを組合せてゐるのは、そのためである。従つて、賦物が聯句の韻字に代るものとすれば、連歌は、長句には長句の韻、短句には短句の韻が、定められて、各句が韻を持つといふことになるわけである。漢土の聯句が、隔句に韻をふむのならへば、連歌も、短句のみに物の名を賦した賦物をとればよいわけであるのに、長句にも短句にも賦物をするといふことは、結局連歌は一人一句づつであるから、各人ともに賦物をとらねば面白くないといふ事が原因となつたものと考へられる。かくして出来上つた連歌を見渡す時は、長句と短句と交互に配列せられてゐる爲に、隔句に同一の韻がふまれてゐる如き觀を呈し、その點で聯句に似通つたものとなり得るわけであつた。

賦物は、更に進んで來ると、上賦下賦といふ形のものになつて來た。これは實作上より見ると、物の名を詠み入れるに比べて、何木山何などの、何に當る文字さへ句中に詠み入れれば良い次第であるから、詠み入れることが容易であるといふ利點がある。のみならず、木とか山とかの字は、全く伏せてあつて、ただ連歌の題の如くに卷首に「賦何木山何」と記されてゐるといふ形式をとつた所に、新しい韻字的意義が見出されると思ふのである。即ち長句には木といふ字に冠して熟語となる文字が、韻字代用として詠まれ、下句には山といふ字の下に連ねて熟語となる文字が韻

字代用として詠み込まれ、それが木とか山とかの共通の韻の所在を示すものとなつてゐるのである。従つて、「賦何木山何」といふ如き端書きは、見方をかへれば、伏せ隠されてゐるところの韻が、如何なるものであるかを、先づ知らせるものだ、といふことが出来る。これは、實に面白い工夫であると私は感心してゐるのである。

この上賦下賦の韻字代用としての用法は、やがて、單一の「山何連歌」といふ如き形式に變じ行つた。即ち長句に共通の賦物と、短句に共通の賦物とを、使ひ分ける事を止めて、長句にも、短句にも、同一の賦物をとるに到つたのである。従つて、隔句に押韻されてゐるといふ姿は無くなつて、各句が同一の押韻を持つといふ姿に變つた。これは、結局、賦物本來の意義（それが韻字代用のものとして案出されたといふ事）が忘れられ、又、物の名の賦物が更に上賦下賦といふ形にまで進められたことの意義も忘れられ、賦物を單なる連歌の形式又は飾りといふ風に考へるやうになつた爲であると思ふ。従つて、後になるほど通篇の賦物といふものは試みられなくなり、表八句だけとか、發句脇第三だけとかに、申譯的に賦物をするといふ風に變つて行つたのである。かやうな賦物的興味の減退は、何に原因するか、といへば、連歌の文藝的な味はひが、次第に進歩せしめられ、和歌の藝術味に匹敵することを求めて、遂に歌道と連歌道は全く同じものであ

るといふやうな理念のもとに、連歌の藝術性を高めた結果であると思はれる。賦物的な興味は、智的遊戯の面白さが中心である。さうした機智的言語遊戯にあきたりなくなれば、それが斥けられる事は當然である。沉んや賦物を取るが爲に、一句の藝術的表現に制約的な窮屈さを感じるに於ておやである。

四

鎖連歌の流行は、その連歌美を保つことの必要から、後世の連歌式目の源流となるやうな「連歌に於ける禁制の條々」・「心得條々」の如きものを發生せしめた。その最も古いものは「八雲御抄」の連歌の條にあげられてゐる、十五ヶ條ばかりの心得條々である。多人數によつて合作せられる連歌である以上、そこに何等かの規則がなければ、その連歌は變化と秩序の美を失つてしまふ結果となるからである。その規則は、次第に細密なものになり、煩瑣なものになつたが、それは連歌の一座に於ての疑義と論争とを防ぐが爲に、煩瑣な事までも規則としてあげなければならなくなつた爲である。かくて、後嵯峨院時代の連歌盛行を経て、文永建治弘安の頃には、所謂本式・新式・鎌倉式目などの式目が出来たのであつた。この式目といふものには、聯句の影響と

見るべきものは殆ど無い。聯句と連歌とはその性格に甚しい相違がある上に、漢土の聯句には、式目といふ如きものは無かつたからである。

五

一方翻つて、我國に於ける聯句の状態を見ると、誠に興味ある現象が發現してゐる。それは一言にして言へば、「聯句の和臭化」又は「聯句の連歌化」といふべきものである。平安時代の聯句が、短連歌から甚しい影響を受けてゐた事は既に述べた。それが下つて鎌倉時代の中期の頃になると、今度は、聯句が長連歌から強い影響を受けて、全く日本化せられた聯句となつてゐるのである。その状態は、『王澤不渴抄』に記されてゐる聯句創作の心得條々と、實際の作例とで明瞭にうかがひ得られる。例へば、發句は執筆が作り脇句は亭主が作るとか、月花等の名ある文字は一折に三回までは許すがそれ以上は使つてはならないとか、發句には當季の景若しくは當座の事を詠すべきであるとか、輪廻や同詞や同體に關しての制禁が設けられてゐるとかは、全然に漢土の聯句には無いものであつて、連歌の約束が聯句の中に形を替へて採用せられたものである事は明瞭である。かやうな聯句の連歌化が起つた事と、密接な關係に於て考へられるべき事として、

和漢連句の發生の問題がある。

六

和漢連句といふ文藝形態は、考へて見ると、まことに奇妙なもので、海外的文藝と國內的文藝とが、それぞれ本來の形を保ちながら、一つの文藝形態の中に結び合つてゐるのである。恐らくかやうな例は、世界の中に於ても類のないものであらう。かやうな形態の文藝が發生したのは、連歌を學ぶものと聯句を弄ぶ者とが、社交的に一座した際に、兩者共通の社交文藝を試みたことに端を發したものである事は、大體想像出來るのであるが、その地盤となつたものは、聯句が連歌化して來てゐたといふ事實であらうと思ふのである。即ち、連歌の中に漢句を數句さしはさんでも、それが一向に不調和な感じを起さないばかりか、そこに面白さが感じられるといふことは、聯句といふものの連ね方なり表現なりに、連歌的なものがよほど色こく浸潤してゐなくては、有り得ないことだと思はれるからである。

それと同時に、和漢連句といふものが發生し流行したことが、聯句作者には連歌といふものに對しての認識を高めさせ、連歌作者には聯句といふものに對しての造詣を高めさせて、相互の理

解と認識に大きい拍車をかけ、その結果、益々聯句の連歌化を促進したといふ事も考へなくてはならない。かくて、和漢連句といふものが、次第に連歌の一體の如くになつて行き、その結果として、連句の附け味に、新しい生面を開くに到つたのである。

和漢聯句が連歌にあたへた最も大きい影響は、連歌の附け方に、心附け又は句ひ附けともいふべき味はひをもたらしした事だと思ふ。和句から漢句への移り際、又、漢句から和句への移り際に於ては、聯句の特色である所の對句的な連續法や、連歌の特色であつた前句の縁語をたよつて寄合附けにする行き方は、その用を成さない。どうしても、前句全體の意境なり情趣なりに、全體的に應じて立つた附け方でなくては、附合ひの面白さといふものは生れない。この全體的に前句に應ずる行き方が、心附けや句ひ附けなのであるから、その點で漢句と和句との連續の仕方は、連歌に大きい影響を及ぼしてゐるものと見なくてはならないと思ふのである。尤も、心附けといふ行き方は、所謂疎句連歌の附け方であつて、本來は歌道の方面から開けて來たものであることは明らかであるけれども、その完成に大きい力となつたものとして、和漢連句といふものの存在は無視されてはならないのである。

和漢連句の作り方は、大體連歌の式目を規準として進められたものであつた。尤も、連歌の式

目に據るとは言つても、聯句的部分（漢句の部分）に、連歌の式目が完全に當てはまるといふ事は有り得ないのであるから、極く大體の規準を、連歌の式目に求めたに過ぎない。一座何句のものとか、季句の連続とか、差合去嫌ひなども、極めて大まかに考へられてゐる。それはそれで良いのであつて、和句と漢句とが、氣分情調を異にしながら、錯落として織り交へられ、全體として變化の面白さが醸し出されさへすれば、和漢の連句はそれで用が足りるのである。従つて、和漢連句の式目は遙かの後に、一條兼良によつて制定せられたのが最初のものである。

和漢連句の一種に、「漢和」と呼ばれるものがある。それは、第一句（發句）が漢句で以つて始められた形式のものである。その連ね方は、和漢連句と大同小異のものであるが、後には、和漢の式目に倣つて、漢和の式目といふものまでも作られてゐる。和漢と異なる處は、隔句に韻字を用ひるといふ點で、和句に於ても、句尾の言葉を漢字に直した時に、同韻の文字となるやうにしないでなければならないとせられてゐるが、これは實に愚な試みと評すべく、何等の藝術性をも與へない束縛に過ぎないものである。

和漢連句・漢和連句は、室町時代を経て、江戸時代にまで續き、その内容を變化することによつて、俳諧の和漢、俳諧の漢和として、一部の物ずきな俳人によつて、作り試みられた。貞徳門

には、この方面の作品を多く残した俳人がある。これも、漢詩的素養のある者と俳諧的素養のあるものが、社交的に作り楽しむといふ形式のものとして存続したのであつて、芭蕉にも山口素堂と共に作つた和漢連句一篇がある。この和漢連句が、更に進められ、従來の形式を打破して、漢詩句と俳諧との微妙な藝術的交響樂ともいふべき傑作となつたものが、蕪村の「春風馬埤曲」ではないであらうか。

七

聯句は前述した如く、益々和臭を帯びた構成のものとなつたが、又、それだけに漢詩文の素養のあるものには、入り易くもあり興味あるものとなつて、社交文藝として重視せられて來てゐる。應仁の戦亂以後になると、朝廷に於ては、連歌の會、和漢の會、聯句の會が、月例となつて催され、公卿や詩僧の清遊する娛樂となつてゐる。この傾向は戰國時代を経て、江戸時代にも及んだ。又、聯句の作品集として有名な『城西聯句』や、朝廷に於ける江戸初期の作品を集めた『風城聯句』などが生れたのも、聯句といふものに連歌に似通つた感興を感じる人々が多かつた爲であらう。室町時代の聯句の規則は、『梅花無盡藏』の聯句説から、その概要をうかがひ得られるが、

ここにも、聯句の連歌化してゆく姿が見られるのである。

以上を要約すると、海外文藝が、我國の風土や國民性の影響を受けて、次第々々に日本の風貌をおびたものに變つてゆく姿を、我々は聯句といふものの中にも、極めてはつきりと認めることが出來、それと同時に、日本化せられた聯句が、又様々な方面から、連歌の展開にも影響をあたへてゐる消息をも、うかがひ得るのである。海外文化の消化と吸収、これは新文化建設の上に、やはり無くてはならないものである事も、かやうな小部面の研究からも暗示せられる。

八

尙、最後に一言感想を述べて、愚稿の終りとしたい。それは、連歌・聯句・和漢・俳諧等の、連句藝術の意義についてである。これ等は、本來の出發は、社交的遊戯的興味から出發したものである。それには、眞面目なものもあれば、又戲笑的なものもある。我國に於ては、戲笑的なものから始まつて、次第に眞面目なものに變化してゆく傾向が見られるが、眞面目な文藝となつても、それが社交的感興に支持せられ、一座の作者の共同制作による融和親睦といふ事が、主要な

創作動機を成すものである事に於ては、變りは無いのである。従つて、連句藝術には、個性的なものを強調するとか、作者の個性の發現を必須要件とするとかいふ事は、第一義の問題ではなくて、相互の呼吸がうまく合致し、互が他の作をよりよく生かして、全體としての調和と秩序とに生きるといふことが、何よりも重要となつて來るのである。作者の個性的なるものは、この全體としての調和の中に變化の面白さを生み出すといふ點に於てのみ、尊重せられるのである。その點で、個人の力に於てのみ創作せられる和歌・俳句・詩・小説等とは、同一に取扱ふことは出來ない性格を持つてゐる。言はば、今日世界共通の文學のジャンルの中（詩歌・小説・戯曲・隨筆等）には、入り切れない特殊な性格である。その點から、連句非文藝説も生れ、遊戯説も唱へられて來たのである。私は、連歌や俳諧が遊戯文藝であつて眞の文藝とは言ひ難いといふ説に對して、別に異論を唱へようとも反駁を加へようとも思はない。遊戯文藝で結構だと考へてゐる。名稱や價值づけは如何やうにも考へ得られるものであるからである。ただ、宗祇などの連歌・芭蕉などの俳諧は、我國の文藝の中からは決して除外してはならない藝術的な味はひを持つものであり、すぐれた傑作であることを、少くとも我が國民は深く認識しなくてはならないことを申し度いのである。

著者略歴

大正十二年三月、京都帝大文學部
卒。大谷大學教授、京大講師・東
京高師教授等を経て、現在東京文
理科大學教授。文學博士。
主著 能樂源流考・世阿彌十六部
集評釋・古代劇文學・能樂研究・
幽玄論・連句藝術の性格。

昭和廿五年二月十日印刷
昭和廿五年二月十五日發行

聯句と連歌

定價四百圓

著者 能勢朝次

發行者 東京都文京區湯島町十一
前田善子

印刷者 東京都港區芝三田豐岡町八
川口芳太郎

發行所

東京都文京區
湯島町十一區

要書房

總管東京 一一三三番
電話大塚(六)一六三七番